

- アコニット根(雙關菊屬)及ヒ其製劑
- 藜蘆根
- 吐根及ヒ其製劑 附花勿兒氏散
- 結刺巴根
- 葯刺巴脂及ヒ其製劑
- 古爾矢屈謨子根及ヒ其製劑
- サバシラ子
- 番木籠子及ヒ其製劑
- 巴豆
- 加刺拔兒豆
- 籐黃
- 日本產大茴香

○衛生試驗所藥品其他検査手数料十七年十月
 當省衛生局(東京大試驗所)於テ舉行スル藥品其他ノモノ検査手数料左
 ノ通相定メ來ル十一月一日ヨリ徵收候條此旨告示候事

一藥品 一種ニ付箇數ノ多寡ニ拘ハラズ金五十錢(二十二年內務省以
 改正本項)印紙ヲ貼付スルモノハ別ニ一箇ニ付金壹錢ヲ徵シ印紙貼付

- ノ上仍ホ告示箋ヲ請求スルモノハ一葉ニ付金貳拾錢ヲ徵ス
- 一 左ノ各項手数料ハ一箇毎ニ徵收スルモノトス
 - 一 飲水及氷雪 飲料分析 金拾錢乃至五錢
 - 一 乳汁 飲料分析 金貳拾錢乃至拾錢
 - 一 酒類 飲料分析 金貳拾錢乃至拾錢
 - 一 飲食物 飲料分析 金貳拾錢乃至拾錢
 - 一 大氣及有害性瓦斯類 全量分析 金壹圓乃至五圓
 - 一 食器中有害性金屬 定性分析 金貳拾錢乃至拾錢
 - 一 衣服料 定性分析 金貳拾錢乃至拾錢
 - 一 礦泉 定性分析 金貳拾錢乃至拾錢
 - 一 顏料 定性分析 金貳拾錢乃至拾錢
 - 一 玩具其他着色物中有害性色質 全量分析 金貳拾錢乃至拾錢
 - 一 化學製品 定性分析 金貳拾錢乃至拾錢
 - 一 礦物及金屬 定性分析 金貳拾錢乃至拾錢
 - 一 警察及裁判關係諸品 検査ノ難易及之ニ要スル時日ノ長短ニ依リ 金五拾錢乃至五拾圓
 - 一 前各項外ノ諸品ハ其検査ノ難易及之ニ要スル時日ノ長短ニ依リ 金五拾錢乃至五拾圓
 - 一 右諸品時日ヲ限リ検査ヲ乞フモノハ試驗所ノ都合ニヨリ之ヲ許可スルヲアルヘシ然ルハ普通検査手数料ノ五倍以內ヲ増徴スヘシ

藥品營業並藥品取扱規則

○衛生試驗所ニ藥品等再検査請求手續内務省令第十四号初回ノ検査ニ對シ
不服アル者ハ再検査ヲ請フコトヲ得再検査ノ手数料ハ初回検査手数料
ノ三倍ヲ前納スヘシ

○結核病治療液使用取締方内務省令第三号
コソホ結核病治療液(クリン)ハ官立府縣立病院ニ限り之ヲ使用スルコ
トヲ得其他病院若クハ醫師ニシテ相當ノ準備アル病室ヲ有スル者之ヲ
使用セントスルトキハ豫メ地方長官ヲ經由シテ内務大臣ノ認可ヲ受ク
ヘシ内務大臣ハ中央衛生會ノ審議ヲ經テ之ヲ認可シ若クハ認可セザル
コトアルヘシ

該液ハ外來患者ニ使用スルコトヲ得ス
地方長官ハ該液ノ使用ニ關シ特ニ監督者ヲ派出シテ臨檢セシムルコト
アルヘシ

該液ヲ使用シタル者ハ左ノ書式ニ依リ其使用終結ニ至リタル患者ノ治
療表ヲ製シ毎月内務大臣ニ報告スヘシ
本令第一項第二項ニ違背シタル者ハ二十圓以内ノ罰金ニ處ス
(治驗表畧之)

○藥品巡視規則内務省令第四号
藥品巡視規則左ノ通之ヲ定メ明治二十三年三月一日ヨリ施行ス

藥品巡視規則

第一條 衛生官吏警察官及ヒ藥劑師ヲ以テ監視員ト爲シ藥局及ヒ藥品
ヲ販賣又ハ製造スル場所ヲ巡視セシムヘシ

第二條 監視員藥局ヲ巡視スルトキハ左ノ各項ヲ検査スヘシ

- 一 藥品
- 二 藥品營業並藥品取扱規則第十二條第十三條第二十八條第二十九
條第三十六條第三十七條ノ事項
- 三 調劑錄

第三條 監視員藥品ヲ販賣又ハ製造スル場所ヲ巡視スルトキハ左ノ各
項ヲ検査スヘシ

- 一 藥品
- 二 藥品營業並藥品取扱規則第二十二條第二十八條第二十九條第三
十六條第三十七條ノ事項

第四條 監視員ハ公私立病院及ヒ醫師ノ調劑所ニ臨ミ藥品ヲ検査スル
コトアルヘシ

第五條 第二條第三條ノ外ニ於テ藥品ヲ貯藏スル場所アレハ其場所ニ
就キ検査スルコトアルヘシ

第六條 巡視ノ期日ハ豫メ告示セシ其時間ハ午前八時ヨリ午後五時迄
ノ間トス

藥品營業並藥品取扱規則

第七條 監視員ハ必要量ノ藥品ヲ携歸シテ検査スルコトアルヘシ
第八條 監視員ノ検査ニ消費シタル藥品ハ其代價ヲ請求スルコトヲ得

○藥劑師試験規則二十二年三月
藥劑師試験規則左ノ通之ヲ定ム

藥劑師試験規則

第一條 藥劑師タラントスル者ハ此規則ニ據リ試験ヲ受クヘシ
第二條 藥劑師試験ハ内務大臣ニ於テ毎年二回試験主事者及ヒ試験委員ヲ選任シテ舉行スヘシ其舉行ノ地及ヒ試験期日ハ六箇月前之ヲ告示スヘシ

第三條 試験科目ヲ定ムルコト左ノ如シ
學 說

- 第一 物理學
- 第二 化學
- 第三 植物學
- 第四 生藥學
- 第五 製藥化學
- 實 地

- 第一 分析術
- 第二 藥品鑑定
- 第三 藥物製煉
- 第四 調劑術

第四條 試験ヲ受ケントスル者ハ其願書ヲ試験期日三箇月前ニ内務省

宛ニテ地方廳ニ差出スヘシ地方廳ハ試験期日一箇月前ニ之ヲ取纏メ
内務省ニ進達スヘシ

第五條 試験ニ及第シタル者ニハ試験主事者ヨリ試験委員ト連署シタル及第證書ヲ與フヘシ

第六條 受験者ハ試験開場ノ前日迄ニ手数料金五圓ヲ試験主事者ニ納ムヘシ

第七條 受験上不都合ノ所爲アル者ハ主事者ヨリ退場ヲ命スルコトアルヘシ

第八條 受験中疾病其他ノ事故アリテ試験ヲ完了セサル者及ヒ落第シタル者又ハ退場ヲ命シタル者ニハ手数料ヲ返付セス

第九條 此規則ハ明治二十三年三月一日ヨリ施行ス

○藥劑師廢業又ハ死亡ノトキ届方手續二十四年四月
明治二十二年三月法律第十號藥品營業並藥品取扱規則第八條届書ニハ免狀ヲ添付スヘシ其死亡ニ係ル届出ハ戶主之ヲ爲スヘシ戶主未定又ハ不在ナルトキハ死者ノ相續者相續者未定又ハ不在ナルトキハ其財産ヲ管理スル者之ヲ爲スヘシ

○石炭酸等傳染病流行ノ際販賣方明治十三年五月
第二十三號布告

藥品營業並藥品取扱規則

石炭酸其他劇藥ハ「本年一月」第壹號布告「藥品取扱規則」第四條ニ照シ可取
扱ノ處傳染病流行ノ際ハ内務省布達ニ從ヒ消毒藥ニ調製候分ニ限リ藥
舖ニ於テ販賣差許候條販賣望ノ者ハ其管轄廳ニ可願出此旨布告候事

○藥用阿片賣買并製造規則明治十一年八月
第廿一號布告

沿革略記 明治三年八月布告ヲ以テ生阿片取扱規則ヲ制定ス○十一年
八月第廿一號布告ヲ以テ前令ヲ廢シ藥用阿片賣買并製造規
則ヲ制定ス是レ現行法ナリ

明治三年八月布告生阿片取扱規則ヲ廢シ藥用阿片賣買并製造規則左ノ通相
定候條此旨布告候事

但施行ノ時日ハ追テ内務省ヨリ可相達事

藥用阿片賣買并製造規則

十一年內務省
第二十號
布告第一號
止ス

第一條 阿片ノ賣買及ヒ製造ハ藥用品ニ限リ此規則ニ依テ之ヲ許可ス

第二條 藥用阿片ハ内國產若クハ外國產ヲ論セス總テ内務省ニ於テ其品位
ヲ定メテ之ヲ買上ケ地方廳ヲシテ阿片卸賣特許藥舖ニ之ヲ拂下シムヘシ
(二十年勅令第五十
三號ヲ以テ改正)

第三條 地方廳ヨリ拂下クル阿片ハ量目一匁ヲ以テ一器トシ每器衛生試驗
所ノ印紙ヲ貼附スルモノトス(二十年勅令第五十
三號ヲ以テ改正)

第四條 地方廳ハ土地ノ廣狹位置ヲ度リ一管内相當ノ人員ヲ限リ藥舖ノ身
元人物ヲ選ミテ内務省ニ稟議シ鑑札ヲ受ケテ之ヲ本人ニ交付スヘシ
但廢業ノ者アル節ハ其鑑札ヲ内務省ニ返納スヘシ

第五條 特許鑑札ヲ受タル藥舖ノ住所姓名ハ該管轄廳ヨリ管内ノ公私病院
醫師藥舖一般ニ報告スヘシ

第六條 但廢業ノ者アル節モ本文ニ準シ速ニ報告スヘシ
特許鑑札ヲ受タル藥舖ハ其店頭ニ特許藥用阿片賣捌所ト大書シタ

藥用阿片賣買并製造規則

ル看板ヲ掲ケ置クヘシ

第七條 特許ヲ受タル藥舖ハ半年分賣捌ノ高ヲ豫算シ毎年兩度該地方廳ニ申立テ其拂下ケテ請フヘシ但缺乏ノ節ハ臨時拂下ケテ請フコトヲ得(二十
令第五十二號)
ヲ以テ改正)

第八條 凡ソ醫師病院及ヒ一般藥舖等ニ於テ藥用阿片ヲ要スルトキハ其量目并ニ其住所姓名及年月日病院ハ其名稱及ヒ院長若クハ副長ノ姓名ヲ記シ調印シタル證書ヲ以テ特許藥舖ニ就キ之ヲ購求スヘシ特許藥舖ニ於テハ之ヲ賣渡スニ其量目一度ニ四拾匁ヲ超ヘカラス

但病院及醫師等ニ於テ便宜ニ依リ一般藥舖ニ就キ之ヲ購求スルト一般藥舖相互ニ賣買スルトハ妨ケスト雖モ必ス本條ノ證書ヲ以テスヘシ且其量目一度ニ八匁ヲ超ヘカラス

第九條 凡テ内外國人共醫師ノ處分箋ヲ持參シタル者ノ外ハ特許藥舖并ニ一般藥舖ニ於テ一切之ヲ賣渡スヘカラス

第十條 特許藥舖ハ每半年分阿片拂受並ニ壹匁以上賣捌ノ高及ヒ買入ノ住所姓名並ニ壹匁以下賣捌ノ總高等明細表正副二通ヲ造リ其管轄廳ニ差出スヘシ尤壹匁以下ノ分ハ平常其明細ヲ簿記シ置キ臨時取調ノ用ニ供スヘシ

但管轄廳ハ其一通ヲ內務省ニ進達スヘシ

第十一條 醫師病院一般藥舖ニ於テハ每半年必シモ前條明細表ヲ差出スヲ要セスト雖モ平常其明細ヲ簿記シ置キ臨時取調ノ用ニ供スヘシ

第十二條 藥用阿片ヲ製造セント欲スル者ハ罌粟ノ種類及ヒ培養採收製造ノ方法ヲ記シ管轄廳ヲ經由シテ內務省ノ免許鑑札ヲ受クヘシ

第十三條 阿片製造人ハ其製造シタル阿片ノ量目ヲ記シ署名調印シタル願書ヲ以テ地方廳ヲ經由シ內務省ノ買上ケテ願フヘシ右買上ケテ受クルノ外決シテ内外人民ニ販賣スルコトヲ許サス

但內務省ニ於テ其品位藥用ニ適セサルモノトスルトキハ地方廳ヨリ其

旨ヲ製造人ニ通知シ其阿片ハ其應ニ預リ置クヘシ(二十年勅令第五十二號ヲ以テ但書改正)
 第十四條 阿片買上ケ及ヒ拂下ケノ代價ハ歲ノ豐凶及ヒ外國一般ノ相場等ニ因テ高低アルヘシト雖モ其品位ニ應シテ價格ヲ定ムルハ該藥主用ノ性分即チ「モルヒネ」ノ多少ニ因ルヘシ

第十五條 內務省ニ買上ケ及ヒ拂下クル阿片ノ「モルヒネ」含量ハ買上ケ品ハ百分中ニ九分以上拂下ケ品ハ百分中ニ十分以上ヲ含有スルモノトス(二十年勅令第五十二號ヲ以テ改正)

第十六條 此規則ニ違犯スル者ハ其犯情ニ從ヒ阿片賣買若クハ製造ヲ禁シ其所有ノ阿片ヲ沒收シ百五十圓ヨリ五百圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ

○藥用阿片受拂手續二十年三月六號 內務省訓令第六號
 地方廳ヨリ阿片卸賣特許藥舖ニ拂下ル藥用阿片受拂手續左ノ通相定ム
 藥用阿片受拂手續

- 一 地方廳ヨリ阿片ヲ拂下クルハ明治十一年八月第二十一號布告第四條ニ據リ特許ヲ得タル藥舖ニ限ルモノトス但外國人藥舖ニハ開港開市場アル地方廳ニ於テ之ヲ拂下ク可シ
- 一 地方廳ハ每半年分阿片拂下ノ高ヲ豫算シ一箇年兩度ニ內務省衛生局ヘ請求ス可シ但缺乏ノ節ハ臨時之ヲ請求スルモ妨ナシ
- 一 北海道廳ハ阿片ヲ內務省ヨリ受入シタルトキハ保管ノ轉管トシテ元受ヲナシ其保管及責任ハ物品會計規則ニ依ル(二十三年內務省訓令第五號)
- 一 地方廳ハ阿片ヲ內務省ヨリ受入シタルトキハ保管ノ轉換トシテ元受ヲナシ其保管及責任並ニ出納計算書ハ明治二十二年九月內務省訓令第三十六號內務省及所管廳物品出納規程ニ依ル(二十三年內務省訓令第五號)
- 一 地方廳ニ於テ阿片ヲ拂下クルトキハ其都度藥舖ノ住所氏名ハ外國人ナレバモ記スル瓶數代價月日等詳細簿記シ置キ每一箇年ニ由ル分雖形ノ報告書ヲ製シ之ニ特許藥舖ヨリ差出シタル明細表並外國人藥舖ヨリ差出シタル書面ヲ添ヘ會計年度經過後二箇月以內ニ進達ス可シ但阿片受拂報告ハ明治二十一年度ヨリ差出ス可キモノトス
- 一 地方廳ニ於テ內外國人藥舖ニ阿片ヲ拂下クルトキハ代價引換ニ現品ヲ拂渡ス可シ(二十三年內務省訓令第十號)
- 一 特許藥舖ニ於テ阿片ヲ販賣スルハ內務省告示ノ價格ニ相當ノ手数料ヲ加ヘ販賣スルモノトス

(報告書雜形略ス)

○阿片買上拂下價格二十年十月
阿片製造人ヨリ買上クヘキ内國產濕潤阿片並地方應ヨリ阿片卸シ賣特許
藥舖ニ拂下クル粉末阿片價格來ル明治二十一年一月一日ヨリ左ノ通相定
ム

買上價格

濕潤阿片^{百分中九以上十分未満モ} 百目ニ付金四圓五拾錢
但^{モルヒ子}含量十分以上ノモノハ本項ノ割合ニ依リ其價格ヲ増ス

拂下價格

粉末阿片^{モルヒ子}乃至十一分ノ含量十壹匁入壹瓶ニ付金拾錢

○醫師免許規則 明治十六年十月
第三拾五號布告

沿革略記

明治六年六月文部省第八拾九號達ヲ以テ現時醫術開業者ノ
明細書及醫師ノ人員等ヲ申達セシム○七年三月文部省達ヲ
以テ醫制ヲ定メ先ツ三府ニ於テ漸次施行セシム○八年二月文部省
ヨリ醫制ニ基キ新ニ醫術開業者ノ試驗科目ヲ三府ニ達ス○同年四

月醫制ヲ改正ス○同年六月第百拾貳號布告ヲ以テ文部省管理衛生
ノ事務ヲ内務省ニ屬ス○九年一月内務省乙第五號達ヲ以テ新ニ醫
術開業セントスルモノ、試驗科目ヲ定ム○十年八月内務省乙第七
十六號達ヲ以テ維新以來官廳及地方公立病院ニ於テ醫術ヲ以テ奉
職從事ノ者ハ試驗ヲ須ヒス免狀渡方ヲナサシム○十二年二月内務
省甲第三號達ヲ以テ文部卿ノ認可ヲ得タル醫學校ノ卒業生ハ試驗
ヲ要セス開業免狀ヲ下付スルモノトス○同年八月第三十九號布告
ヲ以テ醫師タル者醫業ニ關シ犯罪若クハ不正ノ行爲アルトキハ其
業ヲ停止若クハ禁止ス○十六年十月第三十五號布告ヲ以テ醫師免
許規則ヲ制定ス是レ現行法ナリ

醫師免許規則別冊ノ通制定シ 明治十七年一月一日ヨリ施行ス

但明治十五年^{二月}第四號布達同年^{八月}第三十九號布告ハ此規則施行ノ日ヨリ
廢止ス

(別冊)

醫師免許規則

第一條 醫師ハ醫術開業試驗ヲ受ケ「内務卿」ヨリ開業免狀ヲ得タル者トス

醫師免許規則

但此規則施行以前ニ於テ受ケタル醫術開業ノ證ハ仍ホ其効アリトス

第二條 開業免狀ヲ得ントスル者ハ試験及第證書ヲ以テ地方廳ヲ經由シテ内務省ニ願出ツヘシ

第三條 官立及縣府立醫學校ノ卒業證書ヲ得タル者其證書ヲ以テ開業免狀ヲ得ンコトヲ願出ツルトキハ「内務卿」ハ試験ヲ要セスシテ免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

第四條 外國ノ大學醫學部若クハ醫學校ニ於テ卒業シタル者或ハ外國ニ於テ醫術開業免許ヲ得タル者其卒業證書又ハ開業證書ヲ以テ開業免狀ヲ得ンコトヲ願出ツルトキハ「内務卿」ハ其證書ヲ審査シ試験ヲ要セスシテ免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

第五條 醫師ニ乏キ地ニ於テハ府知事「縣令」ノ具狀ニヨリ「内務卿」ハ醫術開業試験ヲ經サル者ト雖トモ其履歷ニヨリ假開業免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

第六條 開業免狀ヲ得ル者ハ免狀下付ノ節手数料金三圓ヲ納ムヘシ

第七條 開業免狀ヲ得タル者ノ氏名本籍ハ内務省ノ醫籍ニ登録シ時々之ヲ公告スヘシ

第八條 開業免狀ヲ毀損亡失シ又ハ氏名本籍ノ變換ニ由リ免狀ノ書換ヲ願フ者ハ其事由ヲ記シ地方廳ヲ經由シテ内務省ニ願出ツヘシ

第九條 開業免狀ノ書換ヲ願フ者ハ免狀下付ノ節手数料金壹圓ヲ納ムヘシ

第十條 醫師廢業又ハ死亡シタルトキハ地方廳ヲ經由シテ其開業免狀ヲ内務省ニ返納スヘシ

第十一條 醫師其業ニ關シ犯罪若クハ不正ノ行爲アルトキハ中央衛生會ノ審議ヲ經「内務卿」ニ於テ其業ヲ停止若クハ禁止スルコトアルヘシ
但其事開業免狀ヲ得ルノ前ニ在リト雖トモ本條ニ準シ處分スルコトアルヘシ

第十二條 前條ニ據リ醫業禁止ノ處分ヲ受ケタル者アルトキハ地方廳ニ於

テ直チニ其開業免狀ヲ取上ケ之ヲ内務省ニ返納スヘシ其停止ノ處分ニ係
ルモノハ幾年月日間停業シタル旨ヲ開業免狀ニ裏書シ廳印ヲ捺シテ之ヲ
本人ニ下付スヘシ

第十三條 「内務卿」ハ醫業禁止ノ處分ヲ爲シタル後ト雖トモ本人ノ行狀ヲ
勘査シ中央衛生會ノ審議ヲ經特ニ其禁止ヲ解クコトアルヘシ

○醫術開業試験規則第十六年十月
第三十四號布達
今般第三十五號ヲ以テ醫師免許規則布告相成候ニ付醫術開業試験規則別
冊ノ通相定メ明治十七年一月一日ヨリ施行ス
但明治十二年二月内務省甲第三號布達ハ同日ヨリ廢止ス

(別冊)

- 醫術開業試験規則
- 第一條 醫術ヲ開業セントスル者ハ此規則ニ據リ試験ヲ受クヘシ
 - 第二條 「内務卿」ハ毎年二回醫術開業試験ヲ舉行スヘシ但試験ヲ舉行スヘ
キ地方及ヒ試験期日ハ六ヶ月前之ヲ「内務卿」ヨリ告示スヘシ
 - 第三條 (七十二年内務省令第
七號ヲ以テ本條刪除)
 - 第四條 (同上)

- 第五條 醫術開業試験ハ之ヲ二期ニ分チ前期試験後期試験トス前後二期
ノ試験ヲ同時ニ受クルコトヲ得ス
但齒科醫術開業試験ハ全科一事ニ受クルモノトス
- 第六條 試験科目ヲ定ムルコト左ノ如シ
 - 前期試験科目
 - 第一 物理學
 - 第二 化學
 - 第三 解剖學
 - 第四 生理學
 - 後期試験科目
 - 第一 外科學
 - 第二 内科學
 - 第三 藥物學
 - 第四 眼科學
 - 第五 産科學
 - 第六 臨床實驗
- 第七條 齒科試験科目ヲ定ムルコト左ノ如シ
 - 第一 齒科解剖及生理
 - 第二 齒科病理及治術

第三 齒科用藥品

第四 齒科用器械

第五 實地試驗

第八條 前期試験ハ一ケ年半年以上後期試験ハ更ニ一ケ年半年以上修學セシ者ニ非レハ之ヲ受クルコトヲ得ス

但齒科齒術開業試験ハ二ケ年以上修學セシ者ニ非サレハ之ヲ受クルコトヲ得ス(十七年第二號布達)

第九條 前期試験ヲ受ケントスル者ハ其願書ニ履歷書及前期試験及第ノ證書ヲ副ヘ後期試験ヲ受ケントスル者ハ其願書ニ履歷書及前期試験及第ノ證書ヲ副ヘ毎年六月十二月中地方廳ニ差出スヘシ地方廳ハ翌月五日迄ニ其書類ヲ取纏メ内務省ニ進達スルモノトス

第十條 地方廳ニ於テ試験出願者中醫學ニ關シ犯罪若クハ不正ノ行為アリト認ムル者アルトキハ之ヲ内務省ニ具狀スヘシ内務省ニ於テハ中央

衛生會ノ審議ヲ經其情狀ニ因リ期限ヲ定メ試験ヲ許サ、ルコトアルヘシ

第十一條 試験問題ハ試験委員長試験委員協議ノ上之ヲ撰定シ試験場ニ臨ミ受験人ヲシテ筆答セシムヘシ(十二年內務省令第七號)

第十二條 (十二年內務省令第七號)

第十三條 試験ニ落第シタル者ハ半年ヲ終ルニ非レハ再試験ヲ請フコトヲ得ス

第十四條 醫術開業試験ヲ受クル者ハ試験開場ノ前日迄ニ左ノ手数料ヲ納ムヘシ

前期試験手数料 金三圓

後期試験手数料 金五圓

齒科試験手数料 金五圓

第十五條 受験中疾病及ヒ其他ノ事故アリテ試験ヲ中止シ又ハ落第シタル者ト雖モ前條ノ手数料ヲ返付セス

○入齒々抜口中療治接骨等營業者取締方(十八年三月十七號)
入齒々抜口中療治接骨等營業者ハ明治十六年十月第三十四號布達ニ據リ醫術開業試験ヲ經ルニ非サレハ新規開業不相成候條從來之營業者ハ此際各地方廳ニ於テ鑑札ヲ付與シ相當之取締法相立可申此旨相違候事但既ニ取締法相設居候向ハ更ニ本文之手續ヲ爲スニ及ハス

獸醫免許規則

○獸醫免許規則 明治二十三年八月 法律第七十六號

沿革略記 明治十八年八月第二十八號布告ヲ以テ獸醫免許規則ヲ制定ス○二十三年八月法律第七十六號ヲ以テ前令ヲ改正ス是レ現行法ナリ

朕獸醫免許規則ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

獸醫免許規則

第一條 獸醫ノ開業ハ農商務大臣ヨリ獸醫免狀ヲ受ケタル者ニ限ル

第二條 獸醫免狀ヲ受クルコトヲ得ル者左ノ如シ

- 一 獸醫免許試験ニ合格シ其ノ證書ヲ有スル者
- 一 官立府縣立ノ獸醫學校若ハ農學校ニ於テ獸醫學ヲ專修シ其ノ卒業證書ヲ有スル者
- 一 公立又ハ私立學校ニ於テ農商務大臣ノ認可シタル學則ニ依リ獸醫學ヲ專修シ其卒業證書ヲ有スル者
- 一 外國ニ於テ官立府縣立ノ獸醫學校若ハ農學校ト同等以上ノ學則ニ

二十一年農商務省令第十八號ヲ以テ學則ヲ定ム

依リ獸醫學ヲ專修シ其卒業證書ヲ有スル者

第三條 第二條ノ資格ヲ有スル者ニシテ獸醫免狀ヲ受ケント欲スルトキハ試験及第證書又ハ卒業證書ノ寫ヲ添ヘ地方廳ヲ經由シテ農商務大臣ニ出願スヘシ

第四條 獸醫免狀ヲ受ケタル者ノ氏名本籍ハ農商務省ノ獸醫籍ニ登録シ之ヲ公告スヘシ

第五條 獸醫廢業シタルトキハ本人ヨリ死亡シタルトキハ其ノ遺族又ハ親戚ヨリ三十日以内ニ地方廳ヲ經由シテ其免狀ヲ農商務省ニ返納スヘシ

第六條 獸醫免狀ヲ受クル者ハ其ノ免狀下付ノトキ手数料トシテ金一圓ヲ納ムヘシ

第七條 獸醫免狀ヲ毀損亡失シ若ハ氏名本籍ヲ變換シタルトキハ其ノ事由ヲ記シ地方廳ヲ經由シテ免狀ノ書換ヲ農商務大臣ニ出願スヘシ
書換ノ免狀ヲ受クル者ハ免狀下付ノトキ手数料トシテ金五十錢ヲ納ムヘシ

シ

第八條 獸醫業ニ關シ犯罪若ハ不正ノ行爲アリタルトキハ農商務大臣ハ情狀ヲ參酌シ五日以上五十日以下ノ範圍内ニ於テ其ノ業ヲ停止シ情狀ノ最モ重キモノハ之ヲ禁止スルコトアルヘシ

禁止ノ處分ヲ受ケタル者ハ十日以内ニ地方廳ヲ經由シテ獸醫免狀ヲ農商務省ニ返納スヘシ

第九條 第八條ノ禁止ノ處分ヲ爲シタル者ト雖モ三年ヲ經過シタル後情狀ニ依リ其ノ禁止ヲ解クコトアルヘシ

禁止ヲ解カレタル者ニシテ再ヒ獸醫免狀ヲ受ケント欲スル者ハ第三條及第六條ニ依ルヘシ

第十條 免狀ヲ受ケスシテ獸醫ノ業ヲ爲シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第十一條 獸醫業停止中其ノ業ヲ爲シタル者ハ二圓以上二十五圓以下ノ罰

金ニ處ス

第十二條 獸醫正當ノ事由ナクシテ其ノ業ニ關シ他人ノ依頼ヲ拒ミタルトキハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第十三條 獸醫免許試験規則ハ農商務大臣之ヲ定ム

附則

第十四條 獸醫ニ乏シキ地ニ於テハ當分ノ内北海道廳長官府縣知事ノ具狀ニ依リ農商務大臣ハ第二條ノ資格ナキ者ト雖モ出願者ノ履歷ニ依リ營業區域及年限ヲ定メ獸醫假免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

第十五條 第十四條ニ依リ獸醫假免狀ヲ受ケタル者ニモ亦此ノ規則ヲ適用ス

第十六條 明治十八年第十七號布達獸醫開業試験規則其ノ他此ノ法律ニ抵触スル規定ハ總テ廢止ス

○獸醫免許試驗規則二十三年九月
明治二十三年八月法律第七十六號第十三條ニ據リ獸醫免許試驗規則左ノ通之ヲ定ム

獸醫免許試驗規則

- 第一條 試驗ノ科目ハ左ノ如シ
 - 一 家畜解剖學
 - 一 生理學
 - 一 藥物學
 - 一 內科學及其ノ實地
 - 一 外科學及其ノ實地
 - 一 蹄鐵學及其ノ實地
- 第二條 試驗法ハ筆記及實地ノ二様トシ實地試驗ハ筆記試驗ヲ終ハリタル後之ヲ行フ但時宜ニ依リ口述試驗ヲ以テ實地ニ代フルコトアルヘシ
- 第三條 試驗ハ毎年二回之ヲ行ヒ其ノ場所及期日ハ六月十二月告示スヘシ
- 第四條 農商務大臣ハ試驗主事及委員ヲ選定シテ試驗ヲ行ハシム
- 第五條 試驗ヲ受ケント欲スル者ハ住所族籍生年月及受験地名ヲ願書ニ記載シ修學履歷書ヲ添ヘ一月若クハ七月中其ノ居住ノ地方廳ヲ經由シテ農商務大臣ニ差出スヘシ

- 第六條 受験者ハ試驗期日三日前受験地ノ宿處ヲ其ノ地方廳ニ届出ヘシ
- 第七條 試驗及第者ニハ試驗主事ヨリ及第證書ヲ附與スヘシ
- 第八條 不正ノ方法ヲ以テ及第シタルトキハ及第ノ効ナキモノトス
- 第九條 第十回獸醫免許試驗ニ限リ家畜ノ解剖學、生理學、藥物學、內科學、外科學ニ就キ筆記試驗ヲ行フ
- 獸醫假免許手續二十三年九月
明治二十三年八月法律第七十六號獸醫假免許規則第十四條ノ獸醫假免許手續左ノ條項ニ依リ取扱フヘシ
- 但明治十九年十一月當省訓令第二十一號假開業獸醫免許手續ハ廢止ス
- 獸醫假免許手續
 - 第一條 獸醫假免狀ノ下付ヲ願出ル者アルトキハ左ノ事項ヲ取調本人ノ願書及履歷書ヲ添ヘ具狀スヘシ
 - 一 營業區域ノ廣袤及地勢ノ險夷
 - 一 區域内牛馬ノ頭數
 - 一 營業年限
- 第二條 獸醫假免許區域内ニ於テ獸醫免許規則第二條ノ資格ヲ以テ免狀ヲ得タル獸醫ノ新ニ開業スル者アルトキハ免許年限中ト雖假免狀ヲ返納セシムルコトヲ得

第三條、獸醫假免狀下付ノ出願ニ係ル細則ハ北海道廳長官府縣知事之ヲ定ムヘシ

○獸醫蹄鐵工各免許規則ニ依リ學則認可請求方農務省令十一月十八號本年八月法律第七十六號獸醫免許規則第二條第三項及同年四月法律第三十一號蹄鐵工免許規則第二條第三項ニ依リ學則ノ認可ヲ請ハント欲スルトキハ左ノ條件ヲ具備シタル願書ニ學校名學校ノ位置及地方廳ヨリ學校設立ヲ認可シタル年月日ヲ記入シ教員ノ族籍氏名年齢及履歴ヲ認メタル書類學則及學科授業時間表ヲ添付シ其ノ校長又ハ校主名ヲ以テ地方廳ヲ經由シ農務大臣ニ差出スヘシ

但學則ノ認可ヲ受ケタル學校ノ校長又ハ校主ハ其ノ學校ノ卒業試驗終了ノ後十五日以内ニ地方廳ヲ經由シ卒業者ノ族籍氏名年齢及最終學期ノ試驗成績ヲ農務大臣ニ報告スヘシ

一 教員ノ員數及資格

一 獸醫學校教員ハ三名以上トシ内少シモ一名ハ農科大學獸醫學本科元東京農林學校獸醫學本科若クハ元駒場農學校獸醫學本科ヲ卒業シタル者又ハ之ト同等以上ノ學力ヲ有スル者

一 蹄鐵學校教員ハ二名以上トシ内一名ハ農科大學獸醫學本科元東京農林學校獸醫學本科若クハ元駒場農學校獸醫學本科ヲ卒業シタル者又ハ之ト同等以上ノ學力ヲ有スル者

二學科目

一 獸醫學校學科

動植物學及理化學
 病理學通論
 解剖學及其ノ實習
 生理學
 藥物學
 內科學
 外科學

產科學
 動物疫論及警察法
 病體解剖學及其ノ實習
 家畜飼養法蕃殖法及衛生論
 蹄鐵學及其ノ實習
 治療法實習

一 蹄鐵學校學科

撰鐵、鍛鍊、造蹄鐵及造鐵釘
 法實習
 蹄鐵學及其ノ實習

蹄ノ解剖、生理及病理論
 家畜衛生論

三 修學年限

一 獸醫學校滿三年以上

一 蹄鐵學校滿一年以上

○蹄鐵工免許規則 明治二十三年四月
法律第三十一號

朕蹄鐵工免許規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

蹄鐵工免許規則

第一條 蹄鐵工ハ農商務大臣ヨリ蹄鐵工免狀ヲ受ケタル者ニ限ル

蹄鐵工トハ他人ノ依頼ニ應シ蹄鐵ヲ裝シ又ハ蹄ヲ剪ルヲ以テ其ノ業ト爲ス者ヲ謂フ

第二條 蹄鐵工免狀ヲ受クルコトヲ得ル者左ノ如シ

- 一 蹄鐵工免許試験ニ合格シ其及第證書ヲ有スル者
- 一 官立府縣立ノ農學校若クハ獸醫學校又ハ陸軍部内ニ於テ獸醫學又ハ蹄鐵學ヲ專修シ其ノ卒業證書ヲ有スル者
- 一 公立又ハ私立學校ニ於テ農商務大臣ノ認可シタル學則ニ依リ獸醫學又ハ蹄鐵學ヲ專修シ其ノ卒業證書ヲ有スル者
- 一 外國ニ於テ官立府縣立ノ農學校若クハ獸醫學校ト同等以上ノ學則ニ

二十三年農商
務令第十八
號ヲ以テ學則
ヲ定メ
求手續

依リ獸醫學又ハ蹄鐵學ヲ專修シ其ノ卒業證書ヲ有スル者

一 獸醫開業免狀ヲ有スル者但獸醫假開業免狀ヲ有スル者ヲ除ク

第三條 第二條ノ資格ヲ有スル者ニシテ蹄鐵工免狀ヲ受ケント欲スルトキ

ハ試験及第證書又ハ卒業證書若クハ獸醫開業免狀ノ寫ヲ添ヘ地方廳ヲ經由シテ農商務大臣ニ出願スヘシ

第四條 蹄鐵工免狀ヲ受ケタル者ノ氏名本籍ハ農商務省ノ蹄鐵工籍ニ登録シ之ヲ公告スヘシ

第五條 蹄鐵工廢業シタルトキハ本人ヨリ死亡シタルトキハ其ノ遺族又ハ親戚ヨリ三十日以内ニ地方廳ヲ經由シテ其ノ免狀ヲ農商務省ニ返納スヘシ

第六條 蹄鐵工免狀ヲ受クル者ハ其ノ免狀下付ノトキ手数料トシテ金壹圓ヲ納ムヘシ

第七條 蹄鐵工免狀ヲ毀損亡失シ若クハ氏名本籍ヲ變換シタルトキハ其ノ

事由ヲ記シ地方廳ヲ經由シテ免狀ノ書換ヲ農商務大臣ニ出願スヘシ
書換ノ免狀ヲ受クル者ハ免狀下付ノトキ手数料トシテ金五拾錢ヲ納ムヘシ

第八條 蹄鐵工ハ正當ノ事由ナクシテ其ノ業ニ關シ他人ノ依頼ヲ拒ムコトヲ得ス

第九條 免狀ヲ受ケスシテ蹄鐵工ノ業ヲ爲シタル者ハ二圓以上二十五圓以下ノ罰金ニ處ス

第十條 第八條ヲ犯シタル者ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス
第十一條 蹄鐵工免許試験規則ハ農商務大臣之ヲ定ム

附則

第十二條 蹄鐵工ニ乏シキ地ニ於テハ當分ノ内北海道廳長官府縣知事ノ具狀ニ依リ農商務大臣ハ第二條ノ資格ナキ者ト雖モ出願者ノ履歷ニ依リ營業區域及年限ヲ定メ蹄鐵工假免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

第十三條 第十二條ニ依リ蹄鐵工假免狀ヲ受ケタル者ニモ亦此ノ規則ヲ適用ス

第十四條 此ノ規則施行以前免許ヲ受ケタル獸醫ニシテ蹄鐵工ヲ兼セント欲スル者ハ第三條ニ依リ蹄鐵工免狀ノ下付ヲ農商務大臣ニ出願スヘシ其ノ免狀ヲ受クル者ハ第六條ノ手数料ヲ要セス
第十五條 此ノ規則ハ明治二十三年十月一日ヨリ施行ス

○蹄鐵工免許試験規則二十三年七月農商務省令第六號
蹄鐵工免許試験規則ヲ定ムルコト左ノ如シ

第一條 蹄鐵工免許試験ハ蹄鐵ノ學術ニ就キ筆記口述及實地ヲ以テ之ヲ行フ

第二條 試験ハ毎年二回之ヲ行ヒ其ノ場所及期日ハ六月十二月告示スヘシ

第三條 農商務大臣ハ試験主事及委員ヲ選定シテ試験ヲ行ハシム
第四條 試験ヲ受ケント欲スル者ハ住所族籍生年月及受験ノ地名ヲ願書

ニ記載シ一月若シハ七月中其居住ノ地方應ヲ經由シテ農商務大臣ニ差
出スヘシ

第五條 受験者ハ試験期日三日前受験地ノ宿處ヲ其地方應ニ届出ヘシ
第六條 試験及第者ニハ試験主事ヨリ及第證書ヲ附與スヘシ
第七條 不正ノ方法ヲ以テ及第シタルトキハ及第ノ効ナキモノトス

○獸類傳染病豫防規則 明治十九年九月

農商務省令第十一號

沿革畧記

明治四年六月布告ヲ以テシベリヤ海岸ニリンドルベスト流
行ニ付家畜傳染病豫防法ヲ頒布ス○同年七月布告ヲ以テ大
學東校ニ於テ譯述シタルリンドルベスト病論及豫防法等ヲ頒布ス
○六年三月大藏省第貳拾五號達ヲ以テ北亞米利加ニ於テ馬病傳染
流行ニ付其豫防法ヲ頒布ス○九年二月內務省乙第二十號達ヲ以テ
傳染疫牛賠償撲殺法ヲ設ケ疫牛處分條例ヲ定ム○同年三月內務省
乙第廿四號達ヲ以テ傳染牛疫豫防法並斃死後處置方ヲ定ム○同年
九月內務省乙第百六號達ヲ以テ本省へ申出來リシ獸類劇症ノ發病

斃死ノ景況等自今直ニ勸業寮へ通信セシム○十四年四月第貳拾五
號達ヲ以テ農商務省ヲ設置シ牧畜事務ヲ同省ニ屬ス○十九年九月
農商務省令第十一號ヲ以テ九年內務省乙第貳拾號達其他獸類ノ傳
染病ニ關スル從前ノ達類ヲ廢シ更ニ獸類傳染病豫防規則ヲ定ム是
レ現行法ナリ

獸類傳染病豫防規則左ノ通制定シ明治二十年一月一日ヨリ施行ス

但明治九年^月內務省乙第二十號達其他獸類ノ傳染病ニ關スル從前ノ達類
ハ本規則施行ノ日ヨリ總テ廢止ス

獸類傳染病豫防規則

第一條 此規則ニ稱スル獸類トハ牛馬羊豕ヲ謂ヒ傳染病トハ左ノ諸病ヲ謂
フ

- 一 牛疫
- 二 炭疽熱
- 三 鼻疽及皮疽

四 傳染性胸膜肺炎

五 傳染性鵝口瘡

六 羊痘

第二條 獸類傳染病ニ罹リタルトキ若クハ其症候ノ疑アルトキハ所有者又ハ管理者ハ其患者ト健畜トヲ隔離シ獸醫ヲシテ患者及之ニ接近シタル獸類ヲ診察セシムヘシ

第三條 獸醫ハ獸類ヲ診察シ傳染病ト鑑定シタルトキハ所有者又ハ管理者ト連署シ直ニ警察署及戸長役場ニ届出ツヘシ

第四條 獸醫牛疫ト診断シタルトキハ警察官吏及獸醫立會ノ上所有者又ハ管理者ニ於テ之ヲ撲殺スヘシ

第五條 第四條ノ場合ニ於テハ三人以上ノ評價ヲ以テ發病前ノ價格ヲ定メ所有者ニ左ノ手當金ヲ下付スヘシ
評價金二十五圓マテ 手當金評價十分ノ四

評價金五十圓マテ 同 十分ノ三

評價金百圓マテ 同 十分ノ二

評價金二百五十圓マテ 同 十分ノ一

評價金五百圓マテ 同 十五分ノ一

評價金千圓マテ 同 二十五分ノ一

第六條 獸醫傳染病蔓延ノ兆候アリト認ムルトキハ直ニ其旨ヲ警察署及戸長役場ニ届出ツヘシ

第七條 第三條ノ届ヲ受ケタル戸長役場ニ於テハ其旨ヲ患者所在ノ近傍ヘ榜示スヘシ

第八條 傳染病畜ノ全癒又ハ斃死シタルトキ若クハ傳染病畜ヲ撲殺シタルトキハ其所有者又ハ管理者ハ獸醫ノ診断書ヲ添ヘ直ニ警察署及戸長役場ニ届出ツヘシ

第九條 傳染病ニ罹リテ斃死シ又ハ傳染病ニ由リテ撲殺シタル獸類並ニ其

排泄物及之レニ觸レタル飼料褥草等ハ警察官吏ノ指定シタル場所ニ於テ
燒棄スルカ又ハ消毒法ヲ施シ深六尺以上ノ坑ヲ掘リテ埋没スヘシ

但埋没シタル場所ハ十二箇年ノ後ニアラサレハ發掘スルヲ得ス

第十條 傳染病畜及其排泄物ニ觸レタル物品若クハ看護者ハ勿論其患畜ノ
在リシ場所ハ獸類ノ所有者又ハ管理者ニ於テ消毒法ヲ行フヘシ

第十一條 道路ニ於テ傳染病ニ罹リタル獸類若クハ其死體ハ警察官吏ノ指
定シタル場所ニアラサレハ轉移スルヲ許サス

第十二條 傳染病ノ流行ニ際シ警視總監北海道廳長官府縣知事ハ獸類市場
ノ開設及斃牛馬化成ニ關スル營業ヲ停止スルヲ得
但本條ノ場合ニ於テハ停止又ハ解停ノ都度其旨ヲ農商務大臣ニ届出ツ
ヘシ

第十三條 第三條第六條第八條ノ届ヲ受ケタル戶長役場ハ郡區役所ヲ經警

察署ハ直ニ所轄廳警視廳北海道廳ニ届出ツヘシ
府縣廳ヲ云フ

第十四條 警視總監北海道廳長官府縣知事ハ第三條及第六條ニ該當スヘキ
届ヲ得タルトキハ直ニ其旨ヲ管内及近接ノ地方廳ニ報告スヘシ(農商務省

令第六號ヲ以テ管内ノ下
ニ告示シ且ニ改ム)

但本條ノ報告ヲ得タル地方廳ハ直ニ其旨ヲ管内ニ報告スヘシ(二十二年
令第六號ヲ以テ告示
トアルヲ報告ト改ム)

第十五條 警視總監北海道廳長官府縣知事ハ第十三條ノ届ヲ得タルトキハ
毎土曜日其旨ヲ農商務大臣ニ届出ツヘシ

第十六條 警視總監北海道廳長官府縣知事ハ第六條ニ該當スヘキ届ヲ得タ
ルトキ及管下接近ノ地方ニ傳染病蔓延ノ兆候アリトノ報告ヲ得タルトキ
ハ豫防線ヲ劃シ獸類ノ出入往來ヲ停止スルヲ得(二十二年農商務省令第六
號ヲ以テトキハノ下農商
務大臣ノ允許ヲ得
ヲノ十一字ヲ削ル)

第十七條 牛疫蔓延ノ際ニ限リ其患畜ニ接近シタル牛ハ假令健康ノモノタ
リトモ警視總監北海道廳長官府縣知事ニ於テ之ヲ撲殺セシムルヲ得(二十
二年

農商務省令第六號ヲ以テ於テノ下農商務大臣ノ允許ヲ得タル後ノ十三字ヲ削ル

但本條ノ場合ニ於テハ第五條ノ手續ニ據リ評價金ノ全額ヲ下付スヘシ

第十八條 牛疫ヲ除クノ外傳染病蔓延ノ際ニ於テハ警視總監北海道廳長官

府縣知事ハ其患畜ヲ撲殺セシムルヲ得(二十二年農商務省令第六號ヲ以テタル後ノ十三字ヲ削ル)

但本條ノ場合ニ於テハ第五條ノ手續ニ據リ手當金ヲ下付スヘシ

第十九條 此規則ニ違背シタル獸醫及獸類所有者又ハ管理者ハ二圓以上二

十五圓以下ノ罰金ニ處ス

但刑法ニ正條アルモノハ此限ニアラス

○第十類 褒賞、恩給、救恤

○褒章條例 明治十四年十二月
第六十三號布告

沿革略記

明治二年七月達府縣奉職規則中ニ忠孝節義篤行者賞與取扱

ヲ定メ其輕賞ハ府縣ニ委任シ重賞ハ稟裁ヲ經テ施行セシム

定ム○同年十二月辨官達ヲ以テ尙ホ賞與ノ緩急ヲ計リ其取扱方ヲ

示ス○五年正月第十二號達ヲ以テ三年十一月及十二月辨官達ヲ廢

シ褒賞ハ事ノ細大ヲ論セス稟裁ヲ經テ施行セシムト雖モ賞與ノ時

機ヲ失フノ虞アルモノハ輕賞ニ限リ臨機ノ處置ヲ示ス○八年七月

第百二十一號達ヲ以テ篤行及ヒ奇特者賞與條例及ヒ學校病院其他

道路橋梁及濟貧恤窮等ノ費用ヲ出スモノ、賞與規則ヲ定ム○十四

年十二月第六十三號布告ヲ以テ褒章條例ヲ制定ス是レ現行法ナリ

(別紙)

褒章條例

褒賞條例

第一條 凡ソ自己ノ危難ヲ顧ミス人命ヲ救助セシ者又ハ德行卓絶ナル者
孝子順孫節婦義僕ノ類 又ハ實業ニ精勵シ衆民ノ模範タルヘキ者又ハ公衆ノ利益ヲ興
シ成績著明ナル者 疏河築隄修路墾田ノ業或ハ貧院學校設立ノ類ヲ云フ 又ハ公同ノ事務ニ勤勉シ勞
効顯著ナル者ヲ表彰スル爲メ左ノ三種ノ褒章ヲ定ム(二十三年勅令第七十
正同年勅令第百二十六號ヲ以テ) 又ハ公同云々ノ十八字ヲ加フ)

紅綬褒章

右自己ノ危難ヲ顧ミス人命ヲ救助セシ者ニ賜フモノトス

綠綬褒章

右德行卓絶ナル者又ハ實業ニ精勵シ衆民ノ模範タルヘキ者ニ賜フモノトス

藍綬褒章

右公衆ノ利益ヲ興シ成績著明ナル者又ハ公同ノ事務ニ勤勉シ勞効顯著ナ
ル者ニ賜フモノトス(二十三年勅令第百二十六號ヲ以テ又ハ公同云々ノ十八字ヲ加フ)

第二條 奇特ノ實行アリト雖モ褒章ヲ賜フヘキ場合ニ至ラサルモノハ褒狀

ヲ與フコトアルヘシ

第三條 已ニ褒章ヲ賜ハリタルモノ再度以上同様ノ實行アリテ褒章ヲ賜フ
ヘキトキハ其都度節版一箇ヲ賜與シ其章ノ綬ニ附加セシメ以テ標識トス

第四條 褒章ハ本人ニ限り終身之ヲ佩用シ及ヒ徽號トナスヲ得然レトモ重
罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ之ヲ沒收シ其未タ授與セサル前同上ノ刑ニ
處セラレタル者ニハ之ヲ授與セス

(褒章ノ圖及佩用式略ス)

○褒章ト金銀木盃金圓賜リ方明治十六年一月
第一號布告

明治十四年十一月第六拾三號布告褒章條例ニ依リ褒章ヲ賜フヘキ者又ハ
公益ノ爲メニ金穀財産等ヲ寄付シタル者ハ金銀木杯若クハ金圓ヲ賜ヒ
又ハ褒章ト金銀木杯金圓ヲ併セ賜フコトアルヘシ

○褒章條例取扱手續第十四號十二月
今般第六十三號ヲ以テ褒章條例布告候ニ付取扱手續左ノ通相定候條此
旨相達候事

但明治八年七月第二十一號達ハ右條例施行ノ日ヨリ廢止候事

第一條 凡ソ褒章ヲ賜フヘキ者アルトキハ其管轄長官ヨリ内務卿又ハ
農商務卿ニ具申シ内務卿又ハ農商務卿ハ其當否ヲ審査スヘシ
但官吏職務上ニ於テ人命ヲ救助シ又ハ公益ヲ興シタルハ褒章ヲ賜
フノ限リニアラス

第二條 内務卿又ハ農商務卿ニ於テ褒章ヲ賜フヘキモノト思量スルト
キハ之ヲ賞勳局總裁ニ申牒スヘシ賞勳局總裁ハ其申牒ニ據リ勅奏任
官并ニ從六位以上及ヒ勳六等以上ノ者及ヒ華族ノ戶主ニハ褒章ヲ直
授シ其他ノ者ハ内務卿又ハ農商務卿ヲ經由シ其管轄長官ヲシテ之ヲ
傳達セシムヘシ

但外國人ニ危難救助ノ褒章ヲ賜フヘキトキハ外務卿ヨリ賞勳局總
裁ニ申牒スヘシ授與ノトキモ亦同卿ヲ經由シテ之ヲ傳達セシムヘ
シ其公私僱ニ係ル者ハ本條ニ同シ

第三條 褒狀ハ管轄長官ヨリ與フルモノトス然レモ勅奏任官并ニ從六
位以上及ヒ勳六等以上ノ者及ヒ華族ノ戶主内務卿又ハ農商務卿ニ
具申スヘシ内務卿又ハ農商務卿ハ之ヲ太政官ニ上申シ太政官ニ於テ

之ヲ賜フヘシ

○金銀木杯金圓賜與手續第十六號三月

本年第壹號布告ノ旨ニ依リ金銀木杯又ハ金圓賜與手續別紙ノ通相定候
條此旨相達候事

(別紙)

金銀木杯金圓賜與手續

第一條 褒章ヲ賜フヘキ者ニ金銀木杯又ハ金圓ヲ賜ヒ又ハ褒章ト之ヲ
併セ賜フトキハ其等差左ノ如シ

定例

第一等 木杯三組等品格ヲ三又ハ金拾圓ヨリ多カラス六圓ヨリ少カラス
第二等 木杯三組等品格ヲ三又ハ金五圓ヨリ多カラス貳圓五拾錢ヨリ
少カラス

第三等 木杯壹個等品格ヲ三又ハ金貳圓ヨリ多カラス壹圓ヨリ少カラス
但賜杯賜金ニ及ハサルモノハ褒狀ヲ與フルコトアルヘシ

特例

第一等 金杯壹個又ハ三組又ハ金圓
第二等 銀杯壹個又ハ三組又ハ金圓

第二條 公益ノ爲メニ金穀財產等ヲ寄附シタル者ニ金銀木杯ヲ賜ヒ又
ハ褒章ト之ヲ併セ賜フトキハ其等差左ノ如シ

褒賞條例

寄附金額又ハ價格
拾圓未滿

褒狀

但壹圓未滿ハ褒詞ヲ以テ褒狀ニ換フルコトアルヘシ(十七年第二十二號)
拾圓以上百圓未滿 木杯一個(遠テ以テ但從追加)

但五拾圓未滿ハ拾圓毎ニ五拾圓以上ハ貳拾五圓毎ニ價格ニ等差アリ

百圓以上五百圓未滿 木杯三組

但三百圓未滿ハ五拾圓毎ニ三百圓以上ハ百圓毎ニ價格ニ等差アリ

但千圓未滿ハ貳百五拾圓毎ニ千圓以上ハ五百圓毎ニ價格ニ等差アリ

貳千圓以上五千圓未滿 銀杯三組

但千圓毎ニ價格ニ等差アリ

五千圓以上壹萬圓未滿 金杯壹個

但貳千五百圓毎ニ價格ニ等差アリ

壹萬圓以上 金杯三組
第三條 金銀杯又ハ特例金圓又ハ褒章ト金銀木杯又ハ金圓ヲ併セ賜フ
事項ハ賞勳局總裁之ヲ管理スルモノトス
褒狀又ハ木杯又ハ定例金圓ノミヲ賜フ警ハ視總監府知事縣令管理施

行スルモノトス

但勅奏任官奏任官以上ノ待遇ヲ受クル者并從六位以上及ヒ勳六等以上ノ者及ヒ華族ノ戶主其祖父母父母妻嫡長子孫及其妻ニ賜フヘキトキハ第四條ニ準據スヘシ(二十四年關令第一號)

第四條 金銀杯又ハ特例金圓又ハ褒章ト金銀木杯又ハ金圓ヲ併セ賜フヘキ者アルトキハ警視總監府知事縣令ヨリ内務卿又ハ農商務卿ニ具申シ内務卿又ハ農商務卿ハ之ヲ審査シ賞勳局總裁ニ申牒スヘシ

賞勳局總裁ハ其申牒ニ據テ勅奏任官奏任官以上ノ待遇ヲ受クル者并從六位以上及ヒ勳六等以上ノ者及ヒ華族ノ戶主其祖父母父母妻嫡長子孫及其妻ニハ之ヲ直授シ其他ノ者ハ内務卿又ハ農商務卿ヲ經由シ警視總監府知事縣令ヲシテ之ヲ傳達セシム(二十四年關令第一號)

第五條 金銀木杯又ハ金圓又ハ褒狀ヲ受クヘキ者ニシテ其未タ授與セサル前重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ之ヲ授與セス

第六條 外國人ニ金銀木杯金圓又ハ褒狀褒詞ヲ賜フヘキ者アルトキハ總テ内國人ノ例ニ準スト雖モ公使館員及帝室ノ貴賓ニ係ルトキハ外務大臣ヨリ賞勳局總裁ニ申牒シ授與ノトキハ亦同大臣ヲ經由シテ之ヲ傳達セシム(二十四年關令第一號)

○警察賞與規則(二十一年十一月)

警察賞與規則左ノ通相定ム(二十一年十一月)

警察賞與規則左ノ通相定ム

褒賞條例

警察賞與規則

- 第一條 警察上功勞アル者ハ本則ニ依リ賞與スヘキモノトス
- 第二條 警察賞與ヲ分テ左ノ三種トス
 - 甲種 金三圓以上拾五圓以下
 - 乙種 金五圓以下
- 特別賞 金拾五圓以上三拾圓以下
- 特別賞ハ事ノ重要ニ涉リ功勞ノ特ニ著明ナルモノニ限リ之ヲ給スルコトヲ得
- 第三條 犯罪事件ニ關スル功勞ノ賞與ハ左ノ各項ニ依ル
 - 第一項 左ノ罪犯ヲ現行ノ場合ニ於テ捕獲シ又ハ容易ニ捕獲スルヲ得セシメタル者
 - 甲種
 - 一 國事ニ關スル重罪犯
 - 二 兇徒聚衆ニ關スル重罪犯
 - 三 貨幣偽造變造ニ關スル重罪犯
 - 四 人命ニ關スル重罪犯
 - 五 放火ニ關スル重罪犯
 - 六 強盜ニ關スル重罪犯
 - 乙種

- 一 貨幣偽造變造ニ關スル輕罪犯
- 二 竊盜ニ關スル罪犯
- 第二項 前項ノ罪犯ヲ分明ニ訴出タル者亦前項ノ區別ニ同シ
- 第三項 第一項ノ場合ニシテ罪犯暴行脅迫ヲ以テ抗拒シタルトキハ其難易ニ因リ及第一項ニ掲ケル罪犯ニシテ其未遂ノ時ニ訴出タル者ハ其乙種ハ金三圓以上拾圓以下甲種ハ五圓以上貳拾圓以下ノ金額ヲ賞與スルコトヲ得
- 第四項 前數項ノ外其功勞ノ前數項ニ比シ相下ラサルモノハ其適度ニ應シ賞與スルコトヲ得
- 第五項 前數項ニ該當スルモノト雖モ事ノ最モ輕キモノ又ハ功勞ノ最モ尠キモノ若シハ金圓ヲ賞與シ難キ事情アル者ハ賞詞ヲ與フルコトヲ得
- 第四條 水火災其他犯罪ニ關セサル功勞ハ乙種ノ賞ヲ給與スヘシ但其功勞ノ大ナル者ハ甲種ノ賞ヲ與フルコトヲ得
- 第五條 罪犯判決前ニ逃亡又ハ死去シタル場合若クハ賞譽スヘキ事件ノ完結セサル前ト雖モ其疑ナキモノハ賞與ヲ施行スルコトヲ得
- 第六條 賞與ハ何等ノ場合ヲ問ハス一旦施行シタル後ハ之ヲ變更スルコトヲ得ス
- 第七條 本則ニ定メタル賞與ノ金額ハ一事件ノ賞トス但第三條第一項

褒賞條例

ノ場合ハ一罪犯ニ付テノ賞トス
數事件數罪犯ニテ功勞者一人ナルトキハ數事件數罪犯ノ賞ヲ各別ニ
給與スヘシ

一事件若クハ數事件一名若クハ數名ノ罪犯ニシテ功勞者數人ナルト
キ之ヲ賞與スルニハ一事件若クハ一罪犯ニ對スル金額又ハ數事件若
クハ數罪犯ニ對スル金額ヲ適宜功勞者ノ人員ニ配當給與スヘシ
第八條 功勞者賞與施行前ニ死去シタルトキハ賞與ノ金額ハ親屬ノ最
近ナル者ニ給ス若シ親屬ナキトキハ戸長ニ交付シテ祭祀料ニ充用セ
シムヘシ

其所在不分明ナルトキ亦同シ但親屬ナキ者ニシテ三十六ヶ月ヲ經過
シタルトキハ賞與ヲ施行セス

第九條 公權ヲ剝奪セラレタル者ニハ賞ヲ與ヘス

第十條 自己又ハ親屬ノ利害ニ關スル事件ニ付テハ賞ヲ與ヘス但其功
勞ノ特ニ著明ニシテ一般ニ洪益ヲ及ホスモノハ時宜ニヨリ之ヲ賞與
スルコトヲ得其被害者ト利害ヲ共ニスル者亦同シ

第十一條 犯罪其親屬ニ係ルトキハ總テ賞與スルコトヲ得ス

第十二條 第八條第十條第十一條ニ於テ親屬ト稱スルハ刑法第百十四
條第百十五條ニ記載シタル者ヲ云フ

第十三條 巡查ニシテ左ノ各項ニ該當スル者ハ本則ニ定ムル賞與ノ區

別ニ從ヒ甲種以下及特別賞ヲ與フルコトヲ得

第一項 第三條ニ掲クル罪犯ヲ捜査シ又ハ捕獲シ其功勞著シキ者

第二項 前項ニ該當セスト雖モ其功勞ノ前項ニ比シ相下ラサル者

第三項 第四條ニ掲クル事項及流行病ニ付其功勞著シキ者

第四項 自己ノ危難ヲ顧ミス人命ヲ救援シタル者

第十四條 巡查罪犯ヲ捕獲シテ功勞アリト雖モ未タ拘留セサル前ニ逃
走セシメタルモノハ賞與スルコトヲ得ス

第十五條 巡查私事旅行中其管内ニ於テ捕獲シタルトキ亦同シ

ハ其職務上ニ於テ爲シタルモノト同一ノ賞ヲ與フヘシ

第十六條 巡查ニシテ一般人民共ニ人命ヲ救援シタルトキハ賞與スヘ
キ金額ヲ救援者ノ全數ニ分賦シ其巡查ニ屬スル金額ヲ賞與スヘシ

第十七條 本則第七條乃至第十一條ハ巡查ノ賞與ニ付テモ亦之ヲ適用
ス

第十八條 巡查ノ賞與ハ其所属應ニ於テ施行シ其他ハ左ノ區別ニヨリ

各管轄廳 東京府ハニ於テ施行スヘシ

第一項 訴ヲ受タル地ノ管轄廳

第二項 罪犯ヲ最初ニ受取タル地ノ管轄廳

第三項 犯罪事件ニ屬セサルモノハ其事件ノ生シタル地ノ管轄廳

第十九條 賞與スヘキ事件若シハ功勞者ノ數官廳ニ牽連スルモノハ互ニ協議ヲ盡シ其金額ヲ定メ之ヲ差分シ又ハ功勞ノ多少ニ依リ適宜分割シ各其應ニ於テ賞與スヘシ

第二十條 警部其他警察事務ニ從事スル者ニシテ功勞アルトキハ巡查ノ例ニ準シ賞與スルコトヲ得

第二十一條 特別賞與ヲ行フタルトキハ其都度狀ヲ具シ報告スヘシ
(第二十二年內務省訓令)

第二十二條 賞與ノ費額ハ各其所屬ノ經費ヲ以テ支辨スヘシ

○看守押丁賞與方二十二年一月一號内務省訓令第一號

看守押丁ニシテ左ノ各項ニ該當スル者ハ明治二十一年十月內務省訓令第二十一號警察賞與規則ニ據リ功勞ノ適度ニ應シ金拾五圓以下ヲ賞與スヘシ

- 一 反獄ヲ鎮制スルニ當テ其功勞著シキ者
- 二 自己ノ監守ニ非サル在監人ニシテ逃走スル者ヲ捕獲シ其功勞著シキ者
- 三 監獄内ノ水火風震及ヒ流行病ニ付其功勞著シキ者
- 四 自己ノ危難ヲ顧ミス在監人ノ性命ヲ救援シタル者

三十四年第六十三號
ハ本類ニ載ス

○黃綬褒章 明治二十年五月 勅令第十六號

朕黃綬褒章臨時制定ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 私財ヲ獻納シ防海ノ事業ヲ贊成スルモノニ授與スル爲メ黃綬褒章ヲ制定シ分テ金章銀章ノ二種トス

第二條 黃綬褒章ヲ佩用シ又ハ沒收スルノ事項ハ明治十四年十二月第六十三號褒章條例ニ據ル

第三條 黃綬褒章ノ圖式左ノ如シ
(圖式畧之)

○帝國憲法發布記念章 明治二十二年八月 勅令第三百三號

朕帝國憲法發布記念章制定ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 大日本帝國憲法發布記念章ハ金銀ノ兩種トス

第二條 記念章ヲ頒賜スルハ憲法發布式ニ關リタル親王以下ノ諸員ニ限
ル 判任官以
下ヲ除ク

第三條 記念章ノ圖式左ノ如シ

章 圓形徑九分餘金若クハ銀
輪郭内表面ニ菊御紋ト高御座位大勳位素花頭飾等ノ圖式面ニ明治
二十二年二月十一日大日本帝國憲法發布記念章ノ二十三字ヲ識ス

環 圓形金若クハ銀

綬 幅一寸二分旭日桐花章ノ綬ヲ用フ

第四條 記念章ハ本人ニ限り終身之ヲ佩用シ子孫之ヲ保存スルヲ許ス其ノ
之ヲ沒收スルノ事項ハ明治十四年第六十三號布告褒賞條例ニ依ル
(記念章ノ圖畧之)

佩用式

三十四年第六十
三號布告褒賞
條例ハ本類ニ
ス

一 綬ヲ用テ左胸ニ佩フ

一 記念章ヲ四等以下ノ勳章若クハ記章褒章ト併佩スル時ハ勳章ノ左記
章褒章ノ右ニ列シテ佩フヘシ

○官吏恩給法 明治二十三年六月 法律第四十三號

沿革畧記 明治十七年一月第一號達ヲ以テ官吏恩給令ヲ定ム○十八年
三月第十五號達ヲ以テ官吏恩給令附則ヲ定ム○二十三年六
月法律第四十三號ヲ以テ官吏恩給法ヲ制定ス是レ現行法ナリ

朕官吏恩給法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

官吏恩給法

第一條 文官判任以上ノ者退官シタルトキハ此法律ノ規定スル所ニ依リ恩
給ヲ受クルノ權利ヲ有ス

官吏恩給法

第二條 在官滿十五年以上ノ者左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ終身恩給ヲ給ス

- 一 年齢六十歳ヲ超エ退官ヲ許シタルトキ
- 二 傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ其職ニ堪ヘス退官ヲ許シタルトキ
- 三 廢官廢廳若クハ官廳事務ノ伸縮又ハ非職滿期ニ依リ退官シタルトキ

第三條 左ニ掲クル事項ノ一ニ當ル者ハ前條ノ年限ニ滿タサルモ終身恩給ヲ給シ尙其最下金額十分ノ七マテノ増加恩給ヲ給ス

- 一 公務ニ因リ傷痍ヲ受ケ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘス退官シタルトキ
- 二 公務ニ依リ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ願ミルコト能ハスシテ勤務ニ從事シ爲メニ疾病ニ罹リ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘス退官シタルトキ

第四條 滿五年以上國務大臣ノ職ニ在ル者退官シタルトキハ第二條ノ制限

ニ拘ハラス恩給ヲ給ス

第五條 恩給ノ年額ニ退官現時ノ俸給ト在官年數トニ依リ之ヲ定ム即チ在官滿十五年以上十六年未滿ニシテ退官シタル者ノ恩給年額ハ俸給年額ノ二百四十分ノ六十トシ十五年以後滿一年毎ニ二百四十分ノ一ヲ加ヘ滿四十年ニ至テ止ム但在官四十年以上ノ者ニ給スヘキ恩給ハ四十年ノ額又十五年未滿ノ者ニ給スヘキ給恩ハ十五年ノ額トス
非職滿期ニ由テ退官シタル者ノ恩給ハ其在職最終ノ俸額ニ依テ之ヲ算定ス

交際官及領事貿易事務官等ノ恩給ハ其官等ニ對スル普通文官ノ俸額ニ依テ之ヲ算定ス

兼官ニ依テ受クル加俸ハ恩給年額ヲ算定スルニ當リ之ヲ除算スヘシ
恩給年額圓位未滿ノ數ハ圓位ニ滿タシム

第六條 恩給ヲ受ケ又ハ恩給ヲ受ケスシテ退官シタル者在官中ノ公務ニ起

因スル傷痍疾病引續キ重症ニ趨キタルトキ其事由ヲ詳悉シ左ノ期限内ニ申出レハ査覈ノ上相當ノ恩給ヲ給ス

- 一 一肢ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ハ退官後二個年
- 二 一肢ヲ亡シ或ハ二肢ノ用ヲ失ヒ又ハ兩眼ヲ盲シ若クハ二肢ヲ亡シ若クハ之ニ準スヘキ者ハ退官後三個年

第七條 在官年數ハ判任官以上初任ノ月ヨリ起算シ退官ノ月ヲ以テ終リトス

明治四年八月以前ヨリ任官セラレタル者ハ同年同月ヨリ起算ス但本項ニ掲クル者退官スルトキハ明治四年七月以前ノ勤務ニ對シテハ同年同月ノ現官等ニ相當スル月俸ノ半額ヲ以テ在官年數ノ一個年ニ當テ其年數ニ應スル金額ヲ一時支給ス

第八條 左ニ掲クル月數及日數ハ在官年數中ニ算入スヘシ
一 判任以上出仕官ニ在ルノ月數

- 二 武官ヨリ文官ニ轉シタル者又ハ軍人恩給ヲ受ケヌシテ現役ヲ退キタル後文官ニ任シタル者ハ其現役中ノ日數
 - 三 從軍年加算ノ年月
 - 四 非職及休職中ノ月數
 - 五 退官ノ後再ヒ任官シタル者ハ前在官ノ月數
 - 六 宮内官ヨリ文官ニ轉シタル者又ハ恩給ヲ受ケヌシテ宮内官ヲ退キタル後文官ニ任シタル者ハ宮内判任官以上在官中ノ月數
- 第九條 左ニ掲クル月數及日數ハ在官年數中ヨリ除算スヘシ
- 一 年齢二十歳未滿者ノ在官月數
 - 二 高等官試補及判任官見習中ノ月數
 - 三 郡區書記ヲ除クノ外政府ヨリ俸給ヲ受ケサル官職ニ在ル月數及商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官職ニ在ル月數
 - 四 御用掛履等外出仕勤仕ノ月數

五 第八條第二ニ掲クル者ニ在テハ軍人恩給法ニ依リ除算スヘキ日數
 六 自己ノ便宜ニ依リ退官シタル後又ハ懲戒處分若クハ刑事裁判ニ依リ
 免官シタル後再ヒ任官シタル者ニ在テハ其前官ノ月數

第十條 文官ニシテ從軍シタル者ハ軍人恩給法ノ算則ニ照シテ其從軍年ヲ
 加算ス

第十一條 恩給ヲ受クル者再ヒ官ニ就キ滿一年以上在官シタル後退官シタ
 ルトキハ左ノ區別ニ依リ恩給ヲ給ス

- 一 退官現時ノ俸給前後相同シカラサルトキハ前官年數ヲ後官ノ年數ニ
 通算シ後官ニ對スル恩給額ト前ノ恩給額トナ比較シ其多キ方ヲ給ス
- 二 退官現時ノ俸給前後相同シキトキハ在官年數ニ依リ恩給ヲ増加ス但
 前官十五年未滿ニシテ恩給ヲ受ケタル者ニ在テハ前後通算シテ十六
 年以上ニ至ラサレハ増加セス

第十二條 恩給ヲ受クル者重罪ノ刑ニ處セラレ若クハ日本臣民タルノ分限

ヲ失ヒタルトキハ恩給ヲ剝奪ス

左ニ掲クル事項ノ一二當ルトキハ其間恩給ヲ停止ス

- 一 判任以上ノ官ニ任シ政府ヨリ俸給ヲ受クルトキ但商業ヲ營ムコトヲ
 得ヘキ官職ニ在ルトキハ此限ニアラス
- 二 公權ヲ停止セラレタルトキ

第十三條 年齢未タ六十歳ニ至ラスシテ自己ノ便宜ニ依リ退官シタル者又
 ハ懲戒處分若クハ刑事裁判ニ依リ免官シタル者ハ恩給ヲ受クルノ資格ヲ
 失フ

法律ヲ以テ設立シタル議會ノ議員ト爲リタルノ故ヲ以テ退官シタル者ハ
 恩給ヲ受クルノ資格ヲ失ハス

第十四條 政府ヨリ俸給ヲ受ケサル官吏及商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官吏竝
 ニ高等官試補判任官見習ハ恩給ヲ受クルノ權ナキモノトス但郡區書記ハ
 此限ニアラス

商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官吏竝ニ高等官試補判任官見習ニシテ公務ノ爲
メ傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ此法律第三條ニ該當スル者ニ限り退官又
ハ罷免現時ノ俸給四分ノ一ヲ終身支給スルコトヲ得

第十五條 恩給支給ノ期ハ退官ノ翌月ヨリ始マリ死亡ノ月ヲ以テ終ルモノ
トス

第十六條 恩給ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル後三箇年内ニ請求セサレハ
其權利ヲ拋棄シタルモノトス

第十七條 恩給ノ支給ハ本屬長官ノ證明ニ依リ恩給局ノ審査ヲ經テ内閣總
理大臣之ヲ裁定ス

行政上ノ處分ニ因リ恩給ニ關スル權利ヲ障害セラレタリトスル者ハ六個
月以内ニ恩給局ニ具申シテ裁決ヲ請フコトヲ得其裁決ニ服セサル者ハ一
個年以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得但左ノ事件ニ關シテハ恩給局
ノ裁決ハ終審確定ノモノトス

一 傷痕疾病ノ原因及其輕重

二 職務ニ堪エルト否ヲサルト

第十八條 恩給ハ賣買讓與質入スルコトヲ得ヌ又負債ノ抵償トシテ差
押フルコトヲ得ヌ

第十九條 明治十七年達官吏恩給令ニ依リ恩給ヲ受ケタル者ハ總テ其恩給
令ニ依ルヘシ但其權利消滅及停止ハ此法律ニ依ル

第二十條 此法律施行前ニ退官シタル者ノ恩給ハ明治十七年達官吏恩給令
ニ依ルヘシ但此法律施行ノ日ヨリ三箇年内ニ請求セサレハ之ヲ受クヘキ
權利ヲ拋棄シタルモノトス

第二十一條 此法律ハ明治二十三年七月一日ヨリ施行ス
従前ノ命令ニシテ此法律ニ抵觸スルモノハ總テ廢止ス

○官吏恩給法施行規則二十三年七月
關令第三號

官吏恩給法施行規則左ノ通定ム
官吏恩給法施行規則

第一章 恩給ノ請求

第一條 官吏恩給法第二條第三條第六條及第七條第二項第十四條第二項ニ依リ恩給ヲ受クヘキ者ハ恩給請求書ヲ退官當時ノ本属應ノ長官ニ差出スヘシ但廢官廢應ニ當リタルトキハ其事務ノ引繼ヲ受ケタル官應ノ長官ニ差出スヘシ

第二條 官吏恩給法第四條ニ依リ恩給ヲ受クヘキ者ハ恩給請求書ヲ内閣總理大臣ニ差出スヘシ

第三條 恩給請求書ニハ左ノ書類ヲ添付スヘシ
一 任官中履歷書
二 市町村長ノ證明シタル戶籍調査

但官吏恩給法第十四條第二項ニ掲ケタル者ハ之ヲ添付スルニ及ハス

第四條 公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ恩給ヲ請求スル者ハ前條ニ掲ケタル書類ノ外左ノ書類ヲ以テ其事實ヲ證明スヘシ官吏恩給法第六條ニ依リ恩給ヲ請求スル者亦同シ
一 現認證書又ハ之ヲ證スル公文ノ寫若クハ口供書
二 醫師ノ診斷證書

二十三年大藏省令第二十號
及扶助料ヲ受給
期ヲ以テ受給
ハ本人生計ニ
ニ添ハ恩給存
トハ送給出ス

第五條

恩給ノ請求ヲ受ケタル各廳長官ハ查覈ノ上請求ノ理由アリト認ムルトキハ請求者ノ在官年數及恩給年額計算書ヲ作り證據書類ヲ添

内閣總理大臣ニ差出スヘシ
各廳長官ニ於テ請求ノ理由ナシト認ムルトキハ意見ヲ具シテ之ヲ内閣總理大臣ニ差出スヘシ

第六條 内閣ニ於テ前條ノ請求ヲ許可シタルトキハ恩給證書ヲ作り本属應ヲ經テ本人居住地ノ地方廳ヲシテ之ヲ下付セシム但一時ノ支給ニ係ルモノハ辭令書ヲ用ユ
恩給證書若クハ辭令書ヲ下付シタルトキハ内閣ハ其旨ヲ大藏省ニ通報スヘシ

第二章 恩給ノ支給

第七條 恩給ハ其年額ヲ四分シ四月七月十月一月ニ於テ其前三個月分ヲ大藏省ヨリ本人居住地ノ地方廳ヲ經テ支給ス但權利消滅ノトキ及一時支給ノ金額ハ期月ニ拘ハラズ之ヲ支給ス

第八條 恩給ヲ受クル者其金額ヲ受領セントスルトキハ恩給證書ヲ以テ其受領權アルコトヲ證明スヘシ

第九條 恩給ヲ受クル者他府縣ニ轉籍若クハ寄留スルトキハ從來ノ居住地ノ地方廳及轉籍若クハ寄留地ノ地方廳ニ其旨ヲ届出ヘシ
地方廳ニ於テ前項ノ届出ヲ受ケタルトキハ大藏省ニ通知シ各廳間互ニ

其者ニ係ル恩給支給方ノ受繼ヲ爲スヘシ

第十條 大藏省ニ於テ前項ノ通知ヲ受ケタルトキハ内閣恩給局ニ通知スヘシ
官吏恩給法第十二條ニ當リタル者ノ恩給支給ノ終始ハ左ノ各項ニ依ルヘシ

- 一 重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ確定裁判ノ宣告ヲ受ケタル日、日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ其失ヒタル日ヲ以テ支給ヲ終ル
- 二 判任官以上ニ任シ政府ヨリ俸給ヲ受クルトキハ俸給ノ支給ヲ始ムル日ノ前日ヲ以テ支給ヲ終リ其退官シタルトキハ俸給ノ支給ヲ終リタル日ノ翌日ヨリ支給ヲ始ム
- 三 公權ヲ停止セラレタルトキハ禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ監視ニ付セラレヘキ確定裁判ノ宣告ヲ受ケタル日ヲ以テ支給ヲ終リ刑期滿限ノ日ノ翌日ヨリ支給ヲ始ム

第十一條 官吏恩給法第七條第二項ニ掲クル月俸トハ明治四年六月東京

第十二條 官吏恩給法第三條ニ掲クル最下金額十分ノ七マテノ増加恩給ノ等差ハ左ノ如シ

- 第一項 兩眼ヲ盲シ若クハ二肢以上ヲ亡シタルトキ 十分ノ七
- 第二項 前項ニ準スヘキ傷瘻ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ十分ノ六
- 第三項 一肢ヲ亡シ若クハ二肢ノ用ヲ失ヒタルトキ 十分ノ五

第四項 前項ニ準スヘキ傷瘻ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ十分ノ四

第五項 一眼ヲ盲シ若クハ一肢ノ用ヲ失ヒタルトキ 十分ノ三

第六項 前項ニ準スヘキ傷瘻ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ十分ノ二

傷瘻疾病ノ等差ハ明治十八年達文官傷瘻疾病等差例ニ依ル

第三章 恩給ノ停止

第十三條 恩給ヲ受クル者重罪若クハ禁錮ノ刑ニ處セラレ又ハ監視ニ付セラレタルトキハ其確定裁判ノ宣告ヲ爲シタル裁判所ヨリ之ヲ大藏省ニ通知スヘシ

第十四條 官吏恩給法第十二條第二項ノ第一ニ當ル者アルトキハ其任用シタル官廳ヨリ大藏省ニ通知スヘシ解任シタルトキモ亦同シ但此通知書ニハ本人恩給ノ支給ヲ受ケタル地方廳名及俸給ノ支給ヲ始ムル日解任ノトキハ支給ヲ終リタル日ヲ付記スヘシ

第十五條 恩給ヲ受クル者死去シタルトキハ其遺族ヨリ地方廳ニ届出ヘシ其遺族ニシテ扶助料ヲ受クヘキ權利ナキトキハ死去ノ届出ヲ爲スト

同時ニ恩給證書ヲ返納スヘシ
地方廳ニ於テ前項ノ届出ヲ受ケタルトキハ直ニ大藏省ニ通知シ其恩給證書ハ内閣恩給局ニ送付スヘシ

第十六條 大藏省ニ於テ第十三條第十四條第十五條ノ通知ヲ受ケタルトキハ之ヲ内閣恩給局ニ通知シ且第十三條第十四條ノ場合ニ於テハ地方

應ニ通知シテ其恩給ノ支給ヲ停止シ又ハ復給セシムヘシ
地方廳ニ於テ此通知ヲ受ケタルトキ其恩給ヲ剝奪スヘキモノハ恩給證
書ヲ收メテ内閣恩給局ニ送付スヘシ

第四章 雜則

第十七條 水火災盜難等ニ由リ恩給證書ヲ亡失シタル者ハ居住地ノ地方
廳ニ届出ヘシ

地方廳ニ於テ前項ノ届出ヲ受ケタルトキハ其實實ヲ調査シ亡失ノ事由
ヲ具シテ内閣恩給局ニ申出ヘシ此場合ニ於テ恩給局ハ恩給證書ノ廢本
ヲ作り地方廳ヲ經テ本人ニ下付スヘシ

前項恩給證書ノ廢本ハ恩給證書ト同一ノ効力アルモノトス

第十八條 恩給ヲ受クル者改氏名シタルトキハ居住地ノ地方廳ニ届出ヘ
シ地方廳ハ恩給證書ノ裏面ニ其實實ヲ記載シ長官署名捺印ノ上本人ニ
下付シ其旨ヲ内閣恩給局及大藏省ニ通知スヘシ

第十九條 明治十七年達官吏恩給令ニ依リ恩給ヲ受クル者左ノ場合ニ於
テハ本則ニ依ル

- 一 死去又ハ權利消滅又ハ停止ノトキ
- 二 恩給證書ヲ亡失シタルトキ
- 三 改氏名又ハ他府縣ニ轉籍若クハ寄留スルトキ

官吏恩給令
附則第三十三年
法律第四十三號
官吏恩給法
施行規則
第十二條參照

第二十條 官吏恩給法第二十條ニ依リ恩給ヲ請求スル者ハ本則ニ依ルヘ
シ

第二十一條 市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ本規則ニ依リ市町村
長ノ爲スヘキ職務ハ區戶長ニ於テ之ヲ行フヘシ

○文官傷痍疾病等差例第十八年三月
第十六號達

官吏恩給令附則第五條傷痍疾病等差例左ノ通相定候條右ニ據リ取調候儀
ト可心得此旨相達候事

文官此傷痍疾病等差例

公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ遂ニ一肢以上ノ用ヲ失フニ等シ
キ不治ノ症トナリ官吏恩給令附則第五條ニ掲クル各項ニ該當スル者ニ
等差ヲ付スルノ概テ左ノ如シ

第一條 偏眼ヲ盲スル者全鼻ヲ失スル者ハ共ニ第五項トシ之ニ偏耳ノ官
能ヲ併セ廢スル者ハ第四項トス

第二條 兩耳ヲ聾スル者ハ第四項トス

第三條 偏眼兩耳ノ官能ヲ併セ廢スル者ハ輕重ヲ酌量シテ第二項或ハ第
三項トス

第四條 一眼ヲ失ヒ他ノ一眼暗昧シ僅ニ自己ノ用ヲ辨スルヲ得ル者ハ第
二項トス

- 第五條 咀嚼言語ノ兩機ヲ併セ廢スル者ハ輕重ヲ酌量シテ第一項或ハ第二項トス
- 第六條 咀嚼ノ用ヲ廢スル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第二項或ハ第三項トシ幾分ノ障礙アル者ハ第五項其輕キ者ハ第六項トス
- 第七條 精神亡失或ハ錯亂シテ常ニ看護ヲ要スル者ハ第一項トス
- 第八條 癡呆若クハ健忘症ヲ遺シ常ニ看護ヲ要セサル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第三項若クハ第五項トス
- 第九條 神經痛ヲ遺シ常ニ看護ヲ要セサル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス
- 第十條 言語ノ機能ヲ廢スル者ハ第三項トシ言語ノ機能ヲ妨ケラレタル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス
- 第十一條 胃腸膀胱等ニ滯管ヲ遺ス者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第二項或ハ第三項トス
- 第十二條 腸歇爾尼亞ヲ遺ス者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス
- 第十三條 陰莖或ハ畢丸ヲ全失スル者ハ第三項トス
- 第十四條 陰莖ヲ半失スル者偏單丸ヲ失スル者ハ共ニ第六項トス
- 第十五條 頸項背腰諸筋ノ運用ヲ妨クル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス
- 第十六條 一肢ヲ失ヒ且他肢ノ用ヲ全廢スル者ハ第一項トス

- 第十七條 一上肢ヲ失フ者ハ肩關節ヨリ腕關節ニ至ル間ハ何レノ部位ヲ論セス第三項トス
- 第十八條 肩關節ヨリ腕關節ニ至ル間ノ關節作用ヲ廢スルモ全肢ノ用ヲ廢スルニ至ラサル者ハ第六項トス
- 第十九條 一手ニ於テ四指以上ヲ失スル者ハ第四項トシ五指癒着若クハ強硬等ノ爲メニ把握採摘ノ用ヲ廢スル者ハ第五項トス
- 第二十條 一手ニ於テ四指或ハ五指ノ各一部ヲ失スルモ尙把握ノ用ヲ爲シ得ル者ハ第六項トス
- 第二十一條 一手ニ於テ拇指示指ヲ併セ失スル者或ハ拇指示指ヲ除キ他ノ三指ヲ失スル者ハ第六項トス
- 第二十二條 一下肢ヲ失スル者ハ股關節ヨリ踝關節ニ至ルノ間ハ何レノ部位ヲ論セス第三項トス
- 第二十三條 股關節ヨリ踝關節ニ至ル間ノ作用ヲ妨ケラレタル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス
- 第二十四條 跗骨ヨリ蹠骨ニ至ルノ部ヲ失スル者ハ何レノ部位ヲ論セス第四項トス
- 第二十五條 一足ニ於テ五指ヲ失スル者ハ第五項トシ第一指ヲ併セ三指ヲ失スル者ハ第六項トス
- 第二十六條 不治病ノ爲メ常ニ看護ヲ要スル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第一項トス

或ハ第二項トス

第二十七條 不治病前項ヨリ輕キモ歩行スル能ハサル者ハ第三項トス

第二十八條 不治病前項ヨリ輕キモ自己ノ用辨ニ妨碍アル者ハ第四項トス

第二十九條 不治病前項ヨリ輕キモ營業ヲ爲シ難キ者ハ第五項トス

第三十條 不治病前項ヨリ輕キモ營業ヲ妨ケアル者ハ第六項トス

○恩給扶助料ノ權利ニ關スル恩給局裁決手續二十四年六月
令第二號行政上ノ處分ニ因リ恩給扶助料ノ權利ニ關スル恩給局裁決手續左ノ通定ム

第一條 行政上ノ處分ニ因リ恩給扶助料ニ關スル權利ヲ障害セラレタリトスル者恩給局ノ裁決ヲ請ハントスルトキハ其事由ヲ文書ニ認メ身分職業住所年齢ヲ記載シ署名捺印シ之ニ證據書類ヲ添ヘ内閣恩給局長ニ差出スヘシ

前項ノ書類ハ郵便ヲ以テ之ヲ差出スコトヲ得

第二條 恩給局ニ於テ前條ノ申立理由アリト認ムルトキハ其書類ヲ當該官廳ニ送付シ相當ノ期限ヲ定メ答辯書ヲ添ヘテ之ヲ恩給局ニ差出サシムヘシ

第三條 恩給局ニ於テ必要ト認ムルトキハ請求者又ハ當該官廳ノ官吏ヲ

召喚シ口頭陳述ヲ爲サシムルコトヲ得

第四條 恩給局ニ於テ裁決シタルトキハ裁決書ニ通ヲ作り請求者及當該官廳ニ交付スヘシ

○文官判任以上退官賜金明治二十三年六月
勅令第九十八號

朕茲ニ文官判任以上ノ者退官賜金ノ件ヲ裁可ス

文官判任以上ノ者在官滿一年以上十五年未滿ニシテ退官シタル者ニハ退官現時ノ俸給半箇月分ヲ以テ在官年數ノ一箇年ニ當テ其年數ニ應スル金額ヲ一時支給ス但非職滿期ニ由リ退官シタル者ハ其在職最終ノ俸給額ニ依リ之ヲ給ス

本令施行前ニ滿年賜金若クハ一時賜金ヲ受ケタル者又ハ前項ノ賜金ヲ受ケタル者再ヒ任官シ自後退官シタルトキハ前項ニ掲クル在官年數ヲ其再任ノ日ヨリ起算ス

恩給ヲ受クル者竝自己ノ便宜ニ由リ退官シタル者又ハ懲戒處分若クハ

刑事裁判ニ由リ免官シタル者ニハ本令ノ賜金ヲ給セズ
本令ハ明治二十三年七月一日ヨリ施行ス

○官吏遺族扶助法明治二十三年六月
法律第四十四號

沿革略記

明治十七年一月第一號達官吏恩給令ヲ以テ勅委任官ノ寡婦
孤兒ニ限リ扶助料ヲ受ルコトヲ得ルノ制ヲ設ク○二十三年

六月法律第四十四號ヲ以テ更ニ官吏遺族扶助法ヲ制定ス

朕官吏遺族扶助法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

官吏遺族扶助法

第一條 文官判任以上ノ者左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其遺族ハ此法律ノ規定スル所ニ依リ扶助料ヲ受クルノ權利ヲ有ス但第二條ノ納金ヲナスヘキ義務ナキ者ノ遺族ハ此限ニ在ラス

- 一 在官十五年以上ノ者在官中死去シタルトキ
- 二 在官十五年未滿ノ者公務ノ爲メ死去シタルトキ
- 三 恩給ヲ受クル者死去シタルトキ

第二條 文官判任以上ノ者ハ其俸給百分ノ一ヲ國庫ニ納ムヘシ

第三條 交際官及領事貿易事務官等其俸給普通文官ヨリ多額ナルトキハ普通文官ノ俸給ニ依リ少額ナルトキハ現ニ受クル所ノ俸給ニ依リ第二條ノ納金ヲ爲スヘシ

政府ヨリ俸給ヲ受ケサル官吏及商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官吏並ニ高等官試補判任官見習ノ俸給及兼官ニ依テ受クル加俸ニ對シテハ第二條ノ納金ヲ要セス

第四條 寡婦扶助料年額ハ亡夫ノ受ケタル若クハ受クヘキ恩給年額三分ノ一トス
公務ノ爲メ受ケタル傷痕ニ原因シテ死去シ又ハ非常ノ勞動及因苦ヲ忍ビ

勤務ニ従事シ爲メニ發病死去シ又ハ公務ニ依リ傳染病者ニ接シ該病毒ニ感染シテ死去シ又ハ戰地ニ於テ若クハ公務旅行中流行病ニ罹リ死去シタル者ノ寡婦扶助料ハ亡夫ノ俸給ニ對シ官吏恩給法第五條ニ依リ算出シタル恩給年額三分ノ二トス

扶助料年額圓位未滿ノ數ハ圓位ニ滿タシム

第五條 寡婦ナキトキ又ハ扶助料ヲ受クル寡婦死去シ若クハ權利消滅シタルトキハ其扶助料ヲ孤兒ニ給ス

第六條 孤兒扶助料ハ數子アルトキハ家名繼襲者ニ給シ戸主ニ非サル者ノ孤兒ニ在テハ長子ニ給ス其繼襲者及長子死去シ若クハ權利消滅シ若クハ支給期限ノ滿ツルトキハ順次年少者ニ轉給スルモノトス但家名繼襲者ヲ除クノ外男子ヲ先ニシ女子ヲ後ニス

第七條 恩給ヲ受ケタル者ノ寡婦ニシテ其夫退官後結婚シタル者ハ扶助料ヲ受クルコトヲ得ス

第八條 此法律ニ於テ孤兒トハ年齢二十歳未滿ノ男女子ニシテ未タ結婚セサル者ヲ云フ但養男女子ハ家名繼襲者ニ限ル

第九條 扶助料ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル月ノ翌月ヨリ之ヲ給ス

第十條 扶助料ヲ受クヘキ寡婦及孤兒ナク若クハ扶助料ヲ受ケタル寡婦及孤兒戸籍ヲ去リ若クハ死去シ若クハ權利消滅シタルトキ父母又ハ祖父母アルトキハ寡婦ニ相當スル扶助料ノ全額ヲ其父母又ハ祖父母ニ終身給スルコトヲ得

其扶助料ハ先ツ父ニ給シ其父存在セサルトキ若クハ權利消滅シタルトキハ母ニ給ス母ヨリ祖父ニ祖父ヨリ祖母ニ轉給スルハ順次此例ニ依ル

第十一條 扶助料ヲ受クヘキ寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ死去シタル者ノ戸籍内ニ在ル二十歳未滿又ハ癡疾若クハ不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハサル兄弟姉妹アリテ之ヲ給養スル者ナキトキハ寡婦ニ相當スル扶助料一個年分ヨリ少カラス五個年分ヨリ多カラサル金額ヲ人員ニ拘ハラズ

一時限り其兄弟姊妹ニ給スルコトヲ得

第十二條 扶助料ハ之ヲ受クヘキ權利ノ生シタル日ヨリ三箇年内ニ請求セザレバ其權利ヲ拋棄シタルモノトス

第十三條 扶助料ハ賣買讓與質入スルコトヲ得ス又負債ノ抵償トシテ差押フルコトヲ得ス

第十四條 扶助料ヲ受クルノ權利ハ左ノ時ヨリ消滅ス

一 寡婦死去又ハ婚嫁シ若クハ戸籍ヲ去リタル月ノ翌月

二 孤兒死去又ハ婚嫁シ又ハ他家ノ養子女トナリ又ハ年齢二十歳ニ滿チタル月ノ翌月

三 父母祖父母死去シ又ハ戸籍ヲ去リタル月ノ翌月

第十五條 孤兒二十歳ニ滿ツルモ癡疾若クハ不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハス他ニ給養スル者ナキトキハ寡婦扶助料ノ三分ノ一ヲ其孤兒ニ各終身給スルコトヲ得但一戸籍内ニ寡婦ト同額ノ扶助料ヲ受クル者アルトキハ

其間之ヲ給セス

第十六條 扶助料ヲ受クル者日本臣民タルノ分限ヲ失ヒ若クハ重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ扶助料ノ支給ヲ廢ス

公權ヲ停止セラレタルトキハ其間支給ヲ停止ス

扶助料ヲ受クル者公權停止中ハ其轉給ヲ受クヘキ者ニ之ヲ給ス

第十七條 在官十五年未滿ノ者在官中公務ノ故ニアラスシテ死去シタルトキハ其遺族ニ一時扶助金ヲ給ス

前項ノ扶助金ハ在職最終ノ俸給年額百分ノ一ヲ在官年數ニ乘シタル額トス但一年未滿ノ在官月數ハ計算セス

第十八條 扶助料ノ支給ハ地方長官ノ申牒ニ依リ恩給局ノ審査ヲ經テ内閣總理大臣之ヲ裁定ス

行政上ノ處分ニ因リ扶助料ニ關スル權利ヲ障害セラレタリトスル者ハ六箇月以内ニ恩給局ニ具申シテ裁決ヲ請フコトヲ得其裁決ニ服セサル者ハ

一個年以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第十九條 明治十七年達官吏恩給令ニ依リ扶助料ヲ受ケタル者及恩給ヲ受ケタル者ノ遺族扶助料ハ總テ其恩給令ニ依ルヘシ但其權利消滅及停止ハ此法律ニ依ル

第二十條 此法律ハ明治二十三年七月一日ヨリ施行ス

○官吏遺族扶助法納金收入規則 明治二十三年七月 勅令第二百二十五號

朕官吏遺族扶助法納金收入規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
官吏遺族扶助法納金收入規則

第一條 本年法律第四十四號官吏遺族扶助法第二條ニ依リ文官判任以上ノ者ヨリ國庫ニ納ムヘキ金員ハ俸給仕拂ノトキ金庫ニ於テ之ヲ差引ヘシ但現金前渡ヲ受ケタル官吏ニ於テ俸給ノ仕拂ヲナストキハ該官吏ニ於テ之ヲ差引ヘシ

第二條 前條ニ依リ金庫ニ於テ差引シタル金員ハ收入官吏ヨリ金庫ヘノ拂込ニ移シテ計算シ直ニ報告書ヲ作り之ヲ收入官吏ニ送付スヘシ前條ニ依リ現金前渡ヲ受ケタル官吏ニ於テ差引シタル金員ハ納金額表ヲ添ヘ之ヲ收入官吏ニ送付スヘシ

第三條 俸給ノ増減ニ依リ既納ノ金員ハ過不足ヲ生スルトキハ次期ノ俸給支給ノトキ之ヲ整理スヘシ
免官退官轉任死亡ニ依リ過渡俸給ノ返納ヲ要スルトキハ其百分ノ一ヲ納人ニ於テ差引スヘシ

○官吏遺族扶助法施行規則 二十三年七月 閣令第四號
官吏遺族扶助法施行規則左ノ通定ム
官吏遺族扶助法施行規則

第一章 扶助料ノ請求
第一條 官吏遺族扶助法第一條第一第二及第十七條ニ當ル者アリタルトキハ本屬廳ヨリ死者ノ履歷書ヲ其遺族ニ下付スヘシ遺族ハ之ヲ以

テ扶助料又ハ一時扶助金請求ノ證ト爲スヘシ
第二條 官吏遺族扶助法第一條第三ニ當ル者ノ遺族ハ其恩給證書ヲ以テ扶助料請求ノ證ト爲スヘシ

第三條 官吏遺族扶助法第四條第二項ニ當ル者アリタルトキハ本屬廳ニ於テ事實ヲ查覈シ其傷痕若クハ疾病ノ公務ニ起因シタル證據トナルヘキ書類及醫師ノ診察ヲ爲サシメタル場合ニ於テハ其診斷書ヲ併セテ其遺族ニ下付スヘシ遺族ハ之ヲ以テ扶助料請求ノ證ト爲スヘシ

第四條 扶助料ヲ受クル者死去シ若クハ權利消滅シ若クハ支給期限ノ満チタルトキ其扶助料ノ轉給ヲ請フ者ハ前者ノ扶助料證書ヲ以テ請求ノ證ト爲スヘシ

第五條 公權停止ニ因リ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ハ確定裁判ノ宣告書寫ヲ以テ請求ノ證ト爲スヘシ

第六條 官吏遺族扶助法第十一條及第十五條ニ當ル者ハ其事由ヲ詳記シ癡疾不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハサル者ハ醫師ノ診斷書ヲ添ヘ扶助料ヲ請求スヘシ

第七條 扶助料ノ請求書ハ請求者署名シ後見人ヲレハ其後親族二名親族ナキトキハ居住地ノ戸主二名連署シ市町村長ノ與印ヲ受ケ第一條乃至第六條ニ掲グル書類ノ外市町村長ノ證明シタル戸籍調書ヲ添附シ地方長官ニ差出スヘシ

第八條 扶助料ノ請求ヲ受ケタル地方長官ハ查覈ノ上扶助料年額ノ計算書ヲ作り證據書類ヲ添ヘ内閣總理大臣ニ差出スヘシ

第九條 於テ之ヲ徵收シテ國庫ニ納ムヘシ

第十條 扶助料ノ支給ハ官吏恩給法施行規則第七條第八條第九條及第十條第一第三ノ例ニ依ル

第十一條 扶助料ヲ受クル者死去シ若クハ權利消滅シ若クハ支給期限ノ満チタルトキハ地方廳ニ於テ扶助料ノ支給ヲ廢シ其旨ヲ大藏省ニ通知スヘシ

第十二條 前項ノ場合ニ於テ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ナキトキハ地方廳ニ於テ其扶助料證書ヲ收メテ内閣恩給局ニ送付スヘシ

第十三條 扶助料ヲ受クル者重罪ノ刑ニ處セラレ若クハ公權ヲ停止セラレタルトキハ官吏恩給法施行規則第十三條ノ例ニ依ル

官吏遺族扶助法

第十三條 大藏省ニ於テ第十一條第十二條ノ通知ヲ受ケタルトキハ官吏恩給法施行規則第十六條ノ例ニ依ル

雜則

第十四條 水火災盜難等ニ依リ扶助料證書ヲ亡失シタルトキ及扶助料ヲ受クル者改氏名ヲ爲シタルトキハ官吏恩給法施行規則第十七條及第十八條ノ例ニ依ル

第十五條

明治十七年達官吏恩給令ニ依リ扶助料ヲ請求スル者ハ本則ニ依ルヘシ同令ニ依リ扶助料ヲ受クル者ハ左ノ場合ニ於テ本則ニ依ル

一 死去又ハ權利消滅又ハ停止ノトキ

二 恩給證書ヲ亡失シタルトキ

三 改氏名又ハ他府縣ニ轉籍若クハ寄留スルトキ

第十六條 市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ本規則ニ依リ市町村長ノ爲スヘキ職務ハ區戸長ニ於テ之ヲ行フヘシ

○

○軍人恩給法明治二十三年六月法律第四十五號

沿革畧記

明治八年四月第四十八號達ヲ以テ陸軍武官傷痕扶助及ヒ死亡ノ者祭葬并ニ其家族扶助概則ヲ定ム○同年八月第四百十八號達ヲ以テ海軍退隱令ヲ定ム○九年一月第八號達ヲ以テ前二達中ヲ改正ス○同年十二月第九十九號達ヲ以テ八年第四百十八號達ヲ廢シ更ニ陸軍恩給令罷役俸并恤金令及將官退職令ヲ定ム○十六年九月第三十七號達ヲ以テ陸軍恩給令ヲ改正ス○同年同月第三十八號達ヲ以テ從前ノ海軍退隱令ヲ廢シ更ニ海軍恩給令ヲ定ム○二十三年六月法律第四十五號ヲ以テ前令ヲ廢シ更ニ軍人恩給法ヲ定ム是レ現行法ナリ

朕軍人恩給法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

軍人恩給法

第一章 總則

第一條 陸海軍軍人ニシテ現役ヲ離レタル者ハ此法律ノ規定スル所ニ依リ恩給ヲ受クルノ權利ヲ有ス

第二條 陸海軍軍人恩給ハ左ノ六種トス

一 退職恩給

- 二 免除恩給
- 三 增加恩給
- 四 賑恤金
- 五 給助金
- 六 扶助料

第三條 退職恩給、免除恩給、增加恩給及寡婦ノ扶助料ハ終身、孤兒ノ扶助料ハ年齢滿二十歳ニ至ルマテ賑恤金、給助金ハ一時限リ之ヲ給ス

第二章 退職恩給、免除恩給、增加恩給

第四條

退職恩給ハ准士官以上左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキ之ヲ給ス

- 一 現役十一年以上ニシテ定限ノ年齢ニ達シ又ハ定限ノ年齢ニ達セサルモ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ服役ニ堪ヘス退職シタルトキ
- 二 戦闘及戰時平時ニ拘ハラヌ公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ退職シタルトキ

三

戰地ニ於テ流行病ニ罹リ又ハ戰時平時ニ拘ハラヌ公務ノ爲メ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ顧ミルコト能ハスシテ勤務ニ從事シ爲メニ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ退職シタルトキ

四

現役十一年以上ニシテ未タ定限ノ年齢ニ達セスト雖休職、停職滿期若クハ諭旨ニ依テ退職シタルトキ

第五條

免除恩給ハ下士以下左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキ之ヲ給ス

- 一 現役十一年以上ニシテ定限ノ年齢ニ達シ又ハ定限ノ年齢ニ達セサルモ服役滿期トナリ或ハ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ服役ニ堪ヘス免官若クハ現役ヲ免除シタルトキ

二 第四條第二又ハ第三ニ由リ免官若クハ現役ヲ免除シタルトキ

第六條

退職恩給、免除恩給年額ハ軍人恩給ヲ受クヘキ事故ノ生シタルトキノ現官階ト其服役年數トニ從ヒ第一號表若クハ第二號表ニ依テ之ヲ給ス但現役四十一年以上ノ者ニ給スヘキ恩給ハ四十年ノ額又十一年未滿ノ者

ニ給スヘキ恩給ハ十一年ノ額トス

第七條 軍人現役十一年以上ニシテ文官ニ任シタル者又ハ文官ヲ兼任スル者十五年未滿ニシテ退官退職スルトキハ軍人ノ服役年數ニ對スル恩給ヲ給ス其十五年以上ニシテ退官退職スルトキハ文武官ヲ比較シ恩給年額ノ多キ方ヲ給ス

第八條 退職恩給、免除恩給ヲ受ケタル後再ヒ現役ニ就キ滿一平以上服役シタル者退職又ハ免官若クハ現役ヲ免除シタルトキハ左ノ區別ニ依リ恩給ヲ給ス

- 一 再ヒ現役ヲ離ル、トキノ現官階當初恩給ヲ受ケタルトキノ官階ト同等ナラサルトキハ前役年數ニ再役年數ヲ通算シ再役ノ官階ニ對スル恩給ト既得ノ恩給トヲ比較シ其多キ方ヲ給ス
- 二 前後ノ官階同等ナルトキハ再役ノ年數ニ依リ恩給ヲ増加ス但前役十一年未滿ニシテ恩給ヲ受ケタル者ニ在テハ前後通算シテ十二年以上

ニ至ラサレハ増加セス

第九條 増加恩給ハ戰鬪及戰時平時ニ拘ハラヌ公務ノ爲メ傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ左ニ掲クル事項ノ一ニ當ル者ニ退職恩給、免除恩給ノ外特ニ給スルモノトス

- 一 兩眼ヲ盲シ若クハ二肢以上ヲ亡シタルトキ
- 二 前項ニ準スヘキ傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ
- 三 一肢ヲ亡シ若クハ二肢ノ用ヲ失ヒタルトキ
- 四 前項ニ準スヘキ傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ
- 五 一眼ヲ盲シ若クハ一肢ノ用ヲ失ヒタルトキ
- 六 前項ニ準スヘキ傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ

第十條 増加恩給ノ年額ハ軍人之ヲ受クヘキ事故ノ生シタルトキノ現官階ニ從ヒ第三號表ニ依リ之ヲ給ス

第十一條 戰鬪及戰時平時ニ拘ハラヌ公務ノ爲メ傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ

罹リ恩給ヲ受ケ又ハ之ヲ受ケスシテ現役ヲ離レタル後重症ニ趨キタル者左ノ期限内ニ検査ヲ願出ルトキハ策定ノ上相當ノ恩給ヲ給ス

一 一眼ヲ盲シ若クハ一肢ノ用ヲ失フニ至リタル者若クハ之ニ準スヘキ者ハ現役ヲ離レタル日ヨリ二箇年

二 一肢ヲ亡シ若クハ二肢ノ用ヲ失ヒ若クハ兩眼ヲ盲シ若クハ二肢以上ヲ亡スルニ至リタル者若クハ之ニ準スヘキ者ハ現役ヲ離レタル日ヨリ三箇年

第十二條 傷痕疾病ニ起因シ恩給ヲ請求スル者ハ左ノ書類ニ依リ證明スヘシ

一 傷痕疾病ノ原因ハ現認證書又ハ之ヲ證スル公文ノ寫若クハ口供書

二 傷痕疾病輕重ノ度ハ陸海軍醫官ノ證書若クハ陸海軍醫官ノ查覈ヲ經タル醫師ノ證書

第十三條 退職恩給、免除恩給、増加恩給ノ支給ハ現役ヲ離レタル日ノ翌日

ヨリ始マリ死亡ノ月ヲ以テ終ルモノトス

第三章 賑恤金、給助金

第十四條 賑恤金ハ下士以下左ニ掲クル事項ノ一ニ當リ第九條第六ヨリ輕症ニシテ免除恩受ヲ受ケサル者ニ之ヲ給ス

一 戰鬪及戰地公務ノ爲メ傷痕ヲ受ケ若クハ第四條第三ニ原由スル疾病ニ罹リ現役ヲ離レタルトキ

二 戰時平時公務ノ爲メ傷痕ヲ受ケ若クハ第四條第三ニ原由スル疾病ニ罹リ現役ヲ離レタルトキ

第十五條 賑恤金ハ之ヲ受クヘキ事故ノ生シタルトキノ現官階ニ應シ前條

第一ニ當ル者ハ第三號表第五項ノ一個年分ヨリ少カラス十個年分ヨリ多カラス前條第二ニ當ル者ハ同表第六項ノ一個年分ヨリ少カラス十個年分ヨリ多カラサル金額トス

第十六條 給助金ハ下士以上現役中死歿シ若クハ現役四年以上十一年未滿

ニシテ現役ヲ離レ退職恩給、免除恩給ヲ受ケサル者ニ之ヲ給ス其額ハ第四號表ニ依ル

第四章 服役年

第十七條 服役年ノ始期終期ハ左ノ各項ニ依ル

第一 退職恩給、免除恩給ニ係ル服役年ノ始期

一 下士以上ハ初任ノ日陸軍兵卒ヨリ出身ノ下士以上ハ入營ノ日海軍卒ヨリ出身ノ下士以上ハ五等卒トナリタル日但第二十四條第六ニ當リタル者ハ其兵卒トナリタル日

二 陸軍兵卒ハ入營ノ日海軍卒ハ五等卒トナリタル日但第二十四條第七ニ當リタル者ハ其刑期滿限ノ翌日

三 北海道ニ移住ノ際定規ノ給助ヲ受ケタル屯田兵下士卒ヨリ出身ノ士官以上ハ其士官ニ任シタル日

四 陸軍軍人及海軍准士官以上ニシテ明治四年八月以前ヨリ勤仕ノ者

ハ同月一日

五 海軍下士以下ニシテ明治二年五月一日以前ヨリ勤仕ノ者ハ同月一日

第二 給助金ニ係ル服役年ノ始期

一 下士以上初任ノ日

第三 服役年ノ終期

一 現役ヲ離レタルノ日

第十八條 左ニ掲クル日數ハ服役年ニ通算ス

一 前條ニ掲クル服役年ノ始期ヨリ終期ニ至ルマテノ日數

二 豫備後備ニ在ル者戰時若クハ事變ニ際シ召集シタルトキハ其召集中ノ日數

三 海軍軍人轉シテ陸軍軍人トナリタルトキハ海軍服務ノ日數陸軍軍人轉シテ海軍軍人トナリタルトキハ陸軍服務ノ日數

四 文官ヨリ轉シテ陸海軍軍人トナリタル者ニ在テハ恩給ヲ受クヘキ最
 下限ノ期ニ至ルマテハ文官服務中ノ日數四分ノ三

五 現役ノ者陸軍見習士官、海軍候補生若クハ陸海軍諸生徒トナリ再ヒ
 現役ニ就キタルトキハ前後ノ日數

六 現役ヲ離レタル後再ヒ現役ニ就キタルトキハ前後ノ日數

七 陸軍見習士官、海軍候補生、陸海軍諸生徒、海軍水雷夫及北海道移住ノ
 際定規ノ給助ヲ受ケタル屯田兵下士卒ニシテ從軍シタルトキハ其日
 數

第十九條 左ニ掲クル日數ハ服役年ヨリ除算ス

一 刑期中及逃走中ノ日數

二 陸軍見習士官、海軍候補生、陸海軍諸生徒中ノ日數但從軍中ノ日數ハ
 此限ニアラス

三 文官奉職中ノ日數ニシテ官吏恩給法ニ依リ除算スヘキ月數

四 年齢十七歳未満ノ日數

第五章 從軍年

第二十條 從軍年ハ現役外ノ年月ト爲シ之ヲ其服役年數ニ加算スルモノト
 ス

第二十一條 從軍年ノ加算ハ左ノ各項ニ依ルヘシ

- 一 外國戰ニ當リ出征軍ニ編入セラレ内國港灣ヲ出發シタルトキハ二個
 年
- 二 内國戰ニ當リ出征軍ニ編入セラレ戰地ニ臨ミタルトキハ一個年
- 三 臨戰合圍地境内ニ於テ服役シタルトキ外國ニ在テハ二個年内國ニ在
 テハ一個年
- 四 日本國外ノ鎮戍ニ在リタルトキハ一個年
- 五 出征事件ニ關シ功績アル者及一時ノ出兵ヲ出征軍ト見做シ從軍年ニ
 加算スヘキ場合ハ勅裁ニ依ル

第二十二條 海軍軍人ノ外國航海ハ從軍年ニ準シ内國港灣出發ノ日ヨリ一航海ヲ半個年ニ加算ス其航海十二個月ニ超エルトキハ更ニ半個年ヲ加算ス但第二十一條ニ當ルトキハ本條ヲ適用セス

第二十三條 從軍年ノ加算ハ十二個月間數回ノ戰役ニ從ヒ若クハ航海ヲ爲スト雖モ重複シテ之ヲ算セス但其一年以上ニ亘リ十二個月ニ餘ル所ノ分數ハ更ニ一役若クハ一航海ト爲ス

第六章 恩給ヲ受クヘキ資格及權利ノ消滅停止

第二十四條 軍人左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ退職恩給、免除恩給、増加恩給、賑恤金、給助金ヲ受クヘキ資格消滅ス

- 一 重罪ノ刑ニ處セラレタルトキ
- 二 日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキ
- 三 將校及相當官准士官ニ於テハ陸海軍刑法剝官ヲ附加スル禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ普通刑法其他ノ罰則ニ依リ禁錮ノ刑ニ處セラレ官職ヲ失ヒタルトキ

ヲ失ヒタルトキ

四 將校及相當官ニ於テハ陸海軍將校分限令第二條第一項第六項ニ依リ免官トナリタルトキ

五 准士官以下願ニ依リ免官若クハ現役ヲ免除シタルトキ

六 陸海軍下士陸軍上等兵看護手樂手補ニ於テハ陸海軍刑法普通刑法其他ノ罰則ニ依リ禁錮ノ刑ニ處セラレ官職ヲ失ヒ若クハ陸軍懲罰令若クハ憲兵條例第三十五條ニ依リ官職ヲ免セラレタルトキ

七 諸卒ニ於テハ普通刑法其他ノ罰則ニ依リ禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ陸海軍刑法ニ依リ將校ニ對シテ剝官ヲ附加スヘキ禁錮ノ刑ニ處セラレタルトキ

第二十五條 退職恩給免除恩給増加恩給ヲ受クル者重罪ノ刑ニ處セラレ若クハ日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ恩給ヲ剝奪ス左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其間之ヲ停止ス

一 再々現役ニ就キ若クハ文官判任以上ニ任シ政府ヨリ俸給ヲ受クルトキ但商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官職ニ在ルトキハ此限ニアラス

二 公權ヲ停止セラレタトキ

増加恩給ハ公權ヲ停止セラレタル場合ニアラレハ停止セサルモノトス

第二十六條 恩給ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル後三箇年内ニ請求セザレハ其權利ヲ拋棄シタルモノトス

第七章 扶助料

第二十七條 軍人左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其寡婦ハ扶助料ヲ受クルノ權利アルモノトス

- 一 第四條第二第三ニ當リ死歿シタルトキ
- 二 第四條第一第四第五條第一ニ當リ恩給ヲ受ケ又ハ之ヲ受クヘキ權利ヲ有シテ死歿シタルトキ

第二十八條 寡婦扶助料ノ年額ハ當該軍人ノ官階ト死歿ノ因由トニ依リ前

條第一ニル當トキハ第五號表ニ依リ第二ニ當ルトキハ第六號表ニ依テ之ヲ給ス

第二十九條 扶助料ヲ受クル者左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其權利消滅ス

- 一 重罪ノ刑ニ處セラレタルトキ
 - 二 日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキ
 - 三 扶助料ヲ受クヘキ權利ノ生シタル日ヨリ三箇年内ニ請求セザルトキ
 - 四 死歿若クハ戸籍ヲ去リ若クハ婚嫁シタルトキ
- 第三十條 扶助料ヲ受クル者公權ヲ停止セラレタルトキハ其間扶助料ヲ停止ス

第三十一條 寡婦ナキトキ又ハ扶助料ヲ受クル寡婦死歿シ若クハ權利消滅シタルトキハ其扶助料ヲ孤兒ニ給ス

扶助料ヲ受クル者公權停止中ハ其轉給ヲ受クヘキ者ニ之ヲ給ス

第三十二條 孤兒扶助料ハ數子アルヘキハ家名繼襲者ニ給シ非戸主軍人ノ孤兒ニ在テハ長子ニ給ス其繼襲者及長子死歿シ若クハ權利消滅シ若クハ支給期限ノ滿ツルトキハ順次年少者ニ及フモノトス但家名繼襲者ヲ除クノ外男子ヲ先ニシ女子ヲ後ニス

第三十三條 扶助料ヲ受クヘキ寡婦及孤兒ナク若クハ扶助料ヲ受ケタル寡婦及孤兒戸籍ヲ去リ若クハ死歿シ若クハ權利消滅シタルトキ父母又ハ祖父母アルトキハ寡婦ニ相當スル扶助料ノ全額ヲ其父母又ハ祖父母ニ終身給スルコトヲ得

其扶助料ハ先ツ父ニ給シ其父存在セサルトキ若クハ權利消滅シタルトキハ母ニ給ス母ヨリ祖父ニ祖父ヨリ祖母ニ轉給スルハ順次此例ニ依ル

第三十四條 扶助料ヲ受クヘキ寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ死歿シタル軍人ノ戸籍内ニアル二十歳未滿又ハ癱疾若クハ不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハサル兄弟姉妹アリテ之ヲ給養スル者ナキトキハ寡婦ニ相當スル

扶助料一個年分ヨリ少カラス五個年分ヨリ多カラサル金額ヲ人員ニ拘ハラス一時限リ其兄弟姉妹ニ給スルコトヲ得

第三十五條 第二十七條乃至第三十四條ヲ適用スヘキ軍人ノ寡婦父母祖父母及兄弟姉妹ハ其軍人現役中陸海軍兵籍簿ニ登記シタル者ニ限ル

第三十六條 此法律ニ於テ孤兒トハ年齢二十歳未滿ノ男女子ニシテ未タ結婚セサル者ヲ云フ但養男女子ハ家名繼襲者ニ限ル

第三十七條 扶助料ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル月ノ翌月ヨリ之ヲ給ス

雜則

第三十八條 陸軍軍人及海軍准士官以上ニシテ明治四年八月以前ヨリ勤仕ノ者退職若クハ免官スルトキハ同年七月以前ノ勤仕ニ對シテハ同年同月ノ現官等ニ相當スル月俸ノ半額ヲ以テ奉職年數ノ一個年ニ當テ其年數ニ應スル金額ヲ一時支給ス

海軍下士以下ニシテ明治二年五月以前ヨリ勤仕ノ者ハ同年四月以前ノ勤

仕ニ對シテハ同年同月ノ現官等ニ相當スル月俸ノ半額ヲ以テ奉職年數ノ一個年ニ當テ其年數ニ應スル金額ヲ一時支給ス

第三十九條 豫備後備ニ在ル者平時召集中職務ノ爲メ死歿シ又ハ傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ服役ニ堪ヘサルトキハ此法律ノ規定スル所ニ依リ恩給ヲ受クルノ權利ヲ有ス

屯田兵下士卒ニシテ定規ノ給助ヲ受クル者平時軍隊勤務ノ爲メ死歿シ又ハ傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ服役ニ堪ヘサルトキ亦同シ

第四十條 陸軍見習士官、海軍候補生、陸海軍諸生徒定規ノ給助ヲ受クル屯田兵下士卒及海軍水雷夫ハ第四條第二第三ニ因リ死歿シ又ハ傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ服役ニ堪ヘサル者ニ限リ恩給ヲ受クルノ權利ヲ有ス

第四十一條 恩給ノ支給ハ陸海軍大臣ノ證明ニ依リ恩給局ノ審査ヲ經テ内閣總理大臣之ヲ裁定ス

行政上ノ處分ニ由リ恩給ニ關スル權利ヲ障害セラレタリトスル者ハ六個

月以内ニ恩給局ニ具申シテ裁決ヲ請フコトヲ得其裁決ニ服セサル者ハ一箇年以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得但左ノ事件ニ關シテハ恩給局ノ裁決ハ終審確定ノモノトス

一 傷痕疾病ノ原因及其輕重

二 職務ニ堪ユルト否ヲサルト

第四十二條 恩給ハ賣買讓與質入書入スルコトヲ得ス又負債ノ抵償トシテ差押フルコトヲ得ス

第四十三條 明治八年達海軍退隱令明治九年達陸軍武官恩給令明治十六年達陸軍恩給令海軍恩給令ニ依リ恩給又ハ退隱料及扶助料ヲ受クル者ハ總テ該令ニ依ルヘシ但明治九年達陸軍武官恩給令ニ依リ受ケタル傷痕恩給ヲ除クノ外其權利消滅及停止ハ此法律ニ依ル

明治七年佐賀及臺灣ノ役明治九年熊本及山口ノ役明治十年鹿兒島ノ役ニ從軍シタル者竝ニ明治十五年同十七年朝鮮國京城變亂ノ際該國ニ駐在若

クハ派遣シタル者ノ從軍年計算ハ總テ從前ノ命令ニ依ル
 第四十四條 此法律施行前ニ現役ヲ離レタル者ノ恩給ハ明治十六年達陸軍
 恩給令海軍恩給令ニ依ルヘシ但此法律施行ノ月ヨリ三箇年內ニ請求セサ
 レハ之ヲ受クヘキ權利ヲ拋棄シタルモノトス
 第四十五條 此法律ハ明治二十三年七月一日ヨリ施行ス

第一號 退職恩給表

年數	將官及相當官		佐尉官及相當官					准士官
	親任官	勳任官	一等	二等	三等	四等	五等	
十八年	千六百七十	千三百四十	八百三十三	六百七十	四百三十三	三百三十三	二百一十一	百六十八
十九年	千七百七十	千三百六十	八百三十三	六百八十	四百三十三	三百三十三	二百一十一	百六十八
二十年	千七百七十	千三百八十	八百三十三	六百九十	四百三十三	三百三十三	二百一十一	百六十八
二十一年	千七百七十	千四百	八百三十三	七百	四百三十三	三百三十三	二百一十一	百六十八
二十二年	千七百七十	千四百二十	八百三十三	七百一十	四百三十三	三百三十三	二百一十一	百六十八
二十三年	千八百	千四百四十	八百三十三	七百二十	四百三十三	三百三十三	二百一十一	百六十八
二十四年	千八百	千四百六十	八百三十三	七百三十	四百三十三	三百三十三	二百一十一	百六十八
二十五年	千八百五十	千四百八十	八百三十三	七百四十	四百三十三	三百三十三	二百一十一	百六十八
二十六年	千八百七十	千五百	八百三十三	七百五十	四百三十三	三百三十三	二百一十一	百六十八
二十七年	千九百	千五百二十	八百三十三	七百六十	四百三十三	三百三十三	二百一十一	百六十八
二十八年	千九百	千五百四十	八百三十三	七百七十	四百三十三	三百三十三	二百一十一	百六十八
二十九年	千九百五十	千五百六十	八百三十三	七百八十	四百三十三	三百三十三	二百一十一	百六十八
三十年	千九百七十	千五百八十	八百三十三	七百九十	四百三十三	三百三十三	二百一十一	百六十八
三十一年	二千	千六百	八百三十三	八百	四百三十三	三百三十三	二百一十一	百六十八
三十二年	二千	千六百二十	八百三十三	八百一十	四百三十三	三百三十三	二百一十一	百六十八
三十三年	二千五十	千六百四十	八百三十三	八百二十	四百三十三	三百三十三	二百一十一	百六十八
三十四年	二千七十	千六百六十	八百三十三	八百三十	四百三十三	三百三十三	二百一十一	百六十八
三十五年	二千	千六百八十	八百三十三	八百四十	四百三十三	三百三十三	二百一十一	百六十八

十八年	千六百七十	千三百四十	八百三十三	六百七十	四百三十三	三百三十三	二百一十一	百六十八
十九年	千七百七十	千三百六十	八百三十三	六百八十	四百三十三	三百三十三	二百一十一	百六十八
二十年	千七百七十	千三百八十	八百三十三	六百九十	四百三十三	三百三十三	二百一十一	百六十八
二十一年	千七百七十	千四百	八百三十三	七百	四百三十三	三百三十三	二百一十一	百六十八
二十二年	千七百七十	千四百二十	八百三十三	七百一十	四百三十三	三百三十三	二百一十一	百六十八
二十三年	千八百	千四百四十	八百三十三	七百二十	四百三十三	三百三十三	二百一十一	百六十八
二十四年	千八百	千四百六十	八百三十三	七百三十	四百三十三	三百三十三	二百一十一	百六十八
二十五年	千八百五十	千四百八十	八百三十三	七百四十	四百三十三	三百三十三	二百一十一	百六十八
二十六年	千八百七十	千五百	八百三十三	七百五十	四百三十三	三百三十三	二百一十一	百六十八
二十七年	千九百	千五百二十	八百三十三	七百六十	四百三十三	三百三十三	二百一十一	百六十八
二十八年	千九百	千五百四十	八百三十三	七百七十	四百三十三	三百三十三	二百一十一	百六十八
二十九年	千九百五十	千五百六十	八百三十三	七百八十	四百三十三	三百三十三	二百一十一	百六十八
三十年	千九百七十	千五百八十	八百三十三	七百九十	四百三十三	三百三十三	二百一十一	百六十八
三十一年	二千	千六百	八百三十三	八百	四百三十三	三百三十三	二百一十一	百六十八
三十二年	二千	千六百二十	八百三十三	八百一十	四百三十三	三百三十三	二百一十一	百六十八
三十三年	二千五十	千六百四十	八百三十三	八百二十	四百三十三	三百三十三	二百一十一	百六十八
三十四年	二千七十	千六百六十	八百三十三	八百三十	四百三十三	三百三十三	二百一十一	百六十八
三十五年	二千	千六百八十	八百三十三	八百四十	四百三十三	三百三十三	二百一十一	百六十八

軍人恩給法

第二號 免除恩給表

年	官		卒				
	數	別	海軍一等卒	海軍二等卒	陸軍三等卒	海軍四等卒	海軍五等卒
三十六年	二千二百	下	八千四百六十三	八千五百	四千三百十九	三千五百五十三	三百十三
三十七年	二千五百	下	八千四百六十四	八千五百	四千三百二十	三千五百五十四	三百十四
三十八年	二千七百	下	八千四百六十五	八千五百	四千三百二十一	三千五百五十五	三百十五
三十九年	二千九百	下	八千四百六十六	八千五百	四千三百二十二	三千五百五十六	三百十六
四十年	三千一百	下	八千四百六十七	八千五百	四千三百二十三	三千五百五十七	三百十七
四十一年	三千三百	下	八千四百六十八	八千五百	四千三百二十四	三千五百五十八	三百十八
四十二年	三千五百	下	八千四百六十九	八千五百	四千三百二十五	三千五百五十九	三百十九
四十三年	三千七百	下	八千四百七十	八千五百	四千三百二十六	三千五百六十	三百二十
四十四年	三千九百	下	八千四百七十一	八千五百	四千三百二十七	三千五百六十一	三百二十一
四十五年	四千一百	下	八千四百七十二	八千五百	四千三百二十八	三千五百六十二	三百二十二
四十六年	四千三百	下	八千四百七十三	八千五百	四千三百二十九	三千五百六十三	三百二十三
四十七年	四千五百	下	八千四百七十四	八千五百	四千三百三十	三千五百六十四	三百二十四
四十八年	四千七百	下	八千四百七十五	八千五百	四千三百三十一	三千五百六十五	三百二十五
四十九年	四千九百	下	八千四百七十六	八千五百	四千三百三十二	三千五百六十六	三百二十六
五十年	五千一百	下	八千四百七十七	八千五百	四千三百三十三	三千五百六十七	三百二十七
五十一年	五千三百	下	八千四百七十八	八千五百	四千三百三十四	三千五百六十八	三百二十八
五十二年	五千五百	下	八千四百七十九	八千五百	四千三百三十五	三千五百六十九	三百二十九
五十三年	五千七百	下	八千四百八十	八千五百	四千三百三十六	三千五百七十	三百三十
五十四年	五千九百	下	八千四百八十一	八千五百	四千三百三十七	三千五百七十一	三百三十一
五十五年	六千一百	下	八千四百八十二	八千五百	四千三百三十八	三千五百七十二	三百三十二
五十六年	六千三百	下	八千四百八十三	八千五百	四千三百三十九	三千五百七十三	三百三十三
五十七年	六千五百	下	八千四百八十四	八千五百	四千三百四十	三千五百七十四	三百三十四
五十八年	六千七百	下	八千四百八十五	八千五百	四千三百四十一	三千五百七十五	三百三十五
五十九年	六千九百	下	八千四百八十六	八千五百	四千三百四十二	三千五百七十六	三百三十六
六十年	七千一百	下	八千四百八十七	八千五百	四千三百四十三	三千五百七十七	三百三十七
六十一年	七千三百	下	八千四百八十八	八千五百	四千三百四十四	三千五百七十八	三百三十八
六十二年	七千五百	下	八千四百八十九	八千五百	四千三百四十五	三千五百七十九	三百三十九
六十三年	七千七百	下	八千四百九十	八千五百	四千三百四十六	三千五百八十	三百四十
六十四年	七千九百	下	八千四百九十一	八千五百	四千三百四十七	三千五百八十一	三百四十一
六十五年	八千一百	下	八千四百九十二	八千五百	四千三百四十八	三千五百八十二	三百四十二
六十六年	八千三百	下	八千四百九十三	八千五百	四千三百四十九	三千五百八十三	三百四十三
六十七年	八千五百	下	八千四百九十四	八千五百	四千三百五十	三千五百八十四	三百四十四
六十八年	八千七百	下	八千四百九十五	八千五百	四千三百五十一	三千五百八十五	三百四十五
六十九年	八千九百	下	八千四百九十六	八千五百	四千三百五十二	三千五百八十六	三百四十六
七十年	九千一百	下	八千四百九十七	八千五百	四千三百五十三	三千五百八十七	三百四十七
七十一年	九千三百	下	八千四百九十八	八千五百	四千三百五十四	三千五百八十八	三百四十八
七十二年	九千五百	下	八千四百九十九	八千五百	四千三百五十五	三千五百八十九	三百四十九
七十三年	九千七百	下	八千五百	八千五百	四千三百五十六	三千五百九十	三百五十
七十四年	九千九百	下	八千五百	八千五百	四千三百五十七	三千五百九十一	三百五十一
七十五年	一萬一千	下	八千五百	八千五百	四千三百五十八	三千五百九十二	三百五十二
七十六年	一萬三千	下	八千五百	八千五百	四千三百五十九	三千五百九十三	三百五十三
七十七年	一萬五千	下	八千五百	八千五百	四千三百六十	三千五百九十四	三百五十四
七十八年	一萬七百	下	八千五百	八千五百	四千三百六十一	三千五百九十五	三百五十五
七十九年	一萬九百	下	八千五百	八千五百	四千三百六十二	三千五百九十六	三百五十六
八十年	二萬一千	下	八千五百	八千五百	四千三百六十三	三千五百九十七	三百五十七
八十一年	二萬三千	下	八千五百	八千五百	四千三百六十四	三千五百九十八	三百五十八
八十二年	二萬五千	下	八千五百	八千五百	四千三百六十五	三千五百九十九	三百五十九
八十三年	二萬七百	下	八千五百	八千五百	四千三百六十六	三千六百	三百六十
八十四年	二萬九百	下	八千五百	八千五百	四千三百六十七	三千六百	三百六十一
八十五年	三萬一千	下	八千五百	八千五百	四千三百六十八	三千六百	三百六十二
八十六年	三萬三千	下	八千五百	八千五百	四千三百六十九	三千六百	三百六十三
八十七年	三萬五千	下	八千五百	八千五百	四千三百七十	三千六百	三百六十四
八十八年	三萬七百	下	八千五百	八千五百	四千三百七十一	三千六百	三百六十五
八十九年	三萬九百	下	八千五百	八千五百	四千三百七十二	三千六百	三百六十六
九十年	四萬一千	下	八千五百	八千五百	四千三百七十三	三千六百	三百六十七
九十年	四萬一千	下	八千五百	八千五百	四千三百七十四	三千六百	三百六十八

二十一年	八十四	四	七十六	六十八	六十二	五十六	五十	四十四	三十九
二十二年	八十七	四	七十八	七十	六十四	五十八	五十二	四十六	四十
二十三年	九十	四	八十一	七十二	六十六	六十	五十四	四十八	四十二
二十四年	九十二	四	八十三	七十四	六十八	六十二	五十六	五十	四十四
二十五年	九十四	四	八十五	七十六	七十	六十四	五十八	五十二	四十六
二十六年	九十六	四	八十七	七十八	七十二	六十六	六十	五十四	四十八
二十七年	九十九	四	八十九	八十	七十四	六十八	六十二	五十六	五十
二十八年	一百	四	九十二	八十二	七十七	七十一	六十五	五十九	五十三
二十九年	一百	五	九十五	八十四	八十	七十四	六十八	六十二	五十六
三十年	一百	七	九十七	八十六	七十八	七十二	六十六	六十	五十四
三十一年	一百	九	九十九	八十八	八十	七十四	六十八	六十二	五十六
三十二年	一百	十一	一百	九十	八十二	七十六	七十	六十四	五十八
三十三年	一百	十四	一百	三	九十二	八十四	七十八	七十二	六十六
三十四年	一百	十七	一百	五	九十四	八十六	八十	七十四	六十八
三十五年	一百	二十	一百	八	九十六	八十八	八十二	七十六	七十
三十六年	一百	二十二	一百	十	九十八	九十	八十四	七十八	七十二
三十七年	一百	二十四	一百	十二	一百	九十二	八十六	八十	七十四
三十八年	一百	二十六	一百	十四	一百	九十四	八十八	八十二	七十六
三十八年	一百	二十六	一百	十四	一百	九十四	八十八	八十二	七十六

軍人恩給法

三十九年	百二十九圓百十六圓百四十四圓九十五圓八十六圓七十七圓六十八圓六十圓
四十年	百三十二圓百十九圓百六十四圓九十七圓八十八圓七十九圓七十圓六十一圓

第三號 負傷增加恩給表

項等	將官及相當官		佐尉官及相當官		准士官及下士	
	勅任官	奏任官	勅任官	奏任官	勅任官	奏任官
一項	千五百圓	千二百圓	千二百圓	千二百圓	千二百圓	千二百圓
二項	千四百圓	千一百圓	千一百圓	千一百圓	千一百圓	千一百圓
三項	千三百圓	千圓	千圓	千圓	千圓	千圓
四項	千二百圓	九百圓	九百圓	九百圓	九百圓	九百圓
五項	千圓	八百圓	八百圓	八百圓	八百圓	八百圓
六項	九百圓	七百圓	七百圓	七百圓	七百圓	七百圓

第四號 給助金表

親任官	將官及相當官		佐尉官及相當官		准士官及下士	
	勅任官	奏任官	勅任官	奏任官	勅任官	奏任官
一等	千五百圓	千二百圓	千二百圓	千二百圓	千二百圓	千二百圓
二等	千四百圓	千一百圓	千一百圓	千一百圓	千一百圓	千一百圓
三等	千三百圓	千圓	千圓	千圓	千圓	千圓
四等	千二百圓	九百圓	九百圓	九百圓	九百圓	九百圓
五等	千圓	八百圓	八百圓	八百圓	八百圓	八百圓
六等	九百圓	七百圓	七百圓	七百圓	七百圓	七百圓

第五號 戰闘及公務ノ爲メ死歿シタル者ノ寡婦孤兒扶助料

親任官	將官及相當官		佐尉官及相當官		准士官及下士	
	勅任官	奏任官	勅任官	奏任官	勅任官	奏任官
一等	千五百圓	千二百圓	千二百圓	千二百圓	千二百圓	千二百圓
二等	千四百圓	千一百圓	千一百圓	千一百圓	千一百圓	千一百圓
三等	千三百圓	千圓	千圓	千圓	千圓	千圓
四等	千二百圓	九百圓	九百圓	九百圓	九百圓	九百圓
五等	千圓	八百圓	八百圓	八百圓	八百圓	八百圓
六等	九百圓	七百圓	七百圓	七百圓	七百圓	七百圓

第六號 寡婦孤兒扶助料

親任官	將官及相當官		佐尉官及相當官		准士官及下士	
	勅任官	奏任官	勅任官	奏任官	勅任官	奏任官
一等	千五百圓	千二百圓	千二百圓	千二百圓	千二百圓	千二百圓
二等	千四百圓	千一百圓	千一百圓	千一百圓	千一百圓	千一百圓
三等	千三百圓	千圓	千圓	千圓	千圓	千圓
四等	千二百圓	九百圓	九百圓	九百圓	九百圓	九百圓
五等	千圓	八百圓	八百圓	八百圓	八百圓	八百圓
六等	九百圓	七百圓	七百圓	七百圓	七百圓	七百圓

軍人恩給法施行規則 第三十三年七月
 軍人恩給法施行規則 第五號
 軍人恩給法施行規則

第一條 軍人恩給法ニ依リ退職恩給免除恩給增加恩給賑恤金給助金ヲ受クヘキ者ハ其請求書ニ履歷書ヲ添ヘ公務ノ爲メ受ケタル傷痍疾病ニ起因シ之ヲ請求スル者ハ軍人恩給法第十二條ニ掲クル書類ヲ添ヘ所管長官ニ差出シ所管長官ヨリ陸軍大臣若クハ海軍大臣ニ差出スヘシ

第二條 軍人恩給法ニ依リ恩給ヲ受クヘキ資格アル軍人死歿シタルトキハ所管長官ヨリ死者ノ履歷書ヲ其遺族ニ下付スヘシ
軍人恩給法第二十七條第一ニ當ル者アリタルトキハ所管長官ヨリ其事
實ヲ證明スヘキ書類ヲ其遺族ニ下付スヘシ

第三條 軍人恩給法ニ依リ扶助料ヲ請求スル者ハ其請求書ニ請求者署名
シ後見人アルハ其後 親族二名親族ナキトキハ居住地ノ戸主二名連署シ
市町村長ノ與印ヲ受ケ左ニ掲クル書類ノ外市町村長ノ證明シタル戸籍
調書ヲ添ヘ地方長官ニ差出スヘシ
一 現役中死歿シタル軍人ノ遺族ハ所管長官ヨリ下渡シタル死者ノ履
歷書

- 二 前項ノ者軍人恩給法第二十七條第一ニ當ルトキハ履歷書ノ外所管
長官ヨリ下渡シタル公務ノ爲メ死歿シタル事實ヲ證明スヘキ書類
- 三 恩給ヲ受ケタル軍人ノ遺族ハ其恩給證書
- 四 扶助料ヲ受クル者死歿若クハ權利消滅シ若クハ支給期限ノ滿チタ
ルトキ其轉給ヲ受クヘキ者ハ前者ノ恩給證書
- 五 扶助料ヲ受クル者公權停止ニ因リ其轉給ヲ受クヘキ者ハ確定裁判
ノ宣告書寫
- 六 軍人恩給法第三十四條ニ當ル癡疾不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハ
サル者ハ第一第二若クハ第三若クハ第四ニ掲クル書類ノ外醫師ノ

診斷證書

地方長官前項ノ請求ヲ受ケタルトキハ陸軍大臣若クハ海軍大臣ニ差出
スヘシ但明治十年鹿兒島ノ役ニ從軍シ陸軍恩給令ニ依リ恩給ヲ受ケタ
ル元警視局員ノ遺族ヨリ本條ノ請求ヲ爲シタルトキハ地方長官ヨリ内
務大臣ニ差出スヘシ

第四條 陸海軍大臣又ハ内務大臣前條ノ請求書ヲ受ケタルトキハ審査ノ
上請求ノ理由アリト認ムルトキハ恩給計算書ヲ作り證據書類ヲ添ヘ其
傷痕疾病ニ起因スルモノニ付テハ陸軍省醫務局若クハ海軍中央衛生會
議ノ覆覈ヲ經タル書類軍人ノ寡婦父母祖父母及兄弟姉妹ノ扶助料ニ付
テハ陸海軍兵籍簿ノ寫ヲ添ヘ内閣總理大臣ニ差出スヘシ
陸海軍大臣又ハ内務大臣ニ於テ前項請求ノ理由ナシト認ムルトキハ意
見ヲ具シテ之ヲ内閣總理大臣ニ差出スヘシ

第五條 内閣ニ於テ恩給ノ請求ヲ許可シタルトキハ恩給證書ヲ作り陸軍
省若クハ海軍省若クハ内務省ヲ經テ本人居住地ノ地方廳ヲシテ之ヲ下
付セシム但一時ノ支給ニ係ルモノハ辭令書ヲ用ユ
恩給證書若クハ辭令書ヲ下付シタルトキハ内閣ハ其旨ヲ大藏省ニ通報
スヘシ

第六條 軍人恩給法第三十八條ノ月俸ニシテ米給ニ係ルモノハ官吏恩給
法施行規則第十一條ノ例ニ依ル

第七條 扶助料ヲ受クル者死歿若クハ戶籍ヲ去リ若クハ婚嫁シ若クハ支給期限ノ滿チタルトキハ地方廳ニ於テ其月ノ翌日ヨリ扶助料ノ支給ヲ廢シ其旨ヲ大藏省ニ通知スヘシ大藏省ハ之ヲ内閣恩給局ニ通知スヘシ前項ノ場合ニ於テ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ナキトキハ地方廳ニ於テ其恩給證書ヲ收メテ内閣恩給局ニ送付スヘシ

第八條 軍人恩給法第九條第十四條第十五條ノ傷痍疾病輕重ノ等差ハ陸海軍大臣之ヲ定ム

第九條 明治八年達陸軍武官傷痍扶助死亡ノ者祭察家族扶助概則及海軍

退隱令明治九年達陸軍武官恩給令明治十六年達陸軍恩給令海軍恩給令

ニ依リ恩給又ハ退隱料扶助料ヲ受クル者左ノ場合ニ於テハ本則ニ依ル

一 死歿又ハ權利消滅又ハ停止ノトキ

二 恩給證書ヲ亡失シタルトキ

三 改氏名又ハ他府縣ニ轉籍若シハ寄留スルトキ

第十條 明治十六年達陸軍恩給令海軍恩給令ニ依リ恩給又ハ扶助料ヲ請

求スル者ハ本則ニ依ルヘシ

第十一條 市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ本規則ニ依リ市町村長

ノ爲スヘキ職務ハ區戶長ニ於テ之ヲ行フヘシ

第十二條 本規則ニ於テ特別ノ規定ヲ設ケサルモノハ總テ官吏恩給法施行規則ノ例ニ依ル

○

○市町村立小學教員退隱料及遺族扶助料法明治二十三年十月法律第九十號

朕市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法

第一條 市町村立小學校ノ正教員ハ此法律ノ規定ニ從ヒ退隱料ヲ受クルノ權利ヲ有ス

第二條 在職滿十五年以上ノ者左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ終身退隱料ヲ給ス

一 年齡六十歳ヲ超ヘ退職ヲ命シタルトキ

二 傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ其職務ニ堪ヘサルカ爲退職ヲ命シタルトキ

三 廢校ニ依リ退職シ又ハ學校編制ノ變更ニ依リ退職ヲ命シタルトキ

第三條 左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ前條ノ年限ニ滿タサルモ終身退隱料ヲ給シ尙其最下金額十分ノ七マテノ増加退隱料ヲ給ス

一 職務ニ依リ傷痕ヲ受ケ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘサルカ爲退職ヲ命シタルトキ

二 職務ニ依リ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ顧ミルコト能ハスシテ勤務ニ從事シ爲ニ疾病ニ罹リ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘサルカ爲退職ヲ命シタルトキ

第四條 官吏恩給法第五條第一項第四項第六條第十一條ハ退隱料ニ適用ス退隱料等ノ支給上ニ關スル在職年數ノ算定ニ關スル規則ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第五條 退隱料ヲ受クル者左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ退隱料ヲ受クルノ權利ヲ失フモノトス

一 失職ニ該當スヘキ現職中ノ所爲確定シタルトキ

二 禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルトキ

三 日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキ

四 第二條第二第三條若クハ第七條ニ依リ退隱料ヲ受クル者復タヒ其職務ニ堪フルニ至ルコトアルモ仍府縣知事ヨリ指命セラル、所ノ教職ニ就カサルトキ又ハ第二條第三ニ依リ退隱料ヲ受クル者府縣知事ヨリ指命セラル、所ノ教職ニ就カサルトキ但其給料ハ退職現時ノ給料ヨリ少額ナラス且年齡未タ六十歳ニ至ラサル場合ニ限ル

五 府縣知事ノ許可ヲ經スシテ公務ニ就キタルトキ

退隱料ヲ受クル者左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ其時間退隱料ヲ受クルコトヲ得ス

一 公務ニ就キ退職現時ノ給料額ト同額以上ノ給料ヲ受クルトキ

二 三箇年以上受領ヲ怠リタルトキ

三 公權ヲ停止セラレタルトキ

第六條 年齢未タ六十歳ニ至ラスシテ自己ノ便宜ニ依リ退職シタル者又ハ免職ニ處セラレ若クハ失職ニ該當シタル者ハ退隱料ヲ受クルノ資格ヲ失フモノトス

第七條 市町村立小學校ノ准教員ハ職務ノ爲傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ

第三條ニ該當スル者ニ限り退職現時ノ給料四分ノ一ノ退隱料ヲ終身給與ス
第八條 在職滿五年以上十一年未滿ニシテ退職シタル市町村立小學校正教員ハ退職現時ノ給料二箇月分ニ當ル金員ヲ給シ其滿十一年以上十五年未滿ニシテ退職シタル者ハ給料三箇月分ニ當ル金員ヲ給ス

第二條第三條又ハ第七條ニ依リ退隱料ヲ受クル者自己ノ便宜ニ依リ退職シタル者又ハ免職ニ處セラレ若クハ失職ニ該當シタル者又ハ前項ノ給與ヲ受クヘキ事由ノ生シタル後三箇月内ニ之ヲ請求セサル者ハ前項ノ限ニ在ラス

自己ノ便宜ニ依リ本條第一項ノ給與ヲ受ケサル者他日市町村立小學校正教員ノ職ニ就クトキハ前ノ在職年數ヲ以テ退隱料等ノ給與上ニ關スル在職年數ニ算入スヘキモノトス但其給與ヲ受クヘキ事由ノ生シタル後三箇月内ニ之ヲ受ケサルコトヲ申立テサル者ハ本文ノ限ニ在ラス

第九條 退隱料ノ支給及第八條ノ給與ハ市町村長ノ證明ニ依リ府縣知事之ヲ裁定ス

官吏恩給法第十六條及第十八條ハ退隱料ニ適用ス

第十條 市町村立小學校正教員左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ其遺族ハ此法律ノ規定ニ從ヒ扶助料ヲ受クルノ權利ヲ有ス

- 一 在職十五年以上ノ者在職中死去シタルトキ
- 二 在職十五年未滿ノ者職務ノ爲死去シタルトキ
- 三 退隱料ヲ受クル者死去シタルトキ

第十一條 官吏遺族扶助法第四條第一項第二項第五條乃至第十條第十二條

乃至第十六條ハ此法律ニ規定スル扶助料ニ適用ス

官吏遺族扶助法第十一條ハ此法律ニ規定スル扶助料ヲ受クヘキ寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ死去シタル者ノ戶籍内ニ在ル二十歳未満又ハ癡疾若クハ不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハサル兄弟姉妹アリテ之ヲ給養スル者ナキ場合ニ適用ス

第十二條 在職十五年未満ノ市町村立小學校正教員在職中職務ノ故ニアラスシテ死去シタルトキハ其遺族ニ一時扶助金ヲ給ス

前項ノ扶助金ハ在職三年未満ニシテ在職最終ノ給料一箇月分ニ當ル金員トシ三年以後滿一年毎ニ給料年額百分ノ二ニ當ル金員ヲ加フ

第十三條 扶助料及扶助金ノ支給並第八條及第十一條第二項ノ給與ハ市町村長ノ申牒ニ依リ府縣知事之ヲ裁定ス

第十四條 府縣ハ小學校教員恩給基金ヲ備フヘキモノトス
市町村ハ其市町村立小學校ニ在職スル正教員ノ給料額百分ノ一ニ當ル金

員ヲ毎年其府縣ニ納ムヘキモノトス

市町村立小學校正教員ハ其給料額百分ノ一ニ當ル金員ヲ毎年其府縣ニ納ムヘキモノトス

本條第二項及第三項ノ納金ハ府縣小學校教員恩給基金ト爲スヘシ

恩給基金ハ其利子ヲ以テ退隱料扶助料扶助金第八條及第十一條第二項ノ給與ニ充ツルノ外之ヲ支消スルコトヲ得サルモノトス

本條第二項及第三項ニ依リ各府縣ニ於テ收入シタル納金額四分ノ一ニ當ル金員ヲ收入年度ノ翌々年度毎ニ國庫ヨリ府縣ニ給與スルモノトス

退隱料扶助料扶助金第八條及第十一條第二項ノ給與ハ恩給基金ノ利子及國庫ノ給與金其他ノ收入ヲ以テ之ヲ支辨シ不足アルトキハ府縣費ヲ以テ之ヲ補充スヘキモノトス

恩給基金ノ管理並退隱料扶助料扶助金第八條及第十一條第二項ノ給與ノ支給等ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

恩給基金ノ管理並退隱料扶助料扶助金第八條及第十一條第二項ノ給與ノ支給等ニ關スル費用ハ總テ府縣ノ負擔トス

第十五條 此法律中第一條乃至第十三條ハ明治二十六年度ヨリ第十四條ハ明治二十五年ヨリ之ヲ施行ス

第十六條 府縣制郡制又ハ市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テ此法律ノ條規ニ對シ特例ヲ設クルコトヲ必要トスルトキハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

○府縣立師範學校校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法明治二十三年十月法律第九十一號

朕府縣立師範學校校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

府縣立師範學校校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法

第一條 府縣立師範學校長ノ俸給ハ國庫ノ負擔トス

第二條 府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員ハ此法律ノ規定ニ從ヒ退隱料ヲ受クルノ權利ヲ有ス

第三條 在職滿十五年以上ノ者左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ終身退隱料ヲ給ス

- 一 年齡六十歳ヲ越ヘ退職ヲ命シタルトキ
- 二 傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ其職務ニ堪ヘサルカ爲退職ヲ命シタルトキ

三 廢校ニ依リ退職シ又ハ學校編制ノ變更ニ依リ退職ヲ命シタルトキ

第四條 左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ前條ノ年限ニ滿タサルモ終身給隱料ヲ給シ尙其最下金額十分ノ七マテノ増加退隱料ヲ給ス

- 一 職務ニ依リ傷痕ヲ受ケ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニ

シテ其職務堪ヘサルカ爲退職ヲ命シタルトキ
 二 職務ニ依リ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ顧ミルコト能ハスシテ勤
 務ニ従事シ爲ニ疾病ニ罹リ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ
 者ニシテ其職務ニ堪ヘサルカ爲退職ヲ命シタルトキ

第五條 官吏恩給料第五條第一項第五項第五項第六條及第十一條ハ退職料
 ニ適用ス

第六條 府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員ニ準スヘキ官立公立
 學校職員ヨリ府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員ニ轉シタル者
 ハ該官立公立學校ニ於ケル勤務ノ年數ヲ退職料等ノ給與上在職年數ニ算
 入スヘキモノトス其在職年數ノ算定ニ關スル規則竝府縣立師範學校及公
 立中學校ノ學校長正教員ニ準スヘキ官立公立學校職員ト認ムヘキ者ハ勅
 令ヲ以テ之ヲ定ム

第七條 退職料ヲ受クル者左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ退職料ヲ受クルノ權

利ヲ失フモノトス

- 一 失職ニ該當スヘキ現職中ノ所爲確定シタルトキ
- 二 禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルトキ
- 三 日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキ
- 四 第三條第二第四條若クハ第九條ニ依リ退職料ヲ受クル者復タヒ其職
 務ニ堪フルニ至ルコトアルモ仍官ヨリ指命セラル、所ノ教職ニ就カ
 サルトキ又ハ第三條第三ニ依リ退職料ヲ受クル者官ヨリ指命セラル
 、所ノ教職ニ就カサルトキ但其俸給ハ退職現時ノ俸給ヨリ少額ナラ
 ス且年齢未タ六十歳ニ至ラサル場合ニ限ル
- 五 府縣知事ノ許可ヲ經スシテ公務ニ就キタルトキ
 退職料ヲ受クル者左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ其時間退職料ヲ受クルコト
 ナ得ス
- 一 公務ニ就キ退職現時ノ俸給額ト同額以上ノ給料ヲ受クルトキ

二 三箇年以上受領ヲ怠リタルトキ
三 公權ヲ停止セラレタルトキ

第八條 年齢未タ六十歳ニ至ラスシテ自己ノ便宜ニ依リ退職シタル者又ハ免職ニ處セラレ若クハ失職ニ該當シタル者ハ退隱料ヲ受クルノ資格ヲ失フモノトス

第九條 府縣立師範學校及公立中學校ノ准教員ハ職務ノ爲傷疾ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ第四條ニ該當スル者ニ限り退職現時ノ俸給四分ノ一ノ退隱料ヲ終身給與ス

第十條 府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員在職滿一年以上五年未滿ニシテ退職シタル者ハ退職現時ノ俸給一箇月分ニ當ル金員ヲ給シ其滿五年以上十一年未滿ニシテ退職シタル者ハ俸給二箇月分ニ當ル金員ヲ給シ其滿十一年以上十五年未滿ニシテ退職シタル者ハ俸給三箇月ニ當ル金員ヲ給ス

第三條第四條又ハ第九條ニ依リ退隱料ヲ受クル者自己ノ便宜ニ依リ退職シタル者又ハ免職ニ處セラレ若クハ失職ニ該當シタル者又ハ前項ノ給與ヲ受クヘキ事由ノ生シタル後三箇月内ニ之ヲ請求セサル者ハ前項ノ限ニ在ラス

自己ノ便宜ニ依リ本條第一項ノ給與ヲ受ケサル者他日府縣立師範學校及公立中學校長正教員ノ職ニ就クトキハ前ノ在職年數ヲ以テ退隱料等ノ給與上ニ關スル在職年數ニ算入スヘキモノトス但其給與ヲ受クヘキ事由ノ生シタル後三箇月内ニ之ヲ受ケサルコトヲ申立サル者ハ本文ノ限ニ在ラス

本條ノ給與及之ニ關スル費用ハ退職者ノ退職ノ際勤務セシ學校所屬府縣郡市町村ノ負擔トス

第十一條 退隱料ノ支給ハ府縣知事ノ證明ニ依リ文部大臣之ヲ裁定ス
官吏恩給法第十六條及第十八條ハ退隱料ニ適用ス

第十二條 府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員左ノ事項ノ一二當

ルトキハ其遺族ハ此法律ノ規定ニ從ヒ扶助料ヲ受クルノ權利ヲ有ス

一 在職十五年以上ノ者在職中死去シタルトキ

二 在職十五年未滿ノ者職務ノ爲死去シタルトキ

三 退隱料ヲ受クル者死去シタルトキ

第十三條 官吏遺族扶助法第四條乃至第十條第十二條乃至第十六條ハ此法律ニ規定スル扶助料ニ適用ス

官吏遺族扶助法第十一條ハ此法律ニ規定スル扶助料ヲ受クヘキ寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ死去シタル者ノ戶籍内ニ在ル二十歳未滿又ハ癡疾若クハ不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハサル兄弟姉妹アリテ之ヲ給養スル者ナキ場合ニ適用ス

第十四條 府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員ニシテ在職十五年未滿ノ者在職中職務ノ故ニアラスシテ死去シタルトキハ其遺族ニ一時扶

助金ヲ給ス

前項ノ扶助金ニ就キテハ官吏遺族扶助法第十七條第二項ヲ適用ス

第十五條 扶助料及扶助金ノ支給並第十三條第二項ノ給與ハ府縣知事ノ申牒ニ依リ文部大臣之ヲ裁定ス

第十六條 府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員ハ其俸給百分ノ一ヲ毎年國庫ニ納ムヘシ

府縣郡市町村ハ其府縣立師範學校及公立中學校長正教員ノ俸給百分ノ一二當ル金員ヲ毎年國庫ニ納ムヘシ

第十七條 退隱料扶助料扶助金及第十三條第二項ノ給與並其支給ニ關スル費用ハ國庫ノ負擔トス

退隱料扶助料扶助金等ノ支給ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第十八條 同一人ニシテ國庫ヨリ二種以上ノ退隱料又ハ扶助料ヲ受クヘキ者アルトキハ本人ノ所擇ニ任セ其一ヲ給スルモノトス

第十九條 府縣立師範學校及公立中學校書記ノ退隱料等ハ府縣知事郡長市町村長ニ於テ府縣郡市町村會ノ意見ヲ聞キ之ヲ定ムルコトヲ得
府縣立師範學校及公立中學校並市町村立小學校ニアラサル公立學校職員ノ退隱料等ハ前項ノ例ニ依ル

本條ノ退隱料等及其支給ニ關スル費用ハ其府縣郡市町村ノ負擔トス

第二十條 此法律第一條ハ明治二十五年ヨリ第二條乃至第十九條ハ明治二十六年度ヨリ之ヲ施行ス

第二十一條 府縣制郡制又ハ市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テ此法律ノ條規ニ對シ時例ヲ設クルコトヲ必要トスルトキハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

○ 巡查看守給助例 明治十五年七月 第四十一號達

沿革略記 明治六年十一月第三百九十二號達ヲ以テ巡卒番人褒賞規程并死傷扶持追賞給規ヲ定ム○八年一月第三號達ヲ以テ前令ヲ改正ス○十五年七月第四十一號達ヲ以テ巡查看守給助例ヲ定メ實施ノ府縣ハ八年第三號達ヲ廢止ス

巡查看守給助例別紙ノ通相定候條各地方ニ於テ給助金額ヲ定メ「内務卿」ノ認可ヲ經テ施行可致此旨相達候事

但實施ノ府縣ハ八年一月第三號達并九年八月第八拾號達別表中免職歸國旅費ハ相廢候儀ト相心得ヘシ

(別紙)

巡查看守給助例

第一條 給助ハ退職給助、傷痍給助、死亡給助、療治料、祭祀料ノ五種トス

第二條 給助ヲ與ル者ハ左ノ如シ

- 一 退職給助 勤續巡查ヨリ看守ニ看守ヨリ巡滿五年以上ニシテ退職スル者ニハ一時之ヲ給シ滿十年以上ニシテ退職スル者ニハ終身之ヲ給

巡查看守給助例

- ス
- 二 傷痕給助 職務ノ爲メ負傷スル者ニ終身之ヲ給ス
- 三 死亡給助 職務上爲メ重傷死ニ至ル者及ヒ負傷後其傷痕ニ原シテ死亡スル者又ハ職務ノ傳染病ニ罹リ死亡スル者ノ遺族ニ之ヲ給ス
- 四 療治料 職務ノ爲メ負傷シ若クハ傳染病ニ罹ル者ニ之ヲ給ス
- 五 祭祀料 奉職中死亡スル者ニ之ヲ給ス

第三條 退職給助ノ額

- 一 勤續滿五年ノ者ハ一時金貳拾圓ヨリ少カラス三拾圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス滿六年以上九年迄ハ一年毎ニ金三圓ヨリ少カラス五圓ヨリ多カラサル額ヲ増給ス
- 二 勤續滿十年ノ者ハ年金貳拾五圓ヨリ少カラス三拾圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス滿十一年以上ハ一年毎ニ金五拾錢ヨリ少カラス壹圓ヨリ多カラサル額ヲ増給ス

第四條 傷痕給助ノ額

- 一 一等傷終身不具トナリ自用ハ年金三拾圓ヨリ少カラス四拾圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス
- 二 二等傷終身不具トナリ自ハ年金貳拾圓ヨリ少カラス三拾圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

第五條 死亡給助ノ額

- 一 寡婦又ハ相續ノ孤兒アル時ハ年金三拾圓ヨリ少カラス五拾圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス寡婦再嫁シ孤兒二十歳ニ至レハ廢止ス但寡婦アレハ孤兒ニ給セス
- 二 寡婦又ハ孤兒ノ給助ヲ受ル者ナク祖父母父母又ハ二十歳未滿ノ兄弟姉妹ニシテ死者ニ依リ從來生計ヲ爲セシ者アルトキハ一時金五拾圓ヨリ少カラス百圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス
- 三 相續者タル孤兒滿二十歳ニ至ルモ癡篤疾ナルトキハ年金ヲ廢止スル

巡査看守給助例

ニ際シ一時金五拾圓ヨリ少カラス百圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

第六條

療治料ハ傷痍又ハ病症ノ輕重ニ依リ其適度ヲ量リ之ヲ給ス

第七條 祭祀料

- 一 奉職一年未滿ニシテ死亡スル者ハ一時金拾圓ヨリ少カラス拾五圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス滿一年以上一年毎ニ金三圓ヨリ少カラス五圓ヨリ多カラサル額ヲ増給ス
- 二 職務ノ爲メ死亡スル者ハ前項ノ外一時金五拾圓ヨリ少カラス百圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

第八條 左ノ各項ニ該ル者ハ給助ヲ受ルヲ得ス

- 一 公權ヲ剝奪セラレタル者
- 二 懲罰ニヨリ免職セラレタル者

第九條 左ノ各項ニ該ル者ハ其時間給助ヲ停止ス

- 一 俸給ヲ受ルノ官職ニ就キタル者

- 二 公權ヲ停止セラレタル者
- 三 失踪シタル者

四 許可ヲ得スシテ外國ニ出テ一年以上歸朝セサル者

○巡查看守給助例施行前二年以上在職者退職ノ時慰勞金支給方明治十五年七月

第四十二號達

巡查看守給助例施行ノ期ニ際シ現在職滿二年以上五年未滿ノ者引續キ五年未滿奉職ノ日ニシテ退職スルトキハ給助例施行ノ日ヲ限界トシ勤續年數ニ應シ滿年賜金ノ例ニ據リ當時ノ月俸額ヲ以テ退職ノ際一時慰勞金ヲ支給スヘシ此旨相達候事

○巡查看守給助例實施ノ府縣減員ニテ免職者ハ一時慰勞金支給方明治十五年十二月 第六十六號達

巡查看守給助例

本年七月第四拾一號ヲ以テ巡查看守給助例相達候處右實施ノ府縣ニ於テ人員減少等ニ因リ免職スルコトアルトキ奉職五年未滿ノ者ハ免職當日迄ノ勤績年數ニ應シ滿年賜金ノ例ニ據リ一時慰勞金トシテ支給スヘシ此旨相達候事

○巡查看守給助例第二條第一項割註ハ一地方轉任者ニ限ル內十五年乙卯六月八號十達

本年七月第四拾壹號公達巡查看守給助例第二條第一項勤績割註ノ趣ハ全ク一地方內轉任スル者ニ限ル義ニ付此旨爲心得相達候事

○巡查看守給助例中年金支給方內二十年四月務令第二十三號

巡查看守給助例中年金ハ左ノ各項ニ據リ支給スヘシ
一年金ハ毎年三月及九月ニ於テ其月ヨリ前六ヶ月ハ六ヶ月ニ滿タサルモノ現月數ヲ以テ計算ス分ヲ支給スヘシ

一年金ハ退職又ハ死亡又ハ傷疾ノ翌月ヨリ支給スヘシ

一年金ヲ受ケタル者本例第八條第一項及第九條ニ該當スルトキハ日割ヲ以テ支給スヘシ

一年金ヲ受ケタル者死亡又ハ本例第五條第一項後段ニ該當スルトキハ其

月分金額ヲ支給スヘシ

○宮内省官吏准官吏恩給例及遺族扶助例明治二十三年八月宮内省達第十六號

明治二十年達第二號宮内省官吏恩給例明治二十二年達第二十四號宮内省准官吏恩給例ヲ廢シ宮内省官吏准官吏恩給例同遺族扶助例左ノ通相定ム

宮内省官吏恩給例

第一條 宮内省官吏判任以上ノ者退官シタルトキハ本例ノ規定スル所ニ依リ恩給ヲ給ス

第二條 左ノ事項ハ明治二十三年法律第四十三號官吏恩給法ニ規定ノ條項ヲ適用ス

- 一 在官滿十五年以上ノ者ニ對シ恩給ヲ給スル場合及其給額
- 二 傷疾疾病ニ罹リシ者ニ對シ恩給ヲ給スル場合及其給額
- 三 在官年數ノ計算並明治四年七月以前ノ在官者ニ對スル支給方

宮内省官吏准官吏恩給例及遺族扶助例

二十三年法律
第四十三號
官吏恩給法
ハ本例ニ依
リ施行ス

四 恩給ヲ受クル者再ヒ官ニ就キ退官シタルトキ支給ノ區別
五 恩給ノ停止及剝奪

六 恩給ヲ受クル資格ノ存否

第三條 宮内大臣ノ在職年數ハ國務大臣ノ例ニ依ル

第四條 政府ノ文官ヨリ宮内省ニ轉任シタル者又ハ恩給ヲ受ケスシテ政府

ヲ退キタル後宮内官ニ任シタル者ハ政府ノ判任官以上ニ在リシ月數モ在
官年數中ニ通算ス

第五條 准官吏宮内省官制ニ於テ特ニ指定シタル者ヨリ官吏トナリタル者ハ准

官吏在官年數五分ノ一ヲ減シテ官吏在官年數ニ通算ス

第六條 准官吏ヨリ官吏トナリタル當月ハ官吏在官年數中ニ算入ス

第七條 俸給ヲ受ケサル官吏並高等官試補判任官見習補助員顧問員評議員

又ハ御用掛勤務殿掌殿部其他何等ノ名稱ヲ附スルモ宮内省官制外ニ屬ス
ル者ニハ恩給ヲ給スルコトナシ但高等官試補及判任官見習ノ傷痕疾病ニ

對スルモノハ此限ニアラス

第八條 恩給ノ支給ハ其所管長所管長ナキ者ハ内事課長ノ證明ニ依リ調査
課ノ審査ヲ經テ宮内大臣之ヲ裁定ス

第九條 前條ノ裁定ニ服セサル者ハ六箇月以内ニ宮内大臣ニ具狀シ再審査
ヲ請求スルコトヲ得

第十條 前條再審査ノ請求アルトキ宮内大臣ハ特ニ審査委員ヲ命シ審査ノ
上裁決ス此裁決ヲ以テ終結トシ他ニ告訴スルコトヲ得ス

第十一條 恩給ハ賣却讓與質入書入スルコトヲ得ヌ又負債ノ抵償トナスコ
トヲ得ヌ違フ者ハ恩給ヲ停止ス

第十二條 恩給ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル後三箇年ヲ過クレハ之ヲ請
求スルコトヲ得ヌ

第十三條 明治二十年達第二號宮内省官吏恩給例ニ依リ恩給ヲ受ケタル者
ハ其恩給例ニ依ルヘシ但停止及剝奪ハ本例ニ依ル

第十四條 判任官以上ノ者在官滿一年以上十五年未滿ニシテ退官シタル者

ニハ明治二十三年勅令第九十八號ヲ適用シ一時賜金ヲ給ス

宮内省准官吏恩給例

第一條 宮内省准官吏宮内省官制ニ於テ特ニ指定シタル准判任以上ヲ云フ以下皆同シノ退官シタルトキハ本例ノ規定スル所ニ依リ恩給ヲ給ス

第二條 左ノ事項ハ明治二十三年法律第四十三號官吏恩給法ニ規定ノ條項ヲ適用ス

- 一 在官滿十五年以上ノ者ニ對シ恩給ヲ給スル場合
- 二 傷疾疾病ニ罹リシ者ニ對シ恩給ヲ給スル場合
- 三 在官年數ノ計算竝明治四年七月以前ノ在官者ニ對スル支給方
- 四 恩給ヲ受クル者再ヒ官ニ就キ退官シタルトキ支給ノ區別
- 五 恩給ノ停止及剝奪
- 六 恩給ヲ受クル資格ノ存否

第三條

准官吏恩給ノ年額ハ退官現時ノ俸給ト在官ノ年數トニヨリ之ヲ定ム即チ在官滿十五年以上十六年未滿ニシテ退官シタル者ノ恩給年額ハ俸給年額四百分ノ八十トシ滿十五年以上一年毎ニ四百分ノ一ヲ加ヘ滿四十年ニ至テ止ム但在官四十年以上ノ者ニ給スヘキ恩給ハ四十年ノ額又十五年未滿ノ者ニ給スヘキ恩給ハ十五年ノ額トス

非職滿期ニ由テ退官シタル者ノ恩給ハ其在職最終ノ俸額ニ依テ之ヲ算定ス兼官ニ依テ受クル加俸ハ恩給年額ヲ算定スルニ當リ之ヲ除算ス恩給年額圓位未滿ノ數ハ圓位ニ滿タシム

第四條

官吏ヨリ准官吏トナリタル者通算シテ十五年ニ滿ツルトキハ官吏在官年數ニ五分ノ一ヲ加ヘテ准官吏在官年數ニ通算シ其加算ノ年數竝爾後勤續ノ年數ニハ第三條ノ算則ヲ以テ滿一年毎ニ四百分ノ一ヲ加ヘ加算ノ年數ヲ併セ滿四十年ニ至テ止ム

第五條

官吏滿十五年以上在官ノ後准官吏トナリタル者ハ其准官吏退官ノ

トキニ於テ准官吏在官年數ノ五分ノ一ヲ減シテ官吏在官年數ニ併算シ官吏恩給支給ノ例ニ依ル

第六條 官吏ヨリ准官吏トナリタル當月ハ官吏在官ノ年數中ニ算入ス

第七條 宮内省官吏恩給例第四條第八條第九條第十條第十一條第十二條ハ本例ニモ適用ス

第八條 准官吏在官滿一年以上十五年未滿ニシテ退官シタル者ニハ明治二十三年勅令第九十八號ヲ適用シ一時賜金ヲ給ス

宮内省官吏准官吏遺族扶助例

第一條 宮内官吏准官吏判任以上ノ者左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ本例ノ規定スル所ニ依リ其遺族ニ扶助料ヲ給ス但第三條ノ納金ヲ爲スヲ要セサル者ノ遺族ハ此限ニアラス

一 在官十五年以上ノ者在官中死去シタルトキ

二 在官十五年未滿ノ者公務ノ爲メ死去シタルトキ

二十三年勅令
第九十八號ハ
本類ニ依ス

三 恩給ヲ受クル者死去シタルトキ

第二條 左ノ事項ハ明治二十三年法律第四十四號官吏遺族扶助法ニ規定ノ條項ヲ適用ス

一 寡婦扶助料ノ年額

二 扶助料ヲ支給スヘキ者及支給轉給ノ制限

三 扶助料ノ廢止停止

四 扶助料ヲ受クヘキ資格ノ消滅

五 在官十五年未滿ニシテ在官中公務ノ故ニアラスシテ死去シタル者ノ遺族ニ給スル一時扶助金

第三條 官吏准官吏判任以上ノ者ハ其俸給百分ノ一ヲ内藏寮ニ納ムヘシ俸給ヲ受ケサル官吏並高等官試補判任官見習補助員顧問員評議員又ハ御用掛勤務殿掌殿部其他何等ノ名稱ヲ附スルモ宮内省官制外ニ屬スル者ハ納金ヲ要セス又兼官ニ依テ受クル加俸ニ對シテハ納金ヲ要セス

宮内省官吏准官吏恩給例及遺族扶助例

二十三年法律
第四十四號ハ
本類ニ依ス

第六條 調査課長ハ前條所管長若クハ内事課長査察ノ書類ニ據テ檢案シ
宮内大臣ニ具狀ス大臣之ヲ允許シタルトキハ調査課ニ於テ恩給證書ヲ
作リ所管部局若クハ内事課ヲ經テ之ヲ本人ニ下付ス但一時ノ支給ニ係
ルモノハ辭令書ヲ用フ
恩給證書若クハ辭令書ヲ下付シタルトキハ調査課ハ之ヲ内藏寮ニ通知
スヘシ

第七條 恩給ハ其年額ヲ四分シ四月七月十月一月ニ於テ前三箇月分ヲ内
藏寮ヨリ支給シ受領證ヲ徴ス但資格消滅ノトキ及一時支給ノ金額ハ期
月ニ拘ハラズ之ヲ支給ス

恩給ヲ受クル者東京市外ニ居住スルトキハ其恩給金ハ内藏寮ヨリ爲換
ヲ以テ送付スヘキニ付到達ノ上ハ直ニ受領證ヲ内藏寮ニ郵送スヘシ但
受給者所在地ニ爲換ヲ取組ヘキ便宜ナキトキハ其近傍ニ於テ便宜アル
地迄爲換ヲ取組送付スルモノトス

第八條 恩給ヲ受クル者其居住ヲ轉シタルトキハ内藏寮ニ届出ヘシ
前項ノ届出ヲ受ケタルトキハ内藏寮ハ之ヲ調査課ニ通知スヘシ

第九條 宮内省官吏恩給例第二條第五項同准官吏恩給例同條同項ニ當ル
者ノ恩給支給ノ終始ハ左ノ各項ニ依ル

- 一 重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ確定裁判ノ宣告ヲ受ケタル日日本
臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ其失ヒタル日ヲ以テ支給ヲ終ル

二 准判任官以上ニ任シ俸給ヲ受クルトキハ俸給ノ支給ヲ始ムル日ノ
前日ヲ以テ支給ヲ終リ其退官シタルトキハ俸給ノ支給ヲ終リタル
日ノ翌日ヨリ支給ヲ始ム

三 公權ヲ停止セラレタルトキハ禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ監視ニ付
セラレヘキ確定裁判ノ宣告ヲ受ケタル日ヲ以テ支給ヲ終リ刑期滿
限ノ日ノ翌日ヨリ支給ヲ始ム

第十條 宮内省官吏恩給例第二條第三項同准官吏恩給例同條同項ニ掲ク
ル明治四年七月以前ノ在官者ニ對スル支給方ハ明治四年六月東京淺草
米廩ノ平均相場ニ依リ當時ノ官祿一箇月分ニ相當スル金額ヲ準據トシ
テ支給額ヲ定ムルモノトス

第十一條 公務ニ因リ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リシ者ニ給スル最下金
額十分ノ七マテノ増加恩給ノ等差ハ左ノ如シ

- 一 兩眼ヲ盲シ若クハ二肢以上ヲ亡シタルトキ 十分ノ七
 - 二 前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ 十分ノ六
 - 三 一肢ヲ亡シ若クハ二肢ノ用ヲ失ヒタルトキ 十分ノ五
 - 四 前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ 十分ノ四
 - 五 一眼ヲ盲シ若クハ一肢ノ用ヲ失ヒタルトキ 十分ノ三
 - 六 前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ 十分ノ二
- 傷痍疾病ノ等差ハ明治十八年太政官達第十六號文官傷痍疾病等差例ヲ

適用ス

第十二條 恩給ヲ受ケル者死去シタルトキハ其遺族ヨリ調査課ニ届出恩給證書ヲ返納スヘシ又第十三條ノ場合ニ於テハ裁判宣告書ノ寫ヲ添ヘ家族ヨリ届出ヘシ

前項ノ場合ニ於テ調査課ハ直ニ之ヲ内藏寮ニ通知スヘシ

第十三條 恩給ヲ受ケル者重罪若クハ禁錮ノ刑ニ處セラレ又ハ監視ニ付セラレタルトキ其確定裁判ノ宣告アリシコトヲ知リタルトキハ裁判所本人家族ヨリノ調査課ヨリ内藏寮ニ通知スヘシ内藏寮ハ之ニ依テ恩給ノ支給ヲ停止シ又ハ復給スヘシ

前項ノ場合ニ於テ其恩給ヲ剝奪スヘキモノハ其旨ヲ調査課ヨリ本人ニ通知シテ恩給證書ヲ返納セシムヘシ

第十四條 水火災盜難等ニ由リ恩給證書ヲ亡失シタル者ハ其事由ヲ具シテ調査課ニ申出ヘシ此場合ニ於テ調査課ハ恩給證書ノ謄本ヲ作り本人ニ下付スヘシ

前項恩給證書ノ謄本ハ恩給證書ト同一ノ効力アルモノトス

第十五條 恩給ヲ受ケル者氏名ヲ改メタルトキハ恩給證書ヲ添ヘ調査課ニ届出ヘシ調査課ハ恩給證書ノ裏面ニ其事實ヲ記シ調査課長署名捺印ノ上本人ニ下付シ之ヲ内藏寮ニ通知スヘシ

第十六條 明治二十年達第二號宮内省官吏恩給例ニ依リ恩給ヲ受ケル者

左ノ場合ニ於テハ本則ニ依ル

一 死去又ハ資格消滅又ハ停止ノトキ

二 恩給證書ヲ亡失シタルトキ

三 改氏名又ハ居住ヲ轉シタルトキ

宮内省官吏准官吏遺族扶助例施行規則

第一條 宮内省官吏准官吏遺族扶助例第一條ニ掲ケタル官吏准官吏ハ宮内省ヨリ俸給若クハ恩給ヲ給スル者ヲ云フ皇族職員モ亦同シ

第二條 扶助料ヲ請求スルトキハ其請求書ニ署名シ後見人アレンハ其後親族二名親族ナキトキハ他ノ戸主二名連署シ其市町村長見人署名スレハ其後親族二名親族ナキトキハ他ノ戸主二名連署シ其市町村長添付シ元所管長於テハハノ與印ヲ受ケ市町村長ノ證明シタル戸籍調書ヲ添付シ元所管長

第三條 扶助料ヲ受ケル者死去シ若クハ資格消滅シ若クハ支給期限ノ満チタルトキ其扶助料ノ轉給ヲ請フ者ハ前者ノ扶助料證書ヲ添ヘ請求ノ證ト爲スヘシ

第四條 公權停止ニ依リ扶助料ノ轉給ヲ受ケヘキ者ハ確定裁判ノ宣告書寫ヲ添ヘ請求ノ證ト爲スヘシ

第五條 扶助料ヲ受ケヘキ寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ死去シタル者ノ戸籍内ニ在ル二十歳未満ノ者又ハ廢疾若クハ不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハサル兄弟姉妹アリテ之ヲ給養スル者ナキトキ又ハ孤兒二十

歳ニ滿ツルモ癡疾若クハ不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハス他ニ給養スル者ナキトキハ其事由ヲ詳記シ癡疾不具ノ者ハ醫師ノ診断書ヲ添ヘ扶助料ヲ請求スヘシ

第六條 扶助料ノ請求ヲ受ケタル所管長若クハ内事課長ハ査覈ノ上第四號第五號書式ニ準據シ扶助料年額ノ計算書ヲ作り證據書類ヲ添ヘ調査課ニ回付スヘシ

公務ノ爲メ受ケタル傷痕ニ原因シテ死去シ又ハ非常ノ勞動及困苦ヲ忍ビ勤務ニ從事シ爲メニ發病死去シ又ハ公務ニ因リ傳染病者ニ接シ該病毒ニ感染シテ死去シ又ハ戰地ニ於テ若クハ公務旅行中流行病ニ罹リ死去シタル者ノ遺族ヨリ扶助料ヲ請求セシトキハ所管長若クハ内事課長ニ於テ其傷痕若クハ疾病ノ公務ニ起因シタル證據トナルヘキ書類ヲ併セテ調査課ニ回付スヘシ

調査課長ハ所管長若クハ内事課長査覈ノ書類ニ據テ檢案シ宮内大臣ニ具狀ス大臣之ヲ允許シタルトキハ調査課ニ於テ扶助料證書ヲ作り所管部局若クハ内事課ヲ經テ之ヲ本人ニ下付ス但一時ノ支給ニ係ルモノハ辭令書ヲ用フ

扶助料證書若クハ辭令書ヲ下付シタルトキハ調査課ハ之ヲ内藏寮ニ通知スヘシ

第七條 遺族扶助例第三條ニ掲クル納金ハ俸給支給ノトキ内藏寮ニ於テ

之ヲ徴收ス但別ニ會計ヲ設クル部局ハ其部局ニ於テ之ヲ徴收シ内藏寮ニ送付スヘシ

俸給ノ増減ニ依リ既納ノ金員ニ過不足ヲ生スルトキハ次回ノ俸給支給ノトキ之ヲ整理スヘシ

免官退官轉任死亡ニ依リ過渡俸給ノ返納ヲ要スルトキハ其百分ノ一ヲ納人ニ於テ差引スヘシ

第八條 扶助料ノ支給ハ宮内省官吏准官吏恩給例施行規則第七條並第九條第一項第三項ノ例ニ依ル

第九條 扶助料ヲ受クル者其居住ヲ轉シタルトキハ内藏寮ニ届出ヘシ

前項ノ届出ヲ受ケタルトキハ内藏寮ハ之ヲ調査課ニ通知スヘシ

第十條 扶助料ヲ受クル者死去シ若クハ資格消滅シ若クハ支給期限ノ満チタルトキ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ナキトキハ其扶助料證書ヲ調査課ニ返納スヘシ

前項ノ場合ニ於テ調査課ハ直ニ之ヲ内藏寮ニ通知スヘシ

第十一條 扶助料ヲ受クル者重罪ノ刑ニ處セラレ若クハ公權ヲ停止セラレタルトキハ宮内省官吏准官吏恩給例施行規則第十三條ノ例ニ依ル

第十二條 水火災盜難等ニ依リ扶助料證書ヲ亡失シタルトキ及扶助料ヲ受クル者氏名ヲ改メタルトキハ宮内省官吏准官吏恩給例施行規則第十四條第十五條ノ例ニ依ル

(書式略之)

三百十六

○棄兒養育米給與方明治四年六月布告

從來棄兒教育ノ儀所預リノ分ハ養育米被下貰受人有之分ハ不被下候處自今預リ貰受ニ不拘棄兒當歲ヨリ十五歲迄年々米七斗ツ、被下候間實意養育可致事

○棄兒養育米及生年月日檢定方明治六年四月第百三十八號布告

棄兒養育米ノ儀辛未八月中相達候通十五歲迄年々米七斗宛下渡候處自今滿十三年ヲ限り被下候條生年月日見定ノ儀ハ其所戸長等立合身體骨格等篤ト檢査シ本年第三十六號布告ニ照シ年齡相定候様可致事

六年第三十六號布告ハ年齡トナス

但(六年第三百四十號布告ヲ以テ刪除)

○棄兒養育米代金引直シ下渡方七年九月內務大臣兩省乙第五十六號達
棄兒養育米ノ儀正米無之節ハ貢納石代直段ヲ以テ代金渡可致旨壬申年大藏省第百四十五號ヲ以テ相達候處自今正米無之節ハ其地前月下米平均相場ヲ以テ渡方可取計此旨相達候事
但本年十月一日ヨリ渡方本條ノ通可相心得事

棄兒養育米給與方

三百十七

○第十一類 鳥獸蠶種茶業取締

○鳥獸獵規則 明治十年一月十一號布告

沿革畧記 明治元年四月及九月達ヲ以テ獵リニ發砲鳥打等ヲナシ農事ヲ妨クル者ノ取締ヲ爲ス○二年四月達ヲ以テ發砲ノ禁ヲ犯ス者ハ其器具ヲ沒收ス○三年五月達ヲ以テ郭内外諸邸宅中ニ於テ發砲ヲ禁ス○五年正月第二十八號布告銃砲取締規則第六則ヲ以テ銃獵ノ取締ヲ爲ス○六年一月第二十五號布告ヲ以テ鳥獸獵免許規則ヲ制定ス○同年三月第百拾號布告ヲ以テ前令ヲ改正シ更ニ鳥獸獵規則トナス○七年十一月第百二十二號布告ヲ以テ前令ヲ改正ス○十年十一月第十一號布告ヲ以テ尙ホ之ヲ改正ス是レ現行法ナリ

鳥獸獵規則別紙ノ通改正候條此旨布告候事

(別紙)

鳥獸獵規則

第一條 小銃ヲ用テ鳥獸ヲ獵シ生業トスル者ヲ職獵トシ遊樂ノタメニスル

者ヲ遊獵トス

第二條 銃獵免狀ナキ者ハ總テ銃獵スルヲ禁ス但有害ノ鳥獸ヲ除クカタメニ地方官ノ便宜ヲ以テ臨時ノ免許ヲ與フヘシ

第三條 銃獵免狀ヲ得ント欲スル者ハ願書ニ族籍職分住所姓名年齢ヲ詳記シ東京府下ニ於テハ警視廳其他ハ該地方官廳ヘ差出スヘシ(十四年第六十ヲ農商務省トアルヲ警視廳ト改ム)

第四條 免狀ハ其効一期限ニ止ルモノトス免狀ハ貸借シ賣買シ若クハ授受スルコトヲ禁ス

第五條 免狀ヲ願受クル者ハ左ノ通免許稅ヲ納ムヘシ

- 一 職獵稅 金壹圓
- 一 遊獵稅 金拾圓

第六條 水火盜難其他ノ事故ニヨリ免狀ヲ毀失スル時ハ速ニ東京府下ニ於テハ警視廳其他ハ該地方官廳ニ届出ヘシ再ヒ免狀ヲ願受ル者ハ更ニ税金

ヲ納ムルニ及ハスト雖モ手數料トシテ金貳拾五錢ヲ納ムヘシ(十四年第六十ヲ以テ農商務省トアルヲ警視廳ト改ム)

第七條 左ニ記列シタル者ニハ免狀ヲ付與セサルヘシ

- 一 拾六歳未滿ノ者
- 一 白痴風癲等ノ者
- 一 故ナク弓箭銃砲ヲ放ツノ刑ヲ受ケシ者

第八條 左ニ記列シタル場所ニ於テハ銃獵ヲナスヲ禁ス

- 一 都府市街ハ勿論衆人群集ノ場所
- 一 銃丸ノ達スヘキ恐レアル人家ニ向ヒタル距離ノ場所
- 一 禁獵制札ノ場所

但制札ハ獵銃貳挺ヲ交叉シタル圖ノ下ニ銃獵禁制ノ四字ヲ記シ掲ケ置クヘシ

一 作物植付ケアル田畑内或ハ社寺人家等ノ構内

但該主又ハ管守人ノ許諾ヲ得タル者ハ此限ニアラス

第九條 獵銃ハ和銃玉目四匁八分以下並ニ西洋獵銃ニ限ルヘシ軍銃ヲ用フルヲ禁ス

但「開拓使」管内ニ限リ和銃玉目拾匁以下ヲ用フルヲ得ヘシ(十年第八十書追加)

第十條 銃獵期限ハ十月十五日ヨリ四月十五日迄ヲ以テ一期トス是時限ノ外ハ銃獵ヲ禁ス

但地方ノ景况ニヨリ已ムヲ得ス此期限ヲ伸縮スル時ハ其理由ヲ農商務省ヘ届出ヘシ(十四年第四十三號布告ヲ以テ内務省トアルヲ農商務省ト改ム)

第十一條 日没ヨリ日出迄ノ時間ハ銃獵ヲ禁ス

第十二條 凡ソ出獵スル者ハ必ス其免狀ヲ携帶スヘシ出獵中警察官吏區戶長村役人等免狀ヲ看ント請フ者アル時ハ直ニ之ヲ示スヘシ

第十三條 地主其所有地内ニ於テ他人ノ銃獵スルヲ有害トスル時ハ第八條

所示ノ如キ制札ヲ建テ其周圍ニ繩張又ハ假圍ヲナスヘシ

第十四條 凡テ一期内再犯以上ノ者ハ其罰金ヲ倍科スヘシ

第十五條 銃獵ヲ生業トスル者ニアラスシテ職獵ノ免狀ヲ受ケ遊獵スル者ハ五拾圓ノ罰金ヲ科シ免狀取上ケ其期内銃獵ヲ禁スヘシ

第十六條 總テ犯則ノ者ヲ他ヨリ證據ヲ取リ訴出ル時ハ犯人罰金ノ半ヲ賞トシテ與フヘシ

第十七條 第十四條第十五條ノ外此諸規則ヲ犯ス者ハ三圓ヨリ少ナカラズ貳拾圓ヨリ多カラサル罰金ヲ科スヘシ

第十八條 「開拓使」管内ニ入り鹿獵ヲ爲ス者ハ該使施行ノ規則ニ遵フヘシ(十年第八十五號布告ヲ以テ追加)

○鳥獸獵免狀ヲ受ケ族籍姓名異動ノ時届出方(二十三年一月) 農務省訓令第三號
鳥獸獵免狀ヲ受ケ其獵期中族籍姓名ヲ變換シ又ハ住居ヲ移轉シタルトキハ所轄警察署(郡役所ニ取扱ニ届出シメ或ハ他管ヨリ寄留セル者ニシテ)

本管ニ復歸シ又管内外ヲ問ハス轉籍若クハ寄留シテ引續キ銃獵スル者ハ
甲乙兩地ノ警察署ヲ所取ニ届出シメ該免狀ハ獵期後二十日以内
ニ當初受取タル管應ニ返納セシムヘシ

但明治十七年六月第二十號本省達ハ廢止シ及ヒ本文ニ抵觸スル從前ノ指
令ハ取消ス

○農作物保護ノ爲メ有益ナル鳥類獵獲禁止方農商部訓令第二十六號
近年銃獵者ノ數ヲ増シ加フルニ剝製鳥類輸出ノ途開ケシヨリ鳥類濫獲ノ
弊ヲ生シ農作物保護ノ爲有益ナル鳥類ノ殄滅ヲ致スノ虞アルニ依リ土地
ノ實況ニ隨ヒ獵獲禁止ノ必要アルモノハ其名稱及性質効用等ヲ詳記シ本
大臣ニ經伺ノ上其獵獲ヲ禁止スヘシ

○北海道三重縣宮崎縣御料地ハ掛官吏ノ銃獵ヲ許ス農商部訓令第四十三號
北海道廳管下御料局札幌支廳三重縣下同度會事務所宮崎縣下同諸縣事務
所々轄御料地内ニ限リ宮内省掛官吏ニ鑑札ヲ渡置キ巡視ノ際猛獸ノ害ヲ
防キ又ハ有害ノ鳥獸ヲ除ク爲メ九月一日ヨリ右銃獵ヲ差許セリ
但鑑札雛形ハ本年三月本省訓令第十九號ノ通り

○外國人銃獵免狀取扱條例內務省西曆第五十三號
當明治十一年度外國人銃獵免狀ノ儀別紙ノ通り免狀並條約及ヒ渡方條例
共改正候條此旨相達候事
(別紙)

商號
達ニ依リ
管理ニ
農
務
省
依
リ
農
務
省
依
リ
農
務
省
依
リ

外國人銃獵免狀取扱條例

第一條 銃獵免狀ハ別紙雛形ノ通り相製シ凡積ヲ以テ當省勸農局ヨリ相
スヘシ

第二條 免狀下渡ノ節ハ外國人ヲシテ別紙雛形ノ通り條約書ニ記名調印
セシメ各地方長官東京ニテハ警視本署長官モ同シク記名調印シテ之ヲ
該廳ニ留メ置キ免狀渡方取計フヘシ

第三條 銃獵ハ毎年十月十五日ヨリ翌年四月十五日迄ヲ以テ一期ト定メ
滿期ノ節ハ約定面ノ通り免狀收却ノ上殘餘ノ分トモ總テ該廳ニ於テ斷
裁致スヘシ

第四條 免狀渡濟ノ上ハ總計表ヲ製シ翌年七月限リ當省勸農局ニ差出ス
ヘシ

第五條 免狀不申受銃獵セシ者有之節ハ該獵者ヲ取押へ成丈ケ證據取置
其始末詳細領事ニ訴出ヘシ

第六條 銃獵免狀ヲ領受セシ者ハ條約規程内ハ自他管内ヲ問ハス總テ免
許ノ効アルモノトス

第七條 免狀付與スル節ハ免狀料トシテ金十圓ヲ收入スヘシ
但遺失毀傷等ニ因リ免狀再渡ヲ乞フ時ハ手數料トシテ金貳拾五錢ヲ
收入スヘシ(十二年內務省第十四號)
(免狀并條約雛形略之)

○朝鮮人鳥獸獵免狀取扱方十六年十月商務省第十二號達
本邦在留朝鮮人鳥獸獵免狀請求スルトキハ遊獵免狀下附シ總テ内國人同
様處分候儀ト可相心得此旨相達候事

○北海道鹿獵規則

明治十一年六月
開拓使乙第二十號布達

沿革略記

明治九年十一月開拓使乙第十一號布達ヲ以テ鹿獵規則ヲ定
ム○十一年六月同使乙第二十號布達ヲ以テ前例ヲ改正ス是
レ現行法ナリ

明治九年十一月乙第拾壹號布達當「使」管内鹿獵規則別紙ノ通改正候條此旨布
達候事

(別紙)

北海道鹿獵規則

鹿ハ北海道物産ノ一ニシテ其利タル尠シトセス然ルニ從來獵法制限ナキ

十四年八月
布告第九號
拓使ヲ以テ
年第一號
縣令第一號
以テ之ヲ
施行スル
事ニ付
通知ス

ニ因テ妄獵濫殺繁殖ノ法ヲ缺クノミナラス自然其種ヲ減シ其聲價ヲ落シ
人民モ亦遂ニ其利ヲ失フニ至ラントス故ニ之ヲ保護シ永ク其利ヲ失ハサ
ラシメンカ爲茲ニ規則ヲ設クルト左ノ如シ

第一條 免許鑑札ナクシテ鹿獵ヲ爲スハ自今之ヲ禁ス

第二條 鹿獵志願ノ者ハ左ノ書式ニ照準シ地方廳札幌本廳及ヒ函館根室兩
支廳ヲ云フ以下之ニ倣フ

へ願書差出シ免許鑑札ヲ受ク可シ

第三條 鑑札ヲ受クルニハ職獵ハ一枚ニ付金貳圓五拾錢ツ、遊獵ハ一枚ニ
付金五圓ツ、獵稅ヲ納ムヘシ

但舊蝦夷人ノ職獵ハ當分納稅ニ及ハス

第四條 獵者ノ員ハ年々札幌本廳管内職獵五百名遊獵三十名函館支廳管
内職獵百名遊獵十名根室支廳管内職獵百三十名内三十名夏冬遊獵十名
内五
名夏獵五
名冬獵五ト定メ滿員ノ後願出ル者へハ鑑札ヲ與ヘス(十一年開拓使乙第二
號布達ヲ以テ根
室支廳管内職獵
夏冬獵員ヲ改ム)

但シ十勝國及釧路國一圓並ニ膽振國勇拂郡植苗村字美々ヨリ四方へ四里ツ、ハ鹿種繁息ノ爲メ該地在籍舊土人ノ外ハ當分出獵スルヲ許サス(十三年三月開拓使上申ヲ以テ但舊改正)

第五條 免許鑑札ヲ受ケタル者ト雖モ毒矢ヲ以テ獵殺スルヲ禁ス

第六條 鑑札ハ一期限ノミ効アリトス且一己ノ用ト爲スヘキモノニシテ貸借賣買讓受スルヲ禁ス

第七條 獵業ハ根室國一圓並北見國ノ内網走紋別常呂斜里ノ四郡ハ五月一日ヨリ十月三十一日マテ其他ハ九月一日ヨリ翌年二月二十八日閏年ハ二月二十九日マテテ一期限トシ右期限ノ外ハ出獵ヲ禁ス

但免許鑑札ハ毎年三月五日限り最初受取タル地方廳へ返納スヘシ

第八條 鑑札ヲ與フヘカラサルモノ及ヒ銃獵禁制ノ場所ハ鳥獸獵規則第七條同第八條ノ通りタルヘシ

第九條 此規則ヲ犯ス者ノ罰則等ハ總テ鳥獸獵規則第十四條ヨリ第十七條

鳥獸獵規則
本類ニ屬ス

マテノ通タルヘシ
(願書式略之)

○北海道臘虎并臘肭獸獵獲ノ禁明治十七年五月第十六號布告

自今北海道ニ於テ臘虎并ニ臘肭獸ヲ獵獲スルヲ禁ス犯ス者ハ刑法第三百七十三條ニ照シテ處斷シ仍ホ其獵獲物ヲ沒收ス之ヲ賣捌キタル者ハ其代價ヲ追徴ス
但「農商務卿」ノ特許ヲ得タル者ハ此限ニアラス

二十一年農商
部告示第百四
號ヲ以テ特許
ヲ得シト欲ス
ル者ハ北海道
廳ヲ經テ出願
スヘキ旨ヲ示

臘虎并臘肭獸獵獲及其生皮輸入販賣規則

○臘虎並溫納獸獵獲及其生皮輸入販賣規則明治十九年十二月勅令第八十號

朕臘虎並溫納獸獵獲及其生皮輸入販賣規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臘虎並溫納獸獵獲及其生皮輸入販賣規則

第一條 明治十七年第十六號布告但書ニ據リ農商務大臣ノ特許ヲ得タル者ハ北海道廳ノ定メタル獵獲期限獵場區域内ニ於テ臘虎并ニ溫納獸ノ獵獲ニ從事スヘシ

但獵獲ニ從事スルトキハ常ニ其特許狀ヲ携帶シ海陸何レノ場合ヲ問ハス獵獲監視官吏又ハ警察官吏ニ於テ檢閲センコトヲ求ムルトキハ直ニ之ヲ示スヘシ

第二條 臘虎并ニ溫納獸ノ獵獲ニ從事スル者北海道ニ至リタルトキハ獵船ノ名、噸數、乘組人名ヲ北海道廳指定ノ出張所ニ届出該道廳ニ於テ獵獲船ノ爲メ特ニ定メタル徽章ヲ常ニ船橋又ハ其他船部ノ見易キ位置ニ掲クヘシ

第三條 臘虎并ニ溫納獸ノ生皮ヲ賣却セントスル者ハ之ヲ第二條ニ記載セル出張所ニ差出シ當該官吏ノ檢印(烙印ヲ用ユルモ妨ナシ)ヲ受クヘシ其檢印ナキモノハ之ヲ賣却スルコトヲ得ス

第四條 前條當該官吏ノ檢印ナキ臘虎并ニ溫納獸ノ生皮ヲ帝國諸港ニ輸入シ若クハ船舶ニ積載シテ帝國諸港内ニ滯泊シ又ハ市場ニ販賣シ或ハ販賣セントスル者ヲ發見スルトキハ稅關官吏又ハ警察官吏ニ於テ該物品ヲ取押ヘ直ニ告發スヘシ

但露西亞國及北亞米利加合衆國所轄内ニ於テ其政府ノ免許ヲ得テ獵獲シタル臘虎并ニ溫納獸ノ生皮ニ於テハ船主又ハ船長タル者其國相當官吏ヨリ付與セシ證書若クハ本邦在留露國及合衆國領事ノ證明書ヲ差出シタル後該品ヲ帝國內ニ輸入スルコトヲ得

○蠶種検査規則 明治十九年八月 農商務省令第九號

蠶種微粒子病（一名黑痣病）豫防ノ爲蠶種検査規則左ノ通相定メ原種ノ検査ハ明治二十年検査期ヨリ施行シ製絲用種ノ検査ハ同二十一年検査期ヨリ施行ス

蠶種検査規則

- 第一條 凡ソ蠶種ヲ製造シ又ハ蠶種ヲ販賣セントスル者ハ管轄廳ニ願出テ鑑札ヲ受クヘシ
- 第二條 蠶種ヲ製造スル者ハ此規則ニ從ヒ其検査ヲ受クヘシ
- 第三條 検査證印ナキ蠶種ハ販賣又ハ飼育スルコトヲ得ス
- 第四條 蠶種検査所ハ管轄廳ニ於テ管内便宜ノ地ニ之ヲ設置スヘシ
但地方ノ狀況ニ由リ巡廻検査ヲナスモ妨ケナシ
- 第五條 蠶種検査員ハ管轄廳ニ於テ之ヲ命スヘシ

二十一年農商務省令第九號
蠶種検査規則
製絲用種ノ検査
原種ノ検査
及
其
施行
期
ス

但検査ノ方法ハ別ニ訓令ヲ以テ之ヲ定ム

- 第六條 春蠶種ノ検査ハ毎年十月一日ヨリ始メ夏蠶種秋蠶種ノ検査期日ハ管轄廳ニ於テ適宜之ヲ定ムルモノトス
- 第七條 蠶種ヲ製造スル者ハ春蠶種ノ掃立枚數及ヒ製造額ヲ毎年七月三十一日マテニ夏蠶種秋蠶種ノ掃立枚數及ヒ製造豫算額ヲ検査期日ヨリ三十日以前ニ管轄廳ニ届出ツヘシ
- 第八條 蠶種ニハ製造人ノ住所氏名又ハ會社若クハ組合ノ名稱ヲ記シ之ヲ原種販賣用種ノ製造ニト製絲用種トニ區別シテ検査所ニ差出スヘシ
- 第九條 病毒ノ歩合原種ニ於テハ百分ノ五以下製絲用種ニ於テハ百分ノ十五以下ノモノニ検査證印ヲ付シ其以上ニ及フモノニハ都テ廢棄證印ヲ付スルモノトス
- 第十條 廢棄證印アル蠶種ハ販賣又ハ飼育スルコトヲ得ス
- 第十一條 蠶種ヲ製造シ又ハ蠶種ヲ販賣スル者廢業スルカ他ノ管轄地ニ寄

留若クハ轉籍スルトキハ其旨ヲ管轄廳ニ届出テ鑑札ヲ返納スヘシ
但寄留若クハ轉籍地ニ於テ營業セントスルトキハ第一條ニ據ルヘシ

第十二條 第一條第三條第十條ニ違ヒタル者ハ二圓以上二十五圓以下ノ罰
金ニ處ス

○茶業組合規則 明治二十年十二月
農商務省令第四號

沿革略記

明治十七年三月農商務省第四號達ヲ以テ茶業組合準則ヲ定ム
○二十年十二月農商務省令第四號ヲ以テ前則ヲ廢止シ茶業組合規則ヲ定ム是レ現行法ナリ

茶業組合規則ヲ定ムルコト左ノ如シ

但十七年三月第四號達茶業組合準則ハ廢止ス
茶業組合規則

第一章 總則

第一條 此規則中茶業者トアルハ茶ヲ製造シテ販賣シ又ハ茶園ヲ所有シ茶
生葉ヲ販賣スル者及生葉若クハ製茶ヲ仲買又ハ販賣スル者ヲ總稱ス

第二條 茶業者ハ製品ヲ精良ニシ販路ヲ擴張シ賣買ヲ正確ナラシムルノ目
的ヲ以テ組合ヲ設ケ之ニ加入スヘシ
但自家用製茶ノ殘生葉ヲ販賣スル者ハ各組合ニ於テ制限ヲ設ケ組合ニ
加入セシメサルモ妨ナシ

第三條 組合ノ設置ハ郡區ノ區畫ニ依ルヘシ若シ一郡區内ニ於テ茶業者小
數ナルトキハ近隣郡區ノ同業者ト合併スルコトヲ得

第四條 郡區ノ狀況ニ依リ茶ヲ製造シテ販賣スル者ト茶園ヲ所有シテ生葉
ヲ販賣スル者及生葉若クハ製茶ヲ仲買又ハ販賣スル者トヲ區別シテ組合
ヲ設クルノ必要アルモハ農商務大臣ノ許可ヲ受クヘシ

第五條 組合ノ名稱ハ何府何郡何縣茶業組合ト稱スヘシ

第六條 組合ハ郡區内便宜ノ場所ニ各組合事務所ヲ置キ其組合ニ關スル一切ノ事務ヲ整理スヘシ

第七條 組合ハ其氣脈ヲ聯通スル爲メ府縣ノ區畫ニ依リ便宜ノ地ニ聯合會議所ヲ設ケ全國便宜ノ地ニ中央會議所ヲ設クヘシ(二十三年農商務省令第一號ヲ以テ東京下アル地ト改ム)

第八條 組合ハ此ノ規則ノ範圍内ニ於テ其業務ニ關シ組合及會議所ノ規約ヲ定ムヘシ

第九條 組合及聯合會議所ノ規約ハ地方長官ノ認可ヲ受ケ中央會議所ノ規約ハ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

但二府縣以上ノ組合員全部若クハ幾部聯合シテ別ニ規約ヲ設クルノ必要アルトキハ其規約ヲ添へ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘシ(二十三年農商務省令第一號ヲ以テ但書追加)

第二章 組合員

第十條 組合員ハ組合ノ名義ヲ以テ營利事業ヲナスコトヲ得ニ

第十一條 組合員ハ組合及會議所ノ規約並ニ二府縣以上ノ聯合組合員ハ其聯合規約ヲ遵守シ且其費用ヲ負擔スルノ義務アルモノトス(二十三年農商務省令第一號ヲ以テ會議所規約ノ下並ニ云々ノ十九字ヲ加フ)

但費用負擔ノ割合及徵收方法ハ規約ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第十二條 社名若クハ組合ヲ以テ組合員タル者ハ相當ノ代表人ヲ定メ置キ組合ニ關スル一切ノ責ニ任セシムヘシ

第三章 役員

第十三條 各組合事務所ニハ組長及委員ヲ置キ委員ハ部内ノ組合員之ヲ選定シ組長ハ委員中ヨリ之ヲ互選スヘシ

但選任及ヒ改選ノ都度聯合會議所ヲ經テ地方廳ニ届出ヘシ

第十四條 組長ハ委員ト協議シテ部内組合ノ取締ヲナシ其他一切ノ事務ヲ整理スヘシ

第十五條 組長ハ常ニ營業上ノ利害ニ注意シ組合ノ確實ヲ圖ルヘシ

第十六條 組長ハ部内組合中ニ生シタル紛議ヲ仲裁シ及ヒ違約者アルトキハ規約ニ依リ處分スルコトヲ得

但會議所ノ規約ニ違背シタル者ヲ處分シタル片ハ其旨會議所ニ通知スヘシ

第十七條 (二十二年農商務省令第五號ヲ以テ削除)

第十八條 聯合會議所ニハ事務員若干名ヲ置キ聯合會議ニ關スル事務及ヒ聯合會議所ノ規約ヲ以テ定メタル事務ヲ取扱ハシムヘシ

第十九條 聯合會議所ノ事務員ハ會議ニ於テ部下組合員中ヨリ之ヲ選定シ地方長官ノ認可ヲ受クヘシ

第二十條 聯合會議所ノ事務員ハ議員ノ資格ヲ以テ聯合會議ニ列スルコトヲ得

第二十一條 中央會議所ニハ事務員若干名ヲ置キ中央會議ニ關スル事務及

中央會議所ノ規約ヲ以テ定メタル事務ヲ取扱ハシムヘシ

第二十二條 中央會議所ノ事務員ハ中央會議々員ニ於テ全國組各員中ヨリ之ヲ選定シ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

但時宜ニ依リ組合員外ノ者ト雖モ選舉スルコトヲ得

第二十三條 中央會議所ノ事務員ハ議員ノ資格ヲ以テ中央會議ニ列スルコトヲ得

第四章 會議

第二十四條 會議ヲ分テ聯合會議及中央會議トシ聯合會議ハ聯合會議所ニ於テ中央會議ハ中央會議所ニ於テ定時又ハ臨時ニ之ヲ開クヘシ

第二十五條 聯合會議ニ於テハ會議所所在府縣ノ組合ニ關スル事項ヲ議定シ中央會議ニ於テハ全國ノ組合ニ關スル事項ヲ議定スヘキモノトス

第二十六條 聯合會議ノ議員ハ部下各組合員之ヲ選定シ中央會議ノ議員ハ聯合會議議員之ヲ選定スヘシ

第二十七條 聯合會議及中央會議ニ出席スヘキ議員ノ數ハ產額又ハ開港地
ハ輸送額ノ多寡ニ從ヒ規約ニ於テ之ヲ定ムヘシ(二十四年農商務省令第二
號ヲ以テ產額ノ下又ハ云
々ノ九字
ヲ挿入ス)

第二十八條 會議ノ正副議長ハ議員中ヨリ之ヲ互選スヘシ

第二十九條 會議ノ正副議長及議員ノ氏名並ニ會議開閉期日其聯合會議ニ
係ルモノハ地方廳ニ其中中央會議ニ係ルモノハ農商務省ニ届出ツヘシ

第三十條 農商務大臣ハ中央會議地方長官ハ聯合會議ノ開閉又ハ議員ノ改
選ヲ命スルコトアルヘシ

第三十一條 會議ハ議員半數以上出席セサレハ當日ノ議事ヲ開クコトヲ得
ス

但議員半數以上ノ欠席三日以上ニ涉ルキハ半數以内ト雖モ議事ヲ開ク
コトヲ得

第三十二條 議事ハ出席員過半數ニ依テ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ決

スル所ニ據ル

第五章 規約

第三十三條 各組合ノ規約ハ其部内組合員中ヨリ委員ヲ選定シテ左ノ事項
ニ據リ之ヲ定ムヘシ

一 組合ノ位置

一 組合員ノ證票

一 粗惡不正茶取締ノ方法

一 役員選舉ノ方法

一 組合入退者取扱ノ方法

一 違約者處分ノ方法

一 經費賦課徴收支出ノ方法

一 其他組合ノ情況ニ依リ必要ナル條件

第三十四條 聯合會議所ノ規約ハ左ノ事項ニ據リ會議ニ於テ之ヲ定ムヘシ

- 一 聯合會議所ノ位置
 - 一 製茶ヲ改良シ販路ヲ擴張スルノ方法
 - 一 製造及ヒ販賣上ノ弊害ヲ矯正スルノ方法
 - 一 部下ノ組合ニ關スル事務ヲ處辨シ及紛議ヲ中裁スルノ方法
 - 一 聯合會議々員及ヒ事務員選舉ノ方法
 - 一 聯合會議ニ關スル規程
 - 一 違約者處分ノ方法
 - 一 經費賦課徵收支出ノ方法
 - 一 其他地方ノ情況ニ依リ必要ナル條件
- 第三十五條 中央會議所ノ規約ハ左ノ事項ニ據リ會議ニ於テ之ヲ定ムヘシ
- 一 中央會議所ノ位置
 - 一 全國組合ノ氣脈ヲ聯通スルノ方法
 - 一 内外茶業ノ實況ヲ調査シ及ヒ之ヲ報告スルノ方法

- 一 中央會議々員及事務員選舉ノ方法
 - 一 中央會議ニ關スル規程
 - 一 經費賦課徵收支出ノ方法
 - 一 其他中央會議ニ於テ必要ト認メタル條件
- 第六章 罰則

第三十六條 此規則第二條第九條第十條第十一條ニ違犯シタル者ハ金貳圓以上金貳拾五圓以下ノ罰金ニ處ス

○茶業組合規則施行停止ノ場合農商部令第七號
 一 府縣管内製茶產額僅少コシテ明治二十年十月十二日省令第四號茶業組合規則ヲ施行シ難キ狀況アリト認メタルトキハ其府縣ニ限リ該規則ノ施行ヲ停止スルコトアルヘシ此場合ニ於テハ別ニ告示ヲ以テ其府縣ヲ指定ス但組合ノ設ケナキ府縣ノ茶業者組合ノ設ケアル府縣ニ於テ茶ヲ製造シ又ハ販賣スルトキハ其府縣ノ組合規約ヲ遵守スヘキモノトス

第二十三年法律
第百八號ヲ以テ
施行期限ヲ以テ
改メ一月
二十六年一月
一日ト改メ

第二十三年法律
第百八號ヲ以テ
施行期限ヲ以テ
改メ一月
二十六年一月
一日ト改メ

○第十二類 商事

○商法 明治二十三年三月
法律第三十二號

朕商法ヲ裁可シ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行
スヘキコトヲ命ス

(商法畧之)

○商法施行條例 明治二十三年八月
法律第五十九號

朕商法施行條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年
一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

商法施行條例 明治三十二年八月
法律第五十九號

第一條 商法第二十六條第二十九條及ヒ第二百十條ニ定メタル一地域
トハ各市町村ノ一區域ヲ謂ヒ市町村制ヲ行ハサル地方ニ在テハ從來
ノ宿驛町村等ノ一區域ヲ謂フ
一 地域内ニ二箇以上ノ區裁判所アルトキハ其内一箇所ヲ以テ登記簿

商法施行條例

第二條 會社ニ非スシテ商業ヲ營ム者ハ其商號ニ會社ノ文字ヲ用ユルヲ取扱フ所トス其裁判所ハ司法大臣之ヲ指定ス。
 コトヲ得ス又從來之ヲ用ユル者ハ商法實施ノ日ヨリ三箇月内ニ之ヲ改ム可シ
 前項ノ規定ニ違フ者ハ地方裁判所ノ命令ヲ以テ二十圓以下ノ過料ニ處ス

第三條 商法第百五十九條、第百六十六條、第百六十八條、第二百二十二條ノ規定ニ依リテ官廳ニ差出ス書類及ヒ展閱ニ供スル書類ハ公證人ノ認證ヲ受ケタル謄本ヲ以テスルコトヲ得
 公證人謄本認證ノ依頼ヲ受ケタルトキハ一件ニ付キ金拾錢ノ手数料若シ認證ト共ニ謄寫ノ依頼ヲ受ケタルトキハ公證人規則第六十五條ノ謄本手数料ヲ受クルコトヲ得
 第四條 商法第二百二十二條ニ依リ諸書類ノ展閱ヲ求ムル者アルトキ

ハ其請求者ヨリ一人ニ付一日五十錢以下ノ手数料ヲ受クルコトヲ得
 第五條 本條例發布前ヨリ既ニ設立シタル各會社ハ商法實施ノ日ヨリ六箇月内ニ商法第七十八條、第三百二十八條、第百六十八條ニ準シテ登記ヲ受ク可シ之ヲ怠リタルトキハ商法第二百五十六條ノ過料ニ處シ且地方裁判所ノ命令ヲ以テ其營業ヲ差止ム但其命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得
 第六條 前條ノ期限内ニ登記ヲ受ケサル既設會社ハ其期限經過ノ時ヨリ第三者ニ對シテ會社タル効ヲ失フ
 第七條 商法第八十一條及ヒ第八十二條ノ規定ハ既設會社ニ之ヲ適用セス
 第八條 既設會社從來ノ商號ヲ續用スルコトヲ得但商法第百十三條及ヒ第百三十九條第二項ノ規定ハ商法實施ノ日ヨリ三箇月ノ後既設會社ノ商號ニモ之ヲ適用ス
 既設會社ノ商號ニハ其會社ノ種類ニ從ヒ合名會社合資會社又ハ株式

會社ノ文字ヲ附ス可シ

第九條 既設合名會社ハ其社員ノ數商法第七十四條ノ定員ニ超ユルモ其現在社員ノ數ニ依ルコトヲ得但定員以下ニ減シタル場合ニ於テハ更ニ増員シテ其定員ニ超ユルコトヲ得ス

第十條 既設株式會社ハ商法第五十六條ノ免許ヲ受クルコトヲ要セス
既設株式會社ハ商法實施ノ日ヨリ六箇月内ニ地方長官ヲ經由シテ定款ヲ主務省ニ差出シ其定款ノ認可ヲ受ク可シ但其定款ニ法律命令ニ反スル事ヲ掲ケタルモノハ之ヲ改正スルニ非サレハ認可スルノ限ニアラス
從來官許ヲ得テ設立シタル株式會社ニハ前項ノ規定ヲ適用セス但聞置又ハ人民ノ相對ニ任ス等ノ指令ヲ得テ設立シタルモノハ此限ニアラス
本條第二項ニ依リ認可ヲ受ク可キ株式會社ニ在テハ第五條ノ登記期限ハ其認可ヲ得タル日ヨリ起算ス
右ノ認可ヲ得タル日ヨリ六箇月内ニ登記ヲ受ケサルトキハ其認可ハ

其認可ハ効力ヲ失フ

第十一條 既設株式會社ハ其株券ノ金額商法第七十五條ノ規定ニ反スルモ其定款ノ定ニ依ルコトヲ得

第十二條 既設株式會社ハ其定款ニ於テ第一回ノ株金拂込ヲ四分之一以下ニ定メタルトキハ商法第六十七條第二項ノ規定ニ反スルモ其定款ノ定ニ依ルコトヲ得

第十三條 既設株式會社ノ創業ニ付テノ義務及ヒ出費ニシテ會社ノ承認ヲ經タルモノハ第五條ノ登記ヲ受ケサル前ニ於テモ商法第七十一條ノ規定ニ拘ハラズ會社ニ於テ之ヲ負擔ス

第十四條 既設株式會社ノ既ニ發行シタル株券ハ商法第七十六條ニ反スルモノ有ルモ之ヲ改ムルコトヲ要セス

第十五條 既設株式會社ニ於テ株金金額ノ拂込前ニ發行シタル株券ハ其金額拂込ニ至ルマテハ之ヲ假株券ト看做ス

第十六條 既設株式會社ノ株券ニシテ商法實施前ヨリ株式取引所又ハ取引所ニ於テ既ニ賣買シ來リタルモノ及ヒ既ニ債權ノ擔保ニ供シタルモノニ付テハ商法第百八十條ノ規定ヲ適用セス

第十七條 既設株式會社ノ株式ノ讓渡人ニ付テハ商法第百八十二條ノ規定ハ商法實施ノ日ヨリ二箇年間之ヲ適用セス

第十八條 既設株式會社ニ於テ既ニ其定款ヲ以テ株主ノ議決權ニ制限ヲ立テタルモノハ商法第百四條ノ規定ニ反スルモ其定款ニ從フコトヲ得

第十九條 商法第七十七條第一項ノ規定ハ既設會社ニ之ヲ適用セス

第二十條 商法及ヒ本條例ニ依リ發スル命令書ヲ送達スル場合ニ於テハ其手續ハ民事訴訟法ノ手續ニ從フ

第二十一條 商法第六十七條第二項、第八十一條、第百二十七條、第百三十一條、第百三十三條、第百五十條及ヒ第百六十一條並ニ本條

例第二條及ヒ第五條ニ依リ裁判所ニ於テ命令ヲ發スルトキハ當事者ヲシテ説明ヲ爲サシムル爲メ之ヲ裁判所ニ呼出スヲ通例トス但當事者缺席スルモ命令書ハ之ヲ發スルコトヲ得

第二十二條 商法第六十七條第二項、第八十一條、第百二十七條及ヒ第百六十一條並ニ本條例第二條及ヒ第五條ニ依リ命令ヲ爲ス場合ニ於テハ裁判所ハ豫メ其旨ヲ檢事ニ通知ス可シ

檢事ハ口頭又ハ書面ヲ以テ意見ヲ陳述スルコトヲ得

第二十三條 檢事ハ前條第一項ノ場合ニ於ケル命令ニ付キ其執行ノ責ニ任ス

第二十四條 商法及ヒ本條例ニ依リ即時抗告ヲ爲スコトヲ得ヘキ場合ニ於テハ其期間ハ裁判書ノ送達ヲ受ケタル日ノ翌日又ハ裁判ノ言渡ヲ受ケタル日ノ翌日ヨリ起算シテ七日トス

第二十五條 前條ニ掲ケタルモノ、外抗告ニ關スル手續ニ付テハ民事

訴訟法第四百五十五條、第四百六十條第一項第二項、第四百六十五條及七、第四百六十六條第一項第二項第四項ヲ除ク外總テ同法第三編第三章ノ規定ヲ準用ス

第二十六條 外國ニ於テ支拂ヲ爲ス可キ手形ニハ捺印スルコトヲ要セス

第二十七條 商法第七百九十條ニ掲ケタル裁判所役員ハ執達吏トス

第二十八條 商法第八百二十五條ニ掲ケタル十五噸以上ノ船舶中ニハ日本形船舶百五十石以上ノモノヲ包含ス

第二十九條 商法實施前ヨリ既ニ航海ノ用ニ供スル船舶ハ商法實施ノ日ヨリ一箇年內ニ商法第八百二十五條ノ手續ヲ爲ス可シ

第三十條 商法第四百九十三條及ヒ第五百十七條ニ國內水上ト稱スルハ川湖港灣ヲ謂フ

第三十一條 遞信大臣ハ其地ノ形狀ト危險ノ程度トニ應シテ適宜ニ港

灣ノ區域ヲ定ムルコトヲ得

第三十二條 商法第八百六十七條及ヒ第九百六十六條ニ沿岸航海ト稱スルハ專ラ本邦海岸ニ沿フテ航行シ外國ニ至ラサルモノヲ謂フ但本邦ノ版圖ニ屬スル諸島地トノ航行ハ亦沿岸航海ニ屬ス

第三十三條 商法第九百三十六條ニ掲ケタル沿岸小航海ノ區域ハ從來ノ慣習ト海上危險ノ程度トヲ酌量シテ遞信大臣之ヲ定ムルコトヲ得
第三十四條 商法第八百三十六條及第九百三十四條ニ官ト稱スルハ內國ニ於テハ區裁判所外國ニ於テハ日本領事若シ領事ナキトキハ其地ノ官廳トス

第三十五條 司法大臣ハ各地方裁判所ノ意見ヲ聽キ其所轄地方ノ需用ニ應シテ破産管財人ヲ命シ地方裁判所ハ之ニ依リ破産管財人名簿ヲ作ル可シ

第三十六條 破産管財人タルノ命ヲ受ケタル者ハ正當ノ理由アルニ非

サレハ之ヲ辭スルコトヲ得ス

第三十七條 破産管財人ノ任期ハ三箇年トス但再任セラル、コトヲ得

第三十八條 名簿中ノ破産管財人破産裁判所ヨリ選定セラレタルトキ

ハ正當ノ理由アルニ非サレハ之ヲ辭スルコトヲ得ス

第三十九條 破産管財人ハ其職務ニ著手スル前公平誠實ニ其職務ヲ執

ルコトヲ誓フ可シ

第四十條 破産管財人ハ其擔任スル破産手續中任期充ツルモ之ヲ終結

スルマテ解任スルコトヲ得ス

第四十一條 破産裁判所ハ忌避其他該事件ニ不適當ナルノ理由アリテ

名簿中ノ破産管財人ヲ選定ス可カラスト認ムルトキハ他ニ破産管財

人ヲ選定スルコトヲ得此場合ニ於テハ直チニ其旨ヲ司法大臣ニ上申

ス可シ

前項ノ破産管財人モ名簿中ノ破産管財人ト同一ノ權利及ヒ義務ヲ有

ス

第四十二條 職務執行ノ不當又ハ不正ノ爲メ管財人ノ職ヲ解クトキハ

破産裁判所ノ公廷ニ於テ其理由ヲ付シテ之ヲ言渡ス可シ

第四十三條 管財人ノ報酬ハ一破産手續ノ全體ニ付キ又ハ收入シタル

價額ノ割合ニ應シテ之ヲ定メ財團ノ配當アル毎ニ其步割ヲ以テ之ヲ

支拂フ可シ

第四十四條 第三十六條及ヒ第三十八條ノ規定ニ違フ者ハ刑法第百七

十九條ノ罰金ニ處ス

第四十五條 商法第千二條ニ依リ裁判所ニ於テ債務者ヲ勾留若クハ監

守セントスルトキハ其命令書ヲ檢事ニ送致シ檢事ハ其勾留ニ係ル者

ハ之ヲ所屬留置場ニ送致セシメ監守ニ係ル者ハ債務者ノ住所ヲ管轄

スル警察官署ニ命シ其處分ヲ爲サシム

第四十六條 警察官廳ニ於テ債權者ノ申立ニ因リ債務者ヲ勾留若クハ

監守セントスルトキハ命令書ヲ發シテ之ヲ所屬留置場ニ送致セシメ
又ハ監守ノ處分ヲ爲サシム此場合ニ於テハ警察官廳ハ同時ニ事由ヲ
具シテ其旨ヲ管轄地方裁判所ニ通知ス可シ

第四十七條 司獄官吏債務者ヲ受取リタルトキハ刑事被告人ヲ受取リ
タル手續ニ準シ之ヲ留置場ニ入ル可シ其他債務者ノ取扱ハ總テ刑事
被告人ニ異ナルコト無シ

勾留中債務者ノ食料其他ノ費用ハ商法第千三十二條ニ從ヒ破産財團
ノ現額ヨリ之ヲ支拂ヒ不足アルトキハ留置場之ヲ負擔ス前條ノ場合
ニ於テ債務者破産ニ至ラサルトキハ其申立人之ヲ支辨ス但申立人ハ
申立ノ際右ノ費用ニ當ル金額ヲ豫納ス可シ

第四十八條 監守ヲ爲ストキハ警察官吏ヲシテ債務者ノ住所ニ就キ其
逃走若クハ財産ノ隱匿ヲ豫防シ且其債務者ノ外人ト面接若クハ通信
スルヲ禁セシム

第四十九條 商法第千三條第二項ニ依リ債務者ヲ引致スルトキハ特ニ
作リタル引致狀ヲ以テ之ヲ執行ス但其執行ハ刑事訴訟法ニ定メタル
勾引狀執行ノ手續ニ準ス

第五十條 商法第千四條ニ依リ裁判所ニ於テ債務者ヲ釋放スルトキハ
決定書ヲ檢事ニ送致シ其執行ヲ爲サシム

第五十一條 商法中非訟事件ニ關スル裁判所管轄ハ裁判所構成法ニ定
ムルモノ、外第百五十四條、第三百七十一條、第四百四十一條、第四
百九十九條、第五百十四條、第八百五十六條、第九百二條ノ事件ニ付テ
ハ區裁判所トシ其他ノ事件ニ付テハ地方裁判所トス

第五十二條 明治十七年第九號布告質屋取締條例ニ依リ管轄廳ノ免許
ヲ得タル質屋營業人ニハ商法第一編第七章第九節ノ規定ヲ適用セス

第五十三條 明治六年第二百十五號布告代人規則ハ商事ニ付テハ商法
實施ノ日ヨリ之ヲ適用セス

質屋取締條例
ハ正體第十四
類ニ歸ス參看

代人規則ハ正
體第十五類ニ
歸ス

明治十年第六十六號布告利息制限法第三條及ヒ第五條ハ商事ニ付テハ商
法實施ノ日ヨリ之ヲ適用セズ
明治十五年第五十七號布告爲替手形約束手形條例ハ商法實施ノ日ヨリ之
ヲ廢止ス

○商法二百六條ニ依リ債券發行方明治二十三年八月
法律第六十號

朕商法第二百六條ニ依リ發行スヘキ債券ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ
公布セシム

第一條 商法第二百六條ニ依リ株式會社債券ヲ發行スルハ總株金半額
以上ノ拂込アリタル後ニ於テスヘシ

第二條 債券ノ發行額ハ株金ノ拂込金額ヲ超過スルコトヲ得ス
第三條 債券ヲ發行セントスルトキハ地方長官ヲ經由シテ主務省ノ認

許ヲ受クヘシ

第四條 債券ハ一通毎ニ其債務金額、利子ノ歩合及仕拂時期、發行ノ年
月日、番號、商號、社印、取締役ノ氏名、印、債權者ノ氏名ノ外左ノ事項ヲ
記載スルコトヲ要ス

- 一 會社ノ營業所
 - 二 株金總額及株金拂込額
 - 三 債券償還ノ初期及最終期
 - 四 會社開業ノ年月日
 - 五 存立時期ヲ定メタル會社ハ其時期
 - 六 認許ヲ受ケタル事
- 第五條 株式會社ハ債券ヲ發行スルトキハ債券原簿ヲ備ヘ債券一通毎
ニ區分シテ左ノ事項ヲ記載スヘシ
- 一 債權者ノ氏名住所

- 二 債權ノ金額番號
- 三 利子ノ歩合
- 四 債券發行ノ年月日及讓渡ノ年月日
- 五 債券償還ノ初期及最終期
- 第六條 債券ノ讓渡ハ取得者ノ氏名ヲ債券及債券原簿ニ記載スルニアラサレハ會社ニ對シテ其効ナシ
- 第七條 株式會社ハ營業時間中債券原簿ノ展閱ヲ請求スル者アルトキハ之ヲ拒ムコトヲ得ス此場合ニ於テハ請求人ニ對シテ二十錢以内ノ手数料ヲ求ムルコトヲ得
- 第八條 取締役ハ左ノ場合ニ於テハ五圓以上五十圓以下ノ過料ニ處セラル
- 一 債券ニ記載スヘキ事項ヲ記載セス又ハ之ニ不正ノ記載ヲ爲シタルトキ

二十三甲法第
百九號ヲ以
テ施行期限ヲ
二十六年一月
一日ト改メ

二 債券原簿ヲ備ヘス又ハ之ニ不正ノ記載ヲ爲シタルトキ

○商事非訟事件印紙法明治二十三年八月法律第六十六號

朕商事非訟事件印紙法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十三年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

商事非訟事件印紙法

- 第一條 商法中登記ニ關ル場合ヲ除ク外非訟事件ニ付裁判所ノ命令其他ノ處分ヲ求ムル者ハ以下數條ノ手續ニ從ヒ其差出ス書類ニ民事訴訟用印紙ヲ貼用ス可シ但口述ヲ以テスル場合ニ於テハ其調書ニ印紙ヲ貼用ス可シ
- 第五條 第六條第七條ノ場合ニ於テハ管財人ヨリ差出ス計算書ニ印紙ヲ貼用ス可シ
- 第二條 左ニ掲クルモノニ付テハ五十錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

- 一 抗告又ハ假差押ノ申立
- 二 債權者ヨリ爲ス破産宣告ノ申立
- 三 支拂猶豫ノ申立

第三條 左ニ掲クルモノニ付テハ二十錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

- 一 抗告ニ對スル答辯
- 二 裁判所ノ命令其他ノ處分ノ申立ニシテ本法ニ於テ特ニ規定セサル非訟事件ニ係ルモノ

第四條 破産手續ニ付テハ破産財團中ノ貸方金額ニ應シ左ノ區別ニ從ヒ印紙ヲ貼用ス可シ但財團管理費用其他破産手續上ノ費用及ヒ財團ノ爲メニ負擔シタル財務竝ニ別除ノ辨濟ニ供スル金額ハ貸方金額ヨリ之ヲ扣除スヘキ者トス

財團ノ價格五圓マテ 四十錢
同 十圓マテ 六十錢

同 二十圓マテ	一圓二十錢
同 五十圓マテ	三圓
同 七十五圓マテ	四圓四十錢
同 百圓マテ	六圓
同 二百五十圓マテ	十三圓
同 五百圓マテ	二十圓
同 七百五十圓マテ	二十六圓
同 千圓マテ	三十圓
同 二千五百圓マテ	四十圓
同 五千圓マテ	五十圓
同 五千圓以上ハ千圓ニ達スル毎ニ四圓ヲ加フ	

第五條 破産手續ニ付テハ財團ノ配當アル毎ニ其配當金額ノ割合ヲ以テ印紙價額ニ相當スル金額ヲ引去リ置キ終局計算ニ至リ配當金額高

ノ割合ニ從ヒ相當印紙ヲ貼用ス可シ

第六條 協諧契約ニ依リ手續ヲ止メタルトキハ第四條ニ掲ケタル印紙ノ半額ヲ貼用ス可シ

第七條 破産手續再施ノ場合ニ於テハ破産手續開始ニ於ケル場合ト同一ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第八條 本法ニ定ムル印紙代價ノ負擔ニ付テハ民事訴訟法第一編第二章第五節ノ規定ヲ準用ス

民事訴訟用印紙法ハ本法ノ規定ニ抵觸セサルモノニ限り之ヲ準用ス

○沖繩縣商法施行延期明治二十三年十月法律第百三號

朕沖繩縣ニ商法施行延期ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治二十三年法律第三十二號商法ハ沖繩縣ニ於テハ當分ノ内之ヲ施行セス

民事訴訟法ハ第十五類ニ數ス

○商業會議所條例明治二十三年九月法律第八十一號

朕商業會議所條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

商業會議所條例

第一條 此條例ニ商業者ト稱スルハ商法第四條ニ掲ケタル商取引ノ各部類ニ屬スル商人及作業人ヲ謂フ

第二條 商業會議所ヲ設立セントスルトキハ其地ノ商業者中此條例ニ依リ會員タルヲ得ヘキ者發起人ト爲リ地方長官ヲ經由シ農商務大臣ノ認可ヲ請フヘシ但發起人ノ數ハ定款ヲ以テ定ムヘキ會員ノ半數以上ナルコトヲ要ス

地方長官ハ前項ノ申請ヲ受ケタルトキハ郡若クハ市參事會ニ諮問シ其意見ヲ徵シ尙ホ自己ノ意見ヲ添ヘ農商務大臣ニ進達スヘシ

第三條 會議所設立地ノ境界ハ市町村ノ區域ニ依ルヘシ但土地商業ノ

情況ニ由リ數市町村ノ區域ヲ互ニ聯合シテ其地ニ一會議所ヲ設立スルコトヲ得

第四條 會議所ノ事務權限左ノ如シ

- 一 商業ノ發達ヲ圖リ若クハ其衰退ヲ防クニ必要ノ方案ヲ議定スルコト
- 二 商業ニ關スル法律規則ノ制定改正廢止及施行方法其他商業上ノ利害ニ關スル意見ヲ官廳ニ開申スルコト
- 三 商業ノ實況及其統計ヲ官廳ニ報告スルコト
- 四 商業ニ關スル事項ニ付官廳ノ諮問ニ應答スルコト
- 五 法律命令若クハ官ノ委任ニ依リ其地ノ公設營業所仲立人組合及商業ニ關スル諸營造物ヲ管理スルコト
- 六 仲立人ノ資格員數及手数料ヲ審査スルコト
- 七 關係人ノ請求ニ依リ其地ノ商業ニ關スル紛議ヲ仲裁スルコト

第五條 會議所設立地ノ商業者ニシテ所得稅ヲ納ムル者ハ會員ノ選舉權ヲ有ス

第六條 會議所設立地ニ於テ所得稅ヲ納ムル商業者ニシテ年齡三十歲以上ノ男子及商事會社ハ會員ノ被選舉權ヲ有ス

第七條 第五條及第六條ノ規定中會員ノ選舉權及被選舉權ニ關スル財產上ノ資格ニ付テハ農商務大臣ハ地方ノ情況ニ依リ省令ヲ以テ特ニ其所得稅ノ等級ヲ定メ又ハ他ノ國稅ヲ加フルコトヲ得

第八條 左ニ掲クル者ハ會員ノ選舉權及被選舉權ヲ有セズ

- 一 瘋癲白癡ノ者
- 二 重禁錮一年以上ノ刑ニ處セラレ又ハ商業及農工ノ業ヲ妨害スル罪、財産ニ對スル罪、風俗ヲ害スル罪及信用ヲ害スル罪ヲ犯シ刑ニ處セラレ滿期後又ハ赦免後三箇年ヲ經サル者